IESITA SITE

家下遺跡 II

—— 平成７年度茅野市横内土地区画整理事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

1996

茅野市教育委員会

家下遺跡 II

—— 平成７年度茅野市横内土地区画整理事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

1996

茅野市教育委員会

序

家下遺跡の発掘調査は、茅野市横内土地区画整理事業に伴う記録保存を前提とした緊急発掘調査です。平成6年5月より茅野市教育委員会が茅野市横内土地区画整理組合から委託を受けて調査を進めてきました。

家下遺跡は多くの遺物が採取できることから、市域の中では古くより知られていた遺跡です。周辺には古墳時代前期に位置づけられる土器の出土で著名な下蟹河原遺跡があり、諏訪神社と関わりのある達屋薙鎌神社・御社宮司社などの古社が祀られています。また、古代の官道である古東山道は、この地を経由していたとも推測されています。そのため、先学等は考古学的・歴史学的な見地より、古い時代に生活していた人々の足跡が広い範囲に亘り地下に埋もれている重要な地域と考えてきました。しかし、今日までに発掘調査が行われていないため、遺跡の実態は明らかにされていませんでした。

昨年度は遺跡範囲の北西部を発掘調査したところ、先学の指摘したとおり多くの遺構と遺物が発見されました。中心となる時代は弥生時代後期で、遺構では20軒を超える竪穴住居址や、周溝墓と呼ばれる溝で区画されたお墓などがあります。その中で最も注目されるものは、集落を囲んでいた可能性のある溝の発見でした。その内側からは数軒の竪穴住居址が発見されましたが、部分的な調査であったために溝で囲まれた集落、いわゆる環濠集落と断定できない状態でした。

今年度は昨年度に調査した地点の北東から北西部を中心に調査が行われました。その結果、昨年度に検出された溝の一部と考えられる溝と、その内側から弥生時代後期につくられた10数軒の竪穴住居址が発見されました。ここに、溝で囲まれた弥生時代後期の集落が姿を現したのです。さらに、集落は自然の谷により囲まれていることも明らかとなりました。

弥生時代は米作りを食糧生産の基盤とした時代ですが、標高が800mに近い場所にある家下遺跡から、その時代の人々の生活の足跡が数多く発見されたことは大変注目されます。また、古墳時代以降の遺構や遺物も多く発見されており、特に奈良時代の遺構と遺物は市域の歴史の中での空白となる部分を埋める重要なものです。

縄文時代の遺跡が多い市域において、弥生時代以降の遺構と遺物を埋蔵する家下遺跡は希少な遺跡です。これまでに発見された遺構と遺物は、いずれも市域のその時代の歴史を考える上で貴重な資料となるもので、それらの内容は本書にまとめられています。本書にみる発掘調査の成果が多くの人々に活用され、地域文化の向上に役立てば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び遺物整理にあたり、長野県教育委員会、茅野市横内土地区画整理組合、地元横内区をはじめ、発掘に関わった多くの皆様のご理解とご尽力により、無事終了することができましたことに対し、厚くお礼を申し上げる次第であります。

平成8年3月

茅野市教育委員会
教育長　両角　徹朗

例　言

1．本書は茅野市横内土地区画整理組合理事長小川清夫と茅野市長矢崎和広との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財調査室が実施した平成７年度茅野市横内土地区画整理事業に伴う、長野県茅野市ちの横内家下遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、茅野市横内土地区画整理組合の委託により、委託金を受けて茅野市教育委員会が平成７年度に実施した。調査の組織等の名簿は、第Ⅰ章第２節(4)調査の体制として記載してある。

3．発掘調査は平成７年６月９日から平成８年３月４日まで行い、出土品の整理及び報告書の作成は平成８年２月１日から３月19日まで文化財調査室内整理室において行った。

4．本報告書の執筆は小池岳史が担当した。

5．本報告に係る出土品と諸記録は、茅野市文化財調査室が収集・保管している。

6．発掘調査から報告書作成に至る過程で、中山誠二氏、佐野　隆氏、宮坂光昭氏、樋口昇一氏、会田　進氏、百瀬長秀氏、原　明芳氏、巨居直之氏、尾見智志氏、小山岳夫氏、千野　浩氏、直井雅尚氏、山下誠一氏の諸氏よりご教示を賜った。ここに記して厚くお礼を申し上げたい。

7．本書の掲図は以下のとおりに作成した。

(1) 遺構及び遺物の実測図の縮尺は各図中に示した。

(2) 遺構実測図中の水糸高は海抜高（m）である。

(3) 指定のないスクリーントーンは次のとおりである。

焼土範囲　　炭化物範囲　　粘土範囲

耕作土　　自然流路

目　　次

序　　茅野市教育委員会教育長　両角　徹朗

例　言

目　次

第Ⅰ章　調査経緯……1

第1節　発掘調査に至る動機……1

第2節　発掘調査の経過……1

(1)　発掘調査の方法と経過……1

(2)　発掘調査日誌(抄)……2

(3)　遺物整理と報告書の作成……3

(4)　調査の体制……4

第Ⅱ章　調査区の地形……5

第1節　地形概観……5

第2節　調査区の地形と検出された遺構……5

第Ⅲ章　発掘された遺構と遺物……8

第1節　遺　　構……8

(1)　竪穴住居址……8

弥生時代……8

古墳時代……28

奈良時代……40

平安時代……41

(2)　竪穴状遺構……42

(3)　掘立柱建物址……45

(4)　周 溝 墓……46

(5)　土　　坑……56

(6)　溝　　址……62

(7)　列　　石……70

(8)　柱 穴 群……73

(9)　焼 土 址……75

(10)　埋設土器……76

(11)　谷部と弥生時代後期遺物包含層……76

(12)　古墳時代前期面……79

(13)　古墳時代中期面と盛土……79

(14)　畝状遺構……80

(15)　方形竪穴……80

第Ⅳ章　調査の成果と課題……98

第1節　環濠集落について……98
(1)　環濠集落の概要……98
(2)　環濠集落の成立要因……99
第2節　周溝墓について……100
(1)　周溝墓の概要……100
(2)　千曲川流域の周溝墓……101
(3)　家下遺跡の周溝墓の位置づけ……102
第3節　弥生時代後期の土器について……103
(1)　弥生時代後期の土器の概要……103
(2)　家下遺跡の土器様相……103
(3)　弥生時代後期の中での時間的な位置づけ……104

第Ⅰ章　調査経緯

第１節　発掘調査に至る動機

平成４年１月、道路交通機関及び街区公園などの整備を行い、健全な市街地環境の向上を計ることを目的とする横内土地区画整理事業が開始された。対象面積は28.1haである。事業主体者は横内土地区画整理組合で事務局は茅野市都市開発課である。

区画整理事業地内には周知の埋蔵文化財包蔵地である家下遺跡（市遺跡登録番号No.110）が所在するため、その保護措置については平成５年度まで開発側と協議を重ねてきている。その中で、事業により遺跡の破壊がやむなきに至る箇所については、事業前に発掘調査を実施して記録保存を図ることで合意に至っている。合意内容の概要は、

①平成６年度から９年度に事業に先立ち発掘調査を実施し記録保存を図る。

②発掘調査に伴う経費は事業者が負担する。

③発掘調査は茅野市教育委員会に委託する。

である。

平成７年度の発掘調査は上記の合意内容に基づき実施された平成６年度から継続調査である。発掘調査計画書では約5,600㎡以上を発掘調査の対象とし、発掘調査に係る経費は34,000,000円である。平成７年６月１日付７教文第16－２をもって、茅野市横内土地区画整理組合理事長小川清夫と茅野市長矢崎和広との間で、埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を締結した。平成７年12月８日付７教文第87－２で変更委託契約を締結し、実質調査面積は3,550㎡で、経費は24,900,223円となった。

第２節　発掘調査の経過

(1)　発掘調査の方法と経過

現場作業は平成７年６月９日より平成８年３月４日にかけて実施した。まず重機を用いて表土を剥ぐ作業を行う。浅いところでは現況地盤から約30cmで土器が出土し始め、露呈された面が撹乱を受けているのか否かを調査区の断面で確認しながら調査面の設定を行った。

遺構の調査は微高地の北縁辺部にあたるⅠ区より開始した。道路敷きの限られた範囲の調査であるため、遺構の大半はその一部が表れているに過ぎない。これに腐土と地山の色調が類似し識別が難しいことも重なって、遺構プランの確認すら思うように進まなかった。そこで、調査区の断面下に幅50cmほどのトレンチを入れ、断面で地山と考えられない範囲を捉え、これと平面で考えられた遺構の範囲をすり合わせることで、遺構のプランを確定し調査を進める方法をとった。

そのような調査を行う中、幾つかの注目される遺構が検出された。微高地の中央部にあたるＫ・Ｌ区より11軒の弥生時代後期の竪穴住居址が検出され、微高地の北縁辺部にあたるⅠ区では断面Ｖ字形の溝址が検出された。昨年度の調査において該期の環濠集落の存在が示唆されていたが、今年度の調査でその存在が明らかにされた。また、環濠集落が機能を失った後、該期遺構の周溝墓が竪穴住居址を切って構築されることも明らかにされた。微高地と断層崖との間にあたるＡ・Ｍ・Ｎ区では、断層崖に沿う浅い谷が確認された。ここでは弥生時代後期の遺物包含層、古墳時代前期面とした焼土址と土器集中、古墳時代前期と考えられる木

製品や木材が自然か人工か判断できない溝址よりまとまって検出された。なお、古墳時代前期と考えられる木製品などが出土した溝址は冬場に検出された。遺物の性質上、調査を続けることが困難であると判断されたため、この部分の調査は次年度へ繰り越すこととなった。

遺跡の南部にあたるP・Q区では、塚ノ越古墳の伝承がある現五味姓祝神の北西側において、遺物の出土状態に祭祀的な様相が窺える古墳時代前期と中期の竪穴住居址が検出された。さらに、その上層に焼土址を伴う古墳時代中期面とした整地面？と、版築とも考えられる盛土が確認された。

遺構の位置をおさえるための基準点は平成6年度と同様の任意座標である。そのY軸をN-68°-Eとし、10m間隔を基本にグリッド杭を設置した。グリッドの最小単位は一辺2mで、グリッドの呼称は南西隅を基準とし、X軸にアラビア数字、Y軸にアルファベットとカタカナを用いた。

遺構の図化作業は遺構の掘り下げと並行して行った。縮尺は1：20を基本とした。平面図の作成には平板を用いた。土層断面図は遺構が調査区断面にかかる場合はその断面を図化し、他は遺構の平面形により設定したベルトの断面を図化した。平板で作成された平面図を正確につなぎ合わせ、1：100の遺構全体図を作成するためにラジコンを用いて航空測量を実施した。撮影は調査の進捗状況にあわせて11月、12月、1月に実施した。遺構全体図は撮影された図化素図に平面図を合成し、これを縮小して作成した。

遺跡の見学会は平成7年11月19日に行った。参加者は地元を中心に約100名であった。

(2) 発掘調査日誌(抄)

6月9日　微高地の北縁辺部にあたるI区より表土剥ぎ作業を開始する。

6月16日　微高地の北西から西側にあたるJ区の表土剥ぎ作業で、自然地形とみられる西側への落ち込みが確認される。

6月20日　微高地と断層崖の間にあたるA・N区の表土剥ぎ作業で、断層崖方向への落ち込みが確認される。土層断面からみて、自然地形（谷）であると考えられる。

6月24日　A区の谷部より古墳時代前期のS字甕が数個体まとまって出土する。

7月3日　朝から降り続く雨が午頃に強さを増し、横内保育園裏の沙が決壊する。N区からA区へ水が流れ込み、調査区全体が水没する。

7月18日　I区より微高地の北縁辺部に掘削された断面V字形の溝址が検出される。これを第34号溝址とする。昨年度に検出された第17号溝址につながる可能性が高く、環濠となる溝址と考えられる。

7月21日　微高地の中央付近にあたるK区より、円形基調の周溝墓が検出される。これを第7号周溝墓とする。また、本址の周囲で弥生時代後期と考えられる数軒の竪穴住居址が確認される。その中の1軒は長辺が9mを超す大形の竪穴住居址である。

8月1日　八ヶ岳総合博物館より博物館実習生2名を受け入れる。

8月2日　尖石考古館より博物館実習生1名を受け入れる。

8月10日　古墳時代後期の第46号住居址の調査で、カマドに掛けられたままの長胴甕が検出される。

8月25日　遺跡の南側にあたるP・Q区の表土剥ぎ作業を開始する。

9月4日　A区の谷部の調査を再開する。古墳時代前期のS字甕が出土した面より数基の焼土址が検出される。

9月13日　微高地の中央から南側にあたるB区の表土剥ぎ作業を開始する。

10月9日　K区で検出された数本の溝址は、竪穴状遺構とした掘り込みを囲み掘削されている。その状態からみると周溝墓とも考えられる。現時点で3基が確認される。

10月13日　K区の調査区西断面にかかり、弥生時代後期の溝址が検出される。掘削方向は概ね南北で、断面形がV字形であることからみると、昨年度に検出された第15号溝址につながる可能性が高い。弥生時代後期の第34号溝址と断面形態が類似し、溝址の内側から該期の竪穴住居址が検出されていることからみて、微高地につくられた該期の集落は環濠集落であると考えられる。

10月20日　K区で検出された数本の溝址と竪穴状遺構を周溝墓と認定する。第8～11号周溝墓とした4基の内、3基で主体部が残存する。また、第8号と第9号、第10号と第11号が周溝を共有する。

11月7日　L区からJ区にかけて再度表土剥ぎ作業を行う。

11月9日　J区で確認された自然地形とみられる西側への落ちロで、直径1mほどの土坑が検出される。

11月16日　L区より検出された周溝墓を第12号周溝墓とする。K区とL区で検出された周溝墓は7基となり、微高地につくられた周溝墓が群をなしてつくられていたことが明らかとなる。すべての周溝墓は弥生時代後期の竪穴住居址を切り構築されている。第1回目のラジコンによる航空測量を実施する。

11月19日　午後よりK・L区を中心に遺跡見学会を実施する。

11月24日　K区、第10号周溝墓の主体部より、碧玉製勾玉・ガラス小玉・銅製品（小形の銅鋲？）と人骨片が出土する。

12月2日　P・Q区の遺構検出作業を開始する。弥生時代後期の竪穴住居址1軒、古墳時代前期の竪穴住居址2軒ほか、竪穴住居址の可能性がある掘り込みが数基検出される。

12月4日　Q区より本遺跡初の古墳時代中期の竪穴住居址が検出される。これを第65号住居址とする。

12月14日　第2回目のラジコンによる航空測量を実施する。

12月26日　第65号住居址より、瑪瑙製とみられる勾玉とガラス小玉が1点ずつ出土する。

12月28日　Q区より本遺跡で2軒めとなる平安時代の竪穴住居址が検出される。これを第67号住居址とする。

1月4日　Q区より中世以降とみられる数基の方形竪穴が検出される。また、本遺跡で2軒めとなる奈良時代の竪穴住居址が検出される。これを第69号住居址とする。

1月9日　微高地と断層崖間の谷部にあたるM区より、自然か人工か判断できない溝址が検出される。溝址内からは建築材や農具などを含む木材が1ヶ所よりまとまって検出された。

1月26日　第3回目のラジコンによる航空測量を実施する。

1月31日　航空測量の補測を行い、平成7年度の発掘調査を終了する。

(3)　遺物整理と報告書の作成

室内での整理作業に着手したのは、平成8年2月に入ってからである。発掘調査と並行して作業を進めていないため、遺物の洗浄が終了したのは2月の中旬である。それから、約1ヶ月間で報告書を作成せざるを得ない状況となり、報告書の内容を遺構中心とすることにした。

土器の整理作業は遺構の時期決定となり得る土器の選び出しを優先し、注記、接合、復元作業を行った。そのため、他の土器についてはひととおり目を通すことはできても、注記するまでには至っていない。また、石器の整理作業は土器の整理を優先したため、報告書には1点も図示することができず、一覧表にまとめることすらできていない。各遺構から出土した石器については、各遺構の記述の中で、極力、器種と点数を載せるように努めたので、そちらをご覧頂きたい。

なお、今年度の報告書には、微高地と断層崖間に入る谷部（M区）の自然科学分析の報告を掲載する予定

であったが、紙幅の関係により次年度の報告書へ譲ることにした。

(4) 調査の体制

調査主体者　両角昭二（平成７年４月１日～平成７年９月30日）
　　両角徹朗（平成７年10月１日～）　　（教育長）

事　務　局　宮下宏雄（教育次長）
　　文化財調査室　両角英行（室長）　鵜飼幸雄（係長）　守矢昌文　小林深志（尖石考古館学芸員兼務）　大谷勝己　功刀　司　小池岳史　百瀬一郎　小林健治　柳川英司　大月三千代

調査担当者　小池岳史（報告書担当）

調査補助員　牛山姫子　堀内　潭　矢嶋恵美子

発掘調査・整理作業協力者
　　牛山和男　牛山昭雄　小川博由　木村桂子　小島文代　小平晶江　小松厚子　小松純子
　　酒井みさを　永田　和　柳沢　侃　柳沢友治

発掘期間中、事業主体者である茅野市横内土地区画整理組合、茅野市都市開発課におかれては、埋蔵文化財保護に対して深いご理解とご協力を賜った。調査の実施にあたっては、地元横内地区をはじめとする多くの方々にご助言を頂いた。記してお礼を申し上げる次第である。

第Ⅱ章　調査区の地形

第１節　地形概観

家下遺跡は北八ヶ岳を水源とする市内最大河川の上川により形成された沖積低地に立地する。沖積低地は中央自動車道諏訪インターチェンジに続く面で、ＪＲ中央東線茅野駅や市街地が広がる沖積段丘面とは、糸魚川―静岡構造線の西縁に平行した諏訪構造帯と呼ばれる新しい断層群により形成された断層崖によって画される。

これまでの発掘調査の成果によると、遺跡の地形は断層崖下に入る崖に沿った浅い谷と、それに接する微高地及び小規模な凸地からなる地形と考えられる。崖下の谷部では、現在でも崖下から湧き出す湧水を利用し、水田が営まれている。発掘調査では弥生時代後期の土器を包含する粘質土層に植物遺体が確認されているように、古代以降においても谷部には湧水により涵養されていた湿地帯が広がっていたと考えられる。微高地及び小規模な凸地は、崖下から湧き出す湧水などが東から西へと流れたことにより、形成された地形であると考えられる。

第２節　調査区の地形と検出された遺構

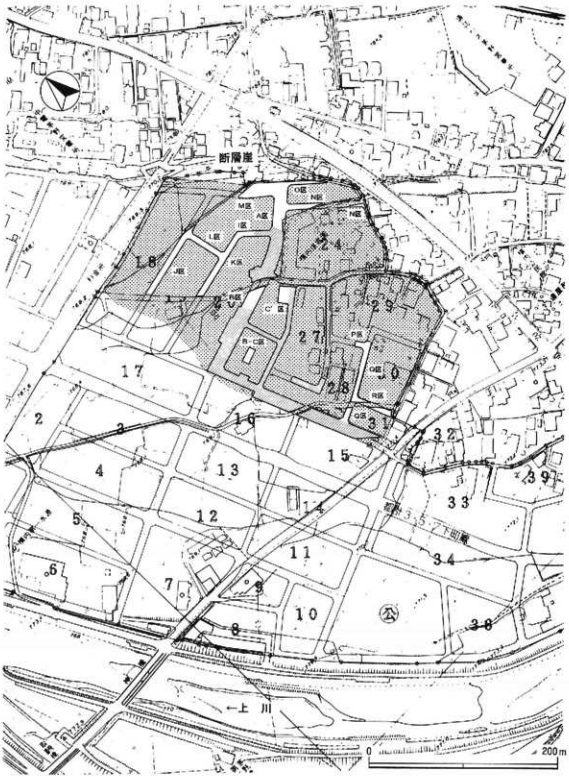
今年度に発掘調査の対象となる箇所は、遺跡範囲の中で①北東から北西部と、②南部とに大別される。

①　北東から北西部

微高地の中央付近から断層崖下の谷部にあたる。微高地では弥生時代中期後半から古墳時代後期の遺構が検出された。弥生時代後期の環濠集落と、環濠集落を切り構築される周溝墓（第６～12号）の検出は注目される。谷部では現代から近世と考えられる４～５枚の耕作土層下に、断層崖に平行する幾筋もの流路（古墳時代前期から中世）による堆積層と、平安時代から中世と考えられる耕作土層が確認され、それらの層下に弥生時代後期から古墳時代前期の水田土壌とも考えられる黒色粘土層が確認された。また、微高地と谷部との間（微高地の裾付近）では、古墳時代前期の土器集中と焼土址が同一面より近接して検出された。

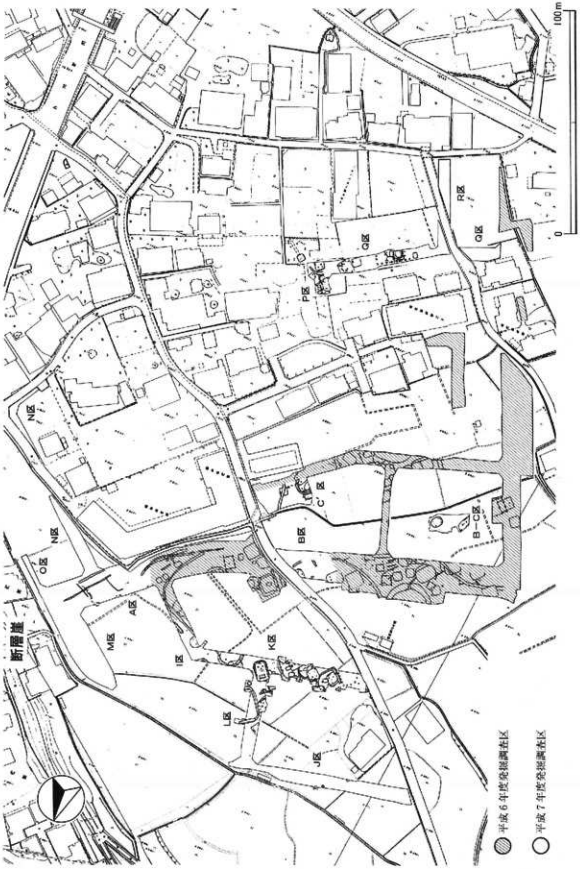
②　南部

小規模な凸地の中央付近から南へ緩傾斜する地形にあたる。凸地付近では、弥生時代後期（第66号住居址）、古墳時代前期（第63・64号住居址）、古墳時代中期（第65号住居址）の竪穴住居址などの遺構と、古墳時代中期の整地面とも考えられる面（古墳時代中期面とした面）や、その面を直に覆うことなどから関連性があると考えた盛土が検出された。ここから南への傾斜地では、奈良時代（第69号住居址）と平安時代（第67号住居址）の竪穴住居址、近世の掘立柱建物址（第12号）や方形竪穴（第５～８号）などが検出された。平安時代と奈良時代の竪穴住居址との間には、洪水により二次堆積した砂礫層や含礫泥層が確認され、弥生時代中期後半から平安時代の磨滅した土器が出土した。近世の遺構より西側では、竪穴住居址などの遺構は検出されず、現代の耕作土を含む数枚の耕作土層以下は、上川による供給と考えられる含砂礫泥層となる。



家下遺跡範囲　　平成6年度発掘調査区　　平成7年度発掘調査区

第1図　遺跡周辺の地形と調査区（1/4,000）



第2図　発掘調査区域（1/1,700）

第Ⅲ章　発掘された遺構と遺物

第1節　遺　　構

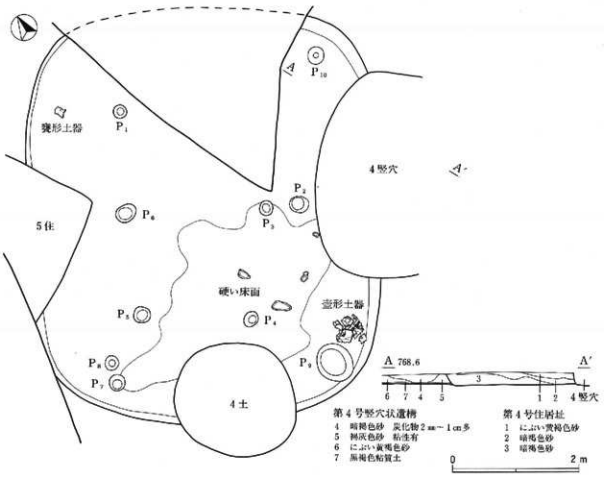
(1)　竪穴住居址

弥生時代

第4号住居址（第3図）

遺構　今年度は住居址の東コーナー付近を調査した。残存する壁の高さは12cmで、床面からの立ち上がりは緩い。床面は中央に向かい緩傾斜し、軟弱である。壁に近い位置より検出されたP10（18cm）は、位置的にみて主柱穴とは考えられない穴である。

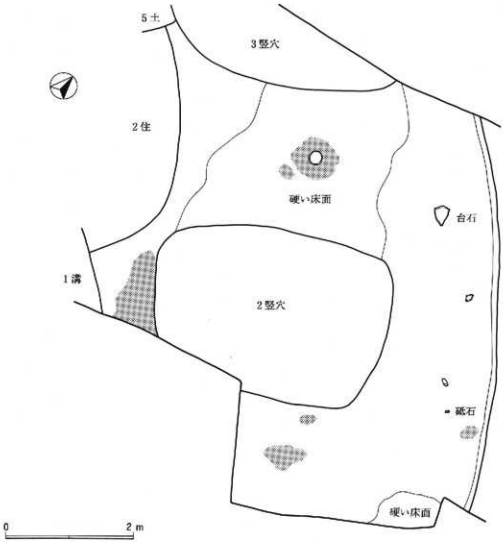
遺物　出土した土器は弥生時代後期のみである。器種には甕形土器、壺形土器、赤彩された高杯形土器か鉢形土器がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものはない。



第3図　第4号住居址（1/60）

第6号住居址（第4・57図）

遺構　今年度は住居址南側の床面の一部を調査した。昨年度の調査では床面の所々に焼土址が検出され、覆土が埋め戻された状態であると考えられたことから、火を受けた後に埋め戻された住居址とされている。今年度の調査でも床面から2ヶ所の焼土址が検出され、覆土も埋め戻された状態であると考えられた。



第4図　第6号住居址（1/60）

遺物　出土した弥生時代後期の土器は820gである。器種には甕形土器、壺形土器、高杯形土器か鉢形土器がある。赤彩された土器は95gで、壺形土器？、高杯形土器か鉢形土器がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものはない。

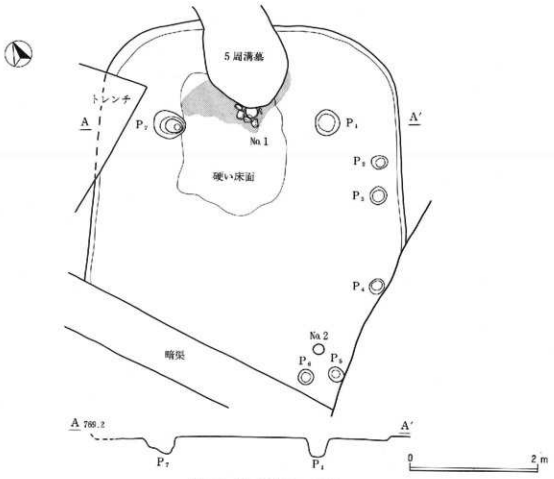
第10号住居址（第5・57図）

遺構　今年度は住居址の北側から西側を調査し、北コーナー部の壁と西壁の一部が検出された。残存する壁の高さは10～20cmで、床面からの立ち上がりは緩い。床面は炉の周囲が硬化し、壁に向かい軟弱となる。P_7（25cm）は主柱穴で、中段のある掘方である。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は270gである。器種には甕形土器、壺形土器がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものはない。

第28号住居址（第6・57図）

遺構　今年度は住居址の北側から東側を調査した。平面形が隅丸長方形、長軸は7.75mである。残存する壁の高さは3～6cmである。床面は礫層の露出により荒れているが、貼床は確認されていない。検出された穴はP_{19}（49cm）・P_{11}（45cm）・P_{12}（45cm）・P_{13}（48cm）・P_{14}（8cm）で、P_{16}～P_{13}は主柱穴である。P_{12}とP_{13}は重複し、新旧関係は内側が古く外側が新しい。また、P_{10}とP_{11}も重複し、P_{10}が貼床されることから、



第5図　第10号住居址（1/60）

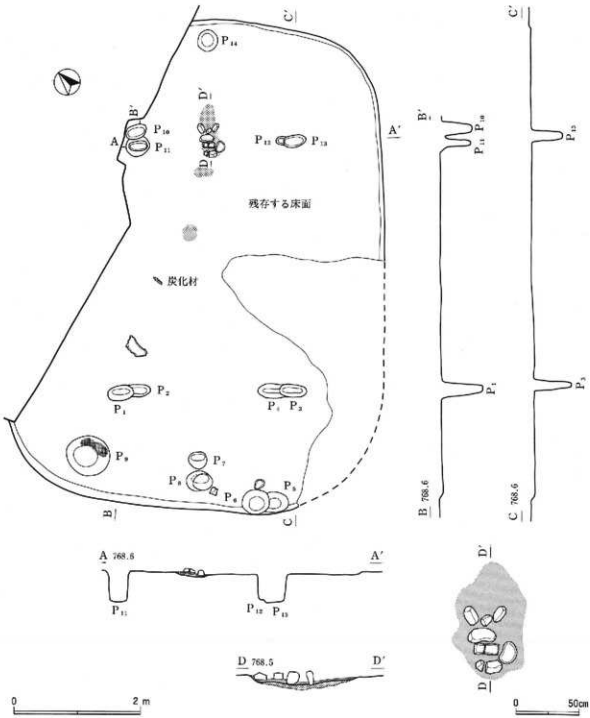
外側が古く内側が新しいこととなる。炉は住居址の長軸線上で、主柱穴を結ぶ線上に位置する。浅い掘方内に7個の礫が据えられているが、基本形は奥壁側が開口するコの字形の石囲炉であろう。炉底は礫が据えられた範囲より、一回り広い範囲が約3㎝の厚みで焼けている。その状態からみて、礫が据えられる前は地床炉として使用されていたことが考えられる。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は540ｇである。器種には甕形土器、壺形土器、高杯形土器があり、鉢形土器とみられるものもある。赤彩された土器は15ｇで、高杯形土器のほか、鉢形土器とみられるものがある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものはない。石器は炉石に使用されていた角柱礫で、敲打痕と擦痕がみられる。

第43号住居址（第7・57図）

遺構　C′区のヌ・ネ－94グリッドを中心に位置する。第11号掘立柱建物址・第5号周溝墓と重複し、どちらの遺構より古い遺構である。南側には第5号竪穴状遺構が近接する。

平面形は楕円形で、平面規模は短辺3.7ｍ、長辺は推測で4.9ｍ、長軸方向はN-73°-Eと考えられる。壁は北・西・東壁が検出された。残存する壁の高さは10～13㎝で、床面からの立ち上がりは緩い。床面下には約5㎝の厚みで砂が貼床される。壁下は軟弱であるが、炉の周囲に炭化物が散布する硬化面がある。検出された穴はP_1（19㎝）・P_2（13㎝）である。P_1は位置と規模からみて主柱穴と考えられる。P_2はP_1より規模が小さい穴である。仮に本址が6本の主柱穴からなる住居址ならば、P_2は位置的にみて主柱穴となる可能性がある。炉は第5号周溝墓の周溝の掘削により一部が破壊される。位置は住居址のほぼ中央と考えられ、形態

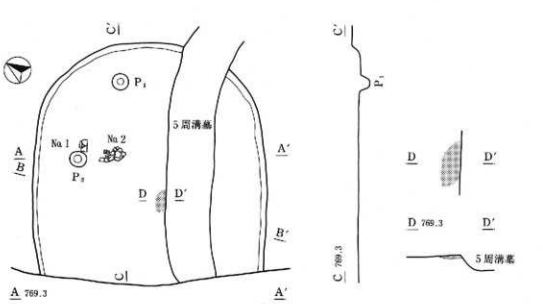


第６図　第28号住居址（1/60）・炉址（1/30）

は残存状態からみて地床炉である。炉底が平均３cmの厚みで焼けている。

覆土は単一層である。堆積状態からみて、自然堆積であると考えられる。

遺物　出土した土器は弥生土器のみで、その量は2,890ｇである。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは、甕形土器３個体、壺形土器１個体である。甕形土器１個体（No.１）と壺形土器（No.２）は床面直上より潰れた状態で出土した。壺形土器は欠損部が二次加工され擬似口縁となるため、壺形土器を転用した鉢形土器とするべきなのかもしれない。器種には甕形土器と、壺形土器があり、甕形土器が主体をなす。赤彩された土器の出土はない。石器は黒曜石剥片が２点出土した。

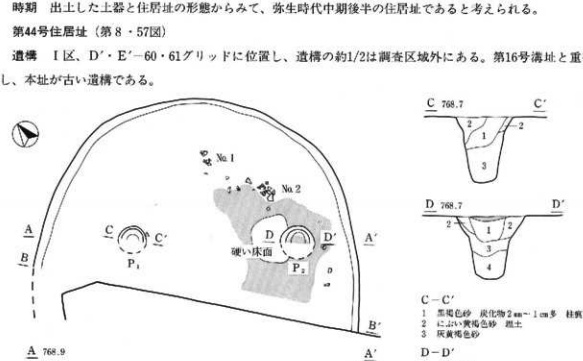


第7図　第43号住居址（1/60）・炉址（1/30）

時期　出土した土器と住居址の形態からみて、弥生時代中期後半の住居址であると考えられる。

第44号住居址（第8・57図）

遺構　Ⅰ区、D′・E′−60・61グリッドに位置し、遺構の約1/2は調査区域外にある。第16号溝址と重複し、本址が古い遺構である。



第8図　第44号住居址（1/60）・柱穴（1/40）

平面形は楕円形、平面規模は短辺5.4m、長軸方向はN-38°-E、またはS-38°-Wと考えられる。残存する壁の高さは10～14cmで、床面からの立ち上がりは緩い。床面下には不均一な厚みで砂が貼床される。P_3の周囲と炭化物の散布面は硬化するが、他は軟弱である。主柱穴はP_1(54cm)とP_2(58cm)で、住居址プランから推測された位置へのトレンチで検出された。P_1の断面では柱痕と思われる垂下層が確認された。炉は調査区域外にあるものと考えられる。

覆土は4層に分層された。覆土のベースは砂で、シルトと粗砂を多く含む特徴がある。各層は壁側から流れ込んだ状態であることからみて、自然堆積とみて良いと思われる。

遺物　出土した土器は弥生土器のみで、その量は1,475gとなる。図上での器形復元も含めて、土器の器形が窺えるものは、甕形土器(№1)と壺形土器(№2)が各1個体である。共に床面直上から潰れた状態で出土した。赤彩された土器は45gあり、主体は高杯形土器か鉢形土器である。1個体であるが、壺形土器の可能性のあるものが含まれる。器種には甕形土器、壺形土器、高杯形土器か鉢形土器があり、主体は甕形土器である。石器はP_1より砥磨された可能性がある堆積岩片が1点出土した。

時期　出土した土器と住居址の平面形からみて、弥生時代中期後半の住居址であると考えられる。

第45号住居址(第9・58図)

遺構　K区に位置し、ル・レー55・56、ロ－56グリッドを中心に検出された。遺構の約1/2は調査区域外にある。本址の北から南コーナーは第7号周溝墓と重複し、本址が古い遺構である。

本址の形態は炉址、或いは炉に関わる焼土址と主柱穴の位置からみて、平面形は隅丸長方形、平面規模は長辺6.4m、長軸方向はS-65°-Wと考えられる。残存する壁の高さは約30cmである。西壁は床面からの立ち上がりは緩く、他の壁は直立に近い。床面下には約5cmの厚みで砂が貼床される。焼土址の周囲から西壁までの床面は硬化するが、他は軟弱で凹凸がある。検出された穴はP_1(73cm)・P_2(64cm)・P_3(14cm)・P_4(21cm)・P_5(19cm)・P_6(41cm)・P_7(10cm)・P_8(29cm)・P_9(22cm)・P_{10}(18cm)である。主柱穴は位置と規模からみてP_1・P_2と考えられる。平面形は長楕円形で、柱穴の長軸は住居址それとほぼ直交する。炉址は主柱穴の位置などからみて、調査区断面にかかる焼土址である可能性が高いが、形態は不明としておく。焼土の厚みは約2cmである。炉と奥壁の間にかけて、床面より5～10cm浮いた位置から粘土の塊が出土した。

覆土は7層に分層された。各層は壁側から流れ込むような堆積のため、覆土は自然堆積と考えられる。しかし、覆土より出土した粘土の塊をみると、一概に自然堆積として良いものなのか躊躇する。

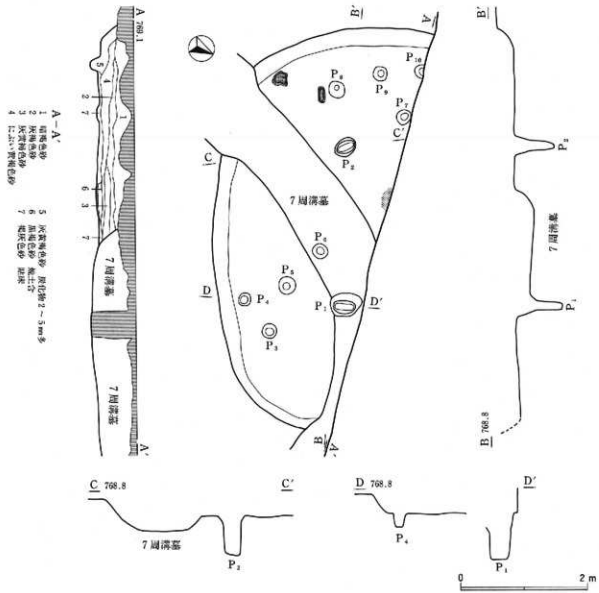
遺物　出土した土器は弥生土器のみで、西壁下付近を中心に2,370gが出土した。この中で、図上で器形が窺えるものはない。赤彩された土器は20gあり、高杯形土器か鉢形土器とみられる。器種には甕形土器、壺形土器、高杯形土器か鉢形土器があり、主体は甕形土器である。石器は凹石が1点、堆積岩を素材とした器種不明のブランクが1点、同じく制作途中の破損品とみられるものが1点出土した。また、接合する可能性のある砥石製品が1点出土した。

時期　土器の多くは床面から浮いた状態で出土しており、遺構に直接伴うものとは言い切れない。しかし、出土した大半の土器は弥生時代後期と考えられるため、本址は後期の住居址であると考えられる。

第47号住居址(第10・58・59図)

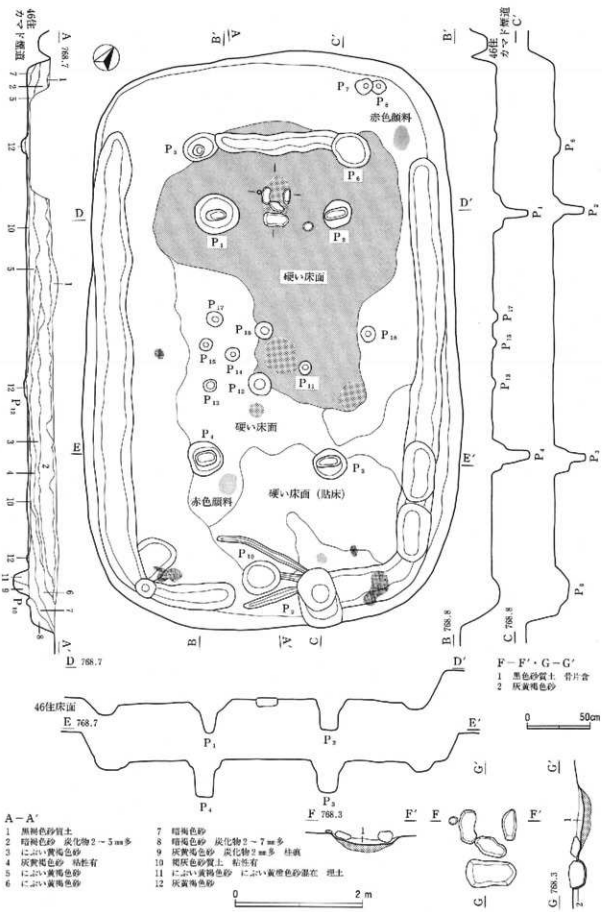
遺構　K区とL区が接する地点に位置し、モ～ユ－52～56グリッドを中心に検出された。古墳時代後期の第46号住居址に切られ、時期が不明な第167号土坑と重複する。

本址は今年度の調査において住居址全体が調査できた数少ない遺構の1つである。規模はプランの明らかなものや、大略が窺える弥生時代の住居址の中で最大である。平面形は隅丸長方形、平面規模は9.05×5.9



第９図　第45号住居址（1/60）

m、長軸方向はN-33°-Wである。残存する壁の高さは38～45cmで、床面からの立ち上がりは直立に近い。奥壁とみられる北壁と、出入口部とみられる南壁下中央部を除く各壁下に、幅32～65cm、深さ６～11cmの溝状の掘り込みがある。底面は凹凸が顕著で、硬化していない。覆土と堆積状態からみて、ある時期に何らかの理由で埋め戻されたものと考えられる。このような溝状の掘り込みは、昨年度に調査した弥生時代後期の第20号住居址と、今年度に調査した第54号住居址にみられる。床面下には約２cmの厚みで砂が貼床される。床面の硬さは移植ゴテへの当たり方で、①軟弱な床面（壁周り）、②やや硬化した床面、③硬化した床面（炉の周囲）に識別できた。床面に炉址とは別の焼土址が３箇所あり、それぞれ約２cmの厚みで焼けている。検出された穴はP_1（55cm）・P_2（50cm）・P_3（50cm）・P_4（59cm）・P_5（26cm）・P_6（12cm）・P_7（17cm）・P_8（13cm）・P_9（25cm）・P_{10}（23cm）・P_{11}（40cm）・P_{12}（5cm）・P_{13}（3cm）・P_{14}（8cm）・P_{15}（8cm）・P_{16}（6cm）・P_{17}（9cm）である。主柱穴はP_1～P_4である。P_{10}は壁際に掘られた穴で、土層断面において壁側へ約20°の傾斜で柱痕が観察されたこと、位置が炉址と対峙することからみて、梯子を受ける穴と考えられる。炉址は住居址の長軸線上に位置し、P_1とP_2を結ぶ線より僅かに外側に出る。形態は北壁側の礫を欠くコの字形の石



第10図 第47号住居址（1/60）・炉址（1/30）

囲炉である。炉の内部は5㎝の厚さで焼けている。床面から僅かに高い位置より、粘土が4ヶ所、赤色顔料が2ヶ所で検出された。共に約5㎝の厚みである。

覆土は12層に分層された。各層の色調と砂粒子の多寡をみる限り、覆土は自然堆積と考えて良さそうである。しかし、炉東脇の床面から約25㎝上に炭化材を含んだ黒褐色砂質土が散布するため、覆土の一部は埋め戻された可能性がある。

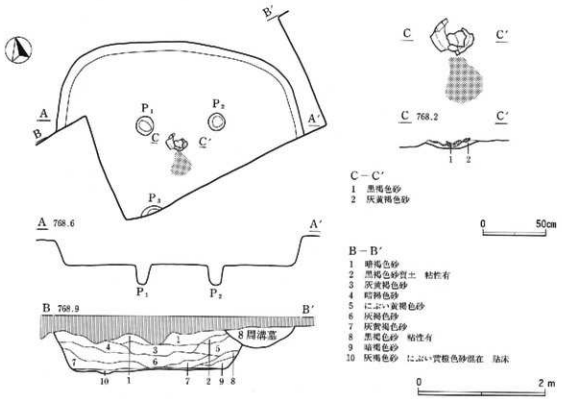
遺物　出土した弥生時代後期の土器は17,080ｇである。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは、甕形土器が2個体、壺形土器が1個体である。器種には甕形土器、壺形土器、甑形土器、小形手ずくね土器があり、主体は甕形土器である。赤彩された土器は900ｇあり、器種は高杯形土器（脚部2点）、鉢形土器、壺形土器がある。P_3では赤彩された小形の壺形土器とみられる土器が出土した。石器は砥石が1点、台石（作業面に光沢のある摩耗痕があり、変色している）が1点、敲石が3点、磨製石鏃2点（破損品1点、未製品1点あり）が出土した。また、器種不明で穿孔途中の堆積岩片、同じく研磨痕のある堆積岩片があり、堆積岩剥片の出土も多い。他に黒曜石剥片・砕片が3点と、製品か否か不明な軽石が出土した。

時期　出土した土器と住居址の形態からみて、弥生時代後期の住居址であると考えられる。

第48号住居址（第11・59図）

遺構　K区、マ−56、ミ−57グリッドに位置し、遺構の大半は調査区域外にある。第49号住居址・第8号周溝墓と重複し、本址はどちらの遺構より古い遺構である。

本址の形態は壁の輪郭、炉と主柱穴の位置からみて、平面形は隅丸長方形、短辺は3.9ｍ、長軸方向はN−16°−Eと推測される。残存する壁の高さは40〜50㎝で、床面からの立ち上がりは直立気味である。床面下には3〜6㎝の厚みで砂が貼床される。炉の周囲は叩き締めたように硬化するが、壁下は軟弱である。検出された穴はP_1（30cm）・P_2（33cm）・P_3（12cm）である。P_1とP_2は炉に近接するが、主柱穴と考えられる。炉の



第11図　第48号住居址（1/60）・炉址（1/30）

位置はP_1とP_2を結ぶ線上より内側にある。形態は埋甕炉で、3個体の甕形土器が用いられる。構造は外側に2個体の甕形土器を立たせ、内部に別個体の甕形土器を数くものである。外側の土器は口縁部から胴上半部を正位と逆位に埋設し、奥壁側と考えられる北側には土器を埋設していない。内部の土器は胴部の内面を上にして敷いている。焼土はそれぞれの土器の下で確認され、地山が約2㎝の厚みで焼けている。

覆土は10層に分層された。調査の所見では第6層から第9層は自然堆積した層であると考えられるが、それより上層は自然堆積であるのか埋め戻しであるのか、どちらとも言えない状態である。

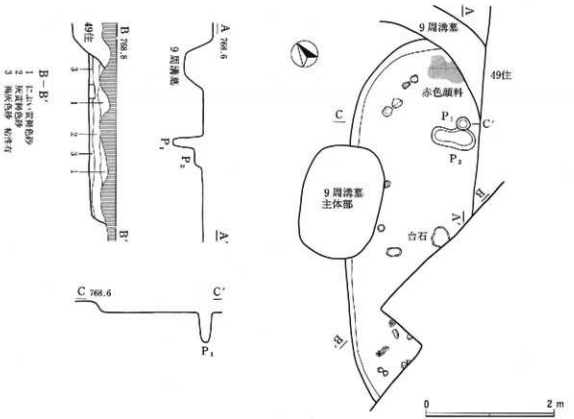
遺物　出土した土器には弥生時代後期と後世に混入したものがあり、弥生時代後期の土器は3,720gである。図上での器形復元も含め土器の器形が窺えるものは、炉に用いられた3個体の甕形土器である。赤彩された土器は300gあり、壺形土器の底部と高杯形土器がある。器種には甕形土器、壺形土器、高杯形土器があり、主体は甕形土器である。石器は敲石が4点出土した。また、磨製石鏃などの素材となる堆積岩片が出土した。

時期　出土した土器からみて、弥生時代後期に帰属する住居址であると考えられる。

第50号住居址（第12・60図）

遺構　K区、ハ・ヒ－55グリッドに位置し、遺構の大半は調査区域外にある。第49号住居址、第9号周溝墓と重複し、本址はどちらの遺構より古い遺構である。

本址の形態は壁の輪郭からみて、平面形は隅丸長方形、長辺は6.5m前後と推測される。長軸方向は西壁が長辺と考えられるため、N-35°-E、またはS-35°-Wを示すこととなる。残存する壁の高さは10～25㎝で、床面からの立ち上がりは緩い。床面は壁下で軟弱な状態であるが、中央に向かい徐々に硬化する。床面に密着して拳大から人頭大の礫が幾つか出土した。その中には調査区断面にかかる台石がある。また、北壁近くの床面直上では赤色顔料と思われる物質が出土した。その範囲は55×35㎝で、厚みは約5㎝である。また、南西



第12図　第50号住居址（1/60）

側の床面直上より、粘土が2ヶ所で検出された。検出された穴は、主柱穴と考えられるP_1（48cm）と南側に重複するP_2（15cm）である。P_2はP_1との重複状態と覆土からみて、主柱穴に関係する穴と思われる。炉は調査区域外に位置するのであろうが、古墳時代後期の第49号住居址に削平されている可能性が高い。

覆土は3層に分層された。堆積状態からみて自然堆積と考えられる。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は680gである。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものはない。赤彩された土器は20gで、高杯形土器か鉢形土器である。器種には甕形土器、壺形土器、高杯形土器か鉢形土器がある。石器は敲石が1点と、台石（作業面に光沢のある摩耗痕がある）が1点出土した。

時期　住居址の形態と、出土した土器からみて、弥生時代後期の住居址であると考えられる。

第51号住居址（第13・60図）

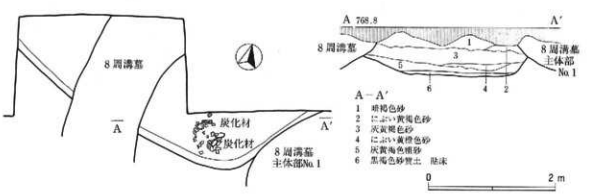
遺構　K区、フ−52、ヘ−53グリッドを中心に位置する。第8号周溝墓と重複し、本址が古い遺構である。

遺構の大半は調査区域外にある。そのため、壁の輪郭からみて平面形が隅丸長方形となる可能性を指摘できる以外、住居址形態の記述は不可能である。残存する壁の高さは平均38cmで、床面からの立ち上がりは直立に近い。床面下には約8cmの厚みで砂質土が貼床される。床面は硬下が特に軟弱で、住居址の中央に向かい次第に硬化する。調査面積が狭いためか、柱穴等の穴や炉址は検出されていない。

覆土は6層に分層された。各層は水平近い堆積であるが、砂の色調と粒子に均一性のない部分が多いため、覆土は埋め戻されたと考えられる。このことは、床面直上から第4層間より出土した炭化材と円礫、さらに破砕されたような状態で出土した多くの土器からも考えることができる。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は3,810gである。その中には先述した状態で一括出土した甕形土器と壺形土器が各1個体ある。どちらも図上で器形が窺えるものである。赤彩された土器は40g出土した。壺形土器の可能性があるものも含まれるが、多くは高杯形土器か鉢形土器と考えられる。器種には甕形土器、蓋形土器と考えられるものが各1点と壺形土器があり、主体は甕形土器である。混入品として条痕文系土器が1点出土した。石器は台石（作業面に光沢のある摩耗痕があり、縁辺には擦痕がある）が1点と、磨製石鏃などの素材となる堆積岩片に研磨痕のあるものが2点出土した。

時期　床面直上より出土した土器からみて、弥生時代後期の住居址であると考えられる。



第13号　第51号住居址（1/60）

第52号住居址（第14・60図）

B区の東端、ヒ−76グリッドに位置する。遺構の1/2以上は既設の道路により破壊される。

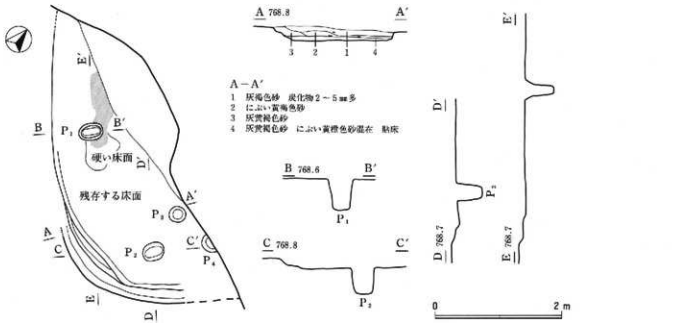
本址の形態は壁の輪郭と柱穴の位置、貼床の範囲からみて、平面形は隅丸長方形、長軸方向はN−43°−Wと推測される。残存する壁の高さは7〜10cmである。壁周りの調査において、壁に接して床面（柱穴検出面）

との高さが異なる2枚の面が検出された。両面ともに幅は狭く、高低差は5cm程度である。両面は床面まで掘り下げを行わない、同心円状に拡張された面の可能性がある。床面下には平均7cmの厚みで砂が貼床される。P_5の南側では床面が硬化し、その北側には炭化物が散布する。検出された穴はP_1(47cm)・P_2(42cm)・P_3(17cm)・P_4(19cm)である。P_1・P_2は上面形が楕円形、底面形が長楕円形である。これまで本遺跡で検出された同様の穴は、掘り込まれる位置等からみて主柱穴か梯子を受ける穴と考えられている。そこで、P_3は主柱穴か梯子受け穴のどちらかであり、P_1は主柱穴であると考えたい。炉は検出されていない。

覆土は4層に分層された。貼床を除く3層は壁側から流れ込んだ状態で堆積する。

遺物　調査範囲が狭く、しかも底面近くまで削平されていたことも影響してか、遺物の出土量は少ない。出土した弥生時代後期の土器は320gである。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものはない。器種には甕形土器と壺形土器がある。赤彩された土器の出土はない。石器の出土はなく、磨製石鏃などの素材となる堆積岩片が2点出土した。

時期　出土した土器は少ないながら、すべて弥生時代後期のものである。そして、住居址の平面形が隅丸長方形と考えられることからみて、本址は弥生時代後期の住居址であると考えられる。



第14図　第52号住居址（1/60）

第54号住居址（第15・60・61図）

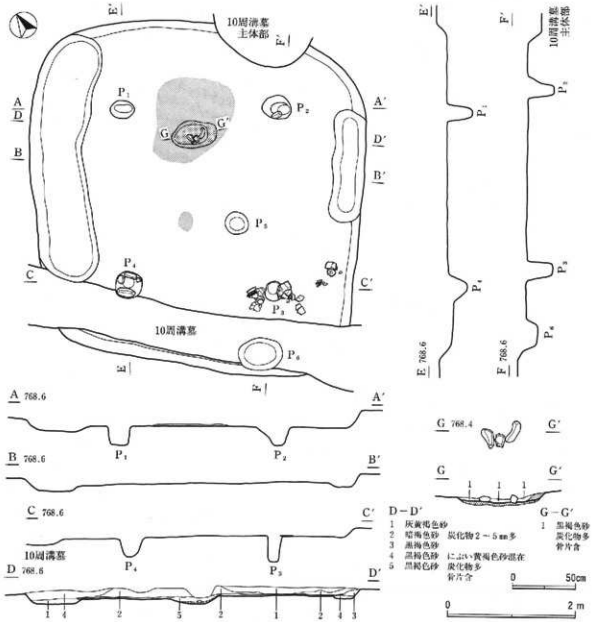
遺構　K区、ト・ナ－52・53グリッドを中心に位置する。第10号周溝墓と第174～176号土坑等からなる柱穴群と重複し、本址はそれらの遺構より古い遺構である。

平面形は歪んだ隅丸方形、平面規模は5.5×5.45m、長軸方向はN-34°-Eを示す。残存する壁の高さは17～28cmである。南壁は地山礫層が壁となる。東壁と西壁の直下には溝状の掘り込みがあり、東壁は幅約50cmで床面からの深さは約5cm、西壁は幅約85cmで床面からの深さは約8cmである。掘り込みの覆土上面に床面が確認されたことからみて、床面構築の際に埋め戻されたことが考えられる。東側から北側の床面は安定した砂層に作られるが、南側から西側は礫層が露出するため荒れている。床面下に貼床は確認されていない。検出された穴はP_1(31cm)・P_2(31cm)・P_3(43cm)・P_4(29cm)・P_5(21cm)・P_6(19cm)である。主柱穴は対角線上に位置するP_1～P_4である。P_2は覆土の上層に人頭大の円礫が入り、P_4は柱の根固めと考えられ

る円礫が壁周りに詰め込まれる。炉の位置はP_1とP_2を結ぶ線上より僅かに内側にある。形態は不整なコの字形の石囲炉で、奥壁と考えられる北壁側の礫を欠く。内部は礫に接して約3cmの厚みで焼けており、その上面は厚さ約8cmの炭化物層に覆われる。

覆土は5層に分層された。第1・2層の上層は耕作土直下にあるためか硬く締まる。第3層は壁側から流れ込む状態であるため自然堆積と考えられる。

遺物　本址では土器を主とした多くの遺物が得られた。出土した弥生時代後期の土器は約10,575gである。P_1の東側とP_2の周囲では、床面から数cm上にかけて甕形土器と甑形土器が各1個体一括で出土した。図上での器形復元も含め上器の器形が窺えるものは、甕形土器が4個体、甑形土器が1個体である。赤彩された土器は25gで、高杯形土器か鉢形土器のどちらかである。器種には甕形土器、壺形土器、甑形土器、高杯形土器か鉢形土器があり、主体は甕形土器である。また、甕形土器の脚台部（2点のうち1点は弥生時代後期のものか不明）も出土した。混入品として条痕文系土器7点が出土した。石器は敲石が1点、刃部の作り出し



第15図　第54号住居址（1/60）・炉址（1/30）

と考えられる調整がなされた石器（礫器？）が1点、打製石鏃の破損品（茎部）1点、研磨された器種不明石器の破損品が1点出土した。ほかに、黒曜石砕片1点、磨製石鏃などの素材となる堆積岩片が出土した。

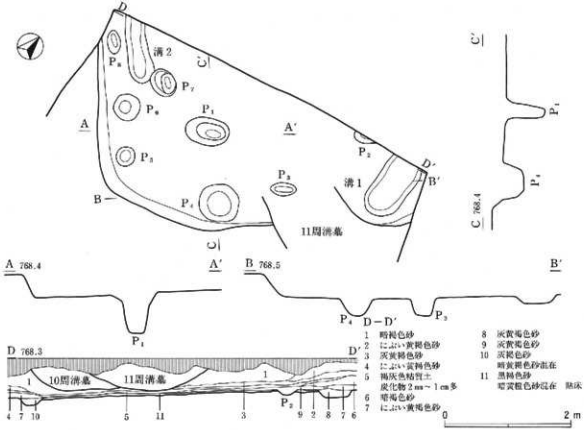
時期　一括出土した土器と住居址の形態からみて、弥生時代後期の住居址であると考えられる。

第55号住居址〔第16・61図〕

遺構　K区、ヌ・ネ−50グリッドを中心に位置し、遺構の大半は調査区域外にある。第10・11号周溝墓と重複し、本址はどちらの遺構より古い遺構である。

本址の形態は壁の輪郭と主柱穴と考えられる穴の位置等からみて、平面形は隅丸長方形、長軸方向はN−45°−Wと考えられる。平面規模は長辺が推測し難いが、短辺は6.0m前後と推測される。残存する壁の高さは17〜32cmで、床面からの立ち上がりは西壁で直立に近く、東壁へ向かい緩くなる。床面下には壁下を除き、約4cmの厚みで砂が貼床される。主柱穴間の貼床部分は硬化し、他は軟弱である。検出された穴はP_1(64cm)・P_2（計測不可）・P_3(27cm)・P_4(33cm)・P_5(14cm)・P_6(24cm)・P_7(36cm)・P_8(13cm)である。主柱穴は位置と形態からみてP_1・P_2と考えられる。P_3の平面形は定かでないが、P_1と同様に長楕円形と考えられる。P_3は住居址の長軸線上に位置し、平面形が主柱穴に類似する。住居址の短辺と考えられる南壁側に傾斜していないが、住居址内における位置からみると梯子を受ける穴の可能性がある。P_4は貯蔵穴の可能性がある穴で、覆土上層から拳大の円礫が5個まとまって出土した。P_4〜P_8では土器が埋められたと考えられる状態で出土した。溝1・2は長辺となる東・西壁に平行し、溝1が幅55cmで深さ13cm、溝2が幅32〜36cmで深さ12cmである。溝の覆土は第47・54号住居址と同様に埋め戻しと考えられる。炉は調査区域外にあるものと考えられる。

覆土は11層に分層された。穴の覆土に埋め戻しと考えられるものもあるが、基本的には自然堆積と考えら



第16図　第55号住居址（1/60）

れる。第５層は炭化物を多く含む粘土質の層で水成堆積した層と考えられる。第５層とP_1～P_5・P_6の覆土には２㎜～１㎝大の炭化物が多量に含まれる。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は5,730ｇである。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは、甕形土器が２個体（P_2出土の小型の甕形土器あり）、壺形土器が１個体である。赤彩された土器は80ｇで、高杯形土器と鉢形土器がある。器種には甕形土器、壺形土器、甑形土器、高杯形土器、鉢形土器がある。石器は磨製石鏃の破損品が１点、磨製石鏃の未製品が１点、研磨痕のある堆積岩片が１点、使用痕のある黒曜石片が１点出土した。

時期　出土した土器と住居址の形態からみて、弥生時代後期の住居址であると考えられる。

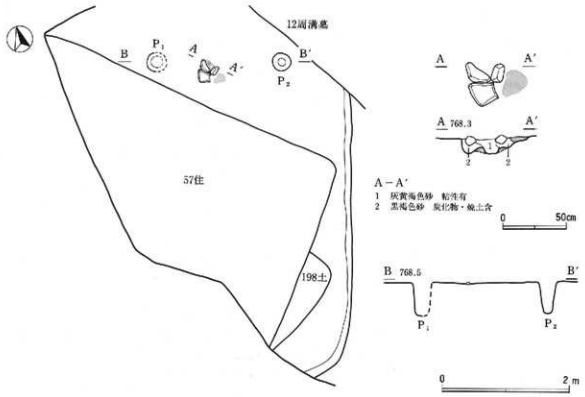
第58号住居址（第17・62図）

遺構　L区、ヤ－46～48グリッドを中心に位置する。第57・62号住居址、第12号周溝墓と重複し、第62号住居址より新しく、第57号住居址と第12号周溝墓より古い遺構である。

本址の形態は残存する壁の輪郭からみて、平面形は隅丸長方形、平面規模は6.5×4.0ｍ程、長軸方向はN－17°－Eと推測される。残存する壁の高さは平均５㎝で、床面からの立ち上がりは不明瞭である。床面は壁側から中央に向かい皿状に窪み、全体的に軟弱な状態である。検出された穴はP_1（54cm）・P_2（50cm）である。他の住居址に比べ炉に近接するが、位置的にみて共に主柱穴と考えられる。炉は主柱穴を結ぶ線上に位置する。形態は３個の礫が配された石囲炉である。南側に据えられた扁平な礫と東側の柱状礫の内側が煤けていることからみて、２つの礫は構築時のままであると考えられる。しかし、西側の礫の内側は煤けておらず、下面に煤けた痕跡が認められることから、礫は動かされたことが考えられる。

本址の土層については、覆土観察のためのベルトを設けなかったので提示できる断面図はない。

遺物　出土した遺物は弥生時代後期の土器のみで、その量は750ｇである。図上での器形復元も含め、土器



第17図　第58号住居址（1/60）・炉址（1/30）

の器形が窺えるものはない。赤彩された土器は15gで高杯形土器か鉢形土器のどちらかと思われる。器種には甕形土器、壺形土器、高杯形土器か鉢形土器がある。

時期　出土した土器と住居址の形態からみて、弥生時代後期の住居址であると考えられる。

第59号住居址（第18・61図）

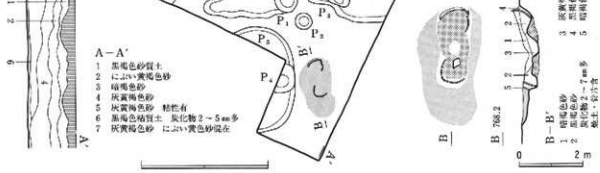
遺構　L区、メ-50グリッドを中心に位置する。本址は第46号溝址と重複するが、覆土が類似することなどの理由により新旧関係は明らかでない。

本址の形態は壁の輪郭と炉の位置からみて、平面形は隅丸長方形、長軸方向はN-47°-Eと考えられる。残存する壁の高さは平均45cmで、床面からの立ち上がりは直立に近い。壁下を除く床面には約3cmの厚みで黒褐色粘質土が水平に堆積する。本址では柱穴状の穴、楕円形の掘り込み、溝状の掘り込みが検出された。柱穴状の穴はP_1（30cm）・P_2（29cm）・P_3（23cm）・P_4（19cm）である。P_1とP_3は住居址の長軸と考えられる線上付近にあるため、棟持柱となる穴であろうか。P_5（8cm）は炉の北西脇にある楕円形の掘り込みで、炉との位置関係からみると住居址に伴うものとは考え難い。しかし、本址に貼床されないこと、住居址断面で住居址覆土への掘り込みが確認できないことからみて、本址に伴う穴と考えている。溝状の掘り込みは、奥壁と考える東壁に平行する。掘り込みの覆土に床面とみられる分層線が引けたこと、掘方が雑であること、覆土が埋め戻しと考えられることからみて、掘り込みは住居址の掘方であると考えられる。炉は住居址の長軸と考えられる線上で、奥壁から約1.5m内側にある。形態は埋甕炉で、2個体の甕形土器が埋設される。奥壁側の土器は胴部の約2/3、内側の土器は胴部の約1/2を欠く。その在り方は、本遺跡で検出された埋甕炉としては特異であるため、炉の作り替えによる重複を疑った。しかし、平面と断面の観察で土器に切り合いが確認されなかったことから、土器の内面を正対させて埋設した炉であると考えられる。炉の周囲に炭化物と焼土が散布し、上面は厚さ約5cmの炭化物層に覆われる。

覆土は7層に分層された。各層の堆積状態や遺物の出土状態からみて、覆土は埋め戻しと考えられる。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は4,600gである。器種には甕形土器、壺形土器、高杯形土器がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは2個体の甕形土器である。赤彩された土器は90gで、高杯形土器の脚部、高杯形土器か鉢形土器の口縁部がある。石器は器種不明の打製石器が1点出土した。また、加工された可能性がある軽石、磨製石鏃の素材となる堆積岩片が出土した。

時期　出土した土器と住居址の形態からみて、弥生時代後期の住居址であると考えられる。



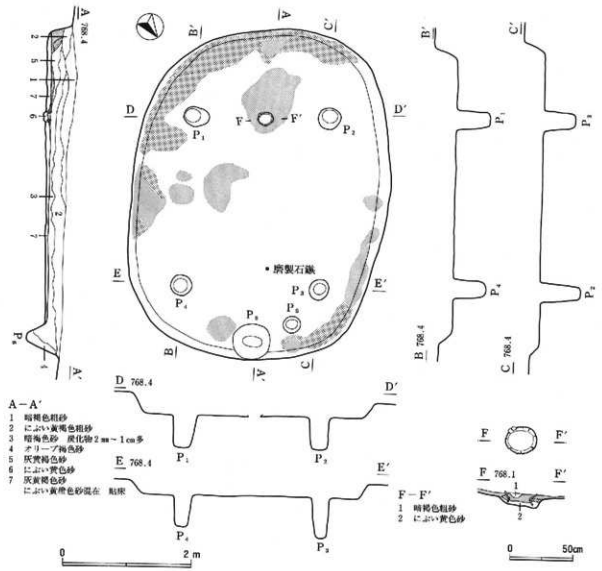
第18図　第59号住居址（1/60）・炉址（1/30）

第60号住居址（第19・62図）

遺構　B－C区、P～R－86グリッドを中心に位置する。本址の上面は平成６年度の調査で自然流路１・２とした流路内堆積層に覆われる。

平面形は南コーナー部がやや潰れた不整な楕円形で、平面規模は5.3×4.05ｍ、長軸方向はS－37°－Wを示す。残存する壁の高さは15～33㎝である。床面からの立ち上がりは短辺で緩く、長辺で直立に近い。床面下には３～７㎝の厚みで砂が貼床される。検出された穴はP_1（53㎝）・P_2（51㎝）・P_3（64㎝）・P_4（52㎝）・P_5（40㎝）・P_6（30㎝）である。主柱穴はP_1～P_4で、配列は整然としている。P_6の掘方は、他の穴とは異なるすり鉢形を呈する。壁側に傾斜していないが、住居址内での位置からみて、梯子を受ける穴であると考えられる。炉は住居址の長軸線上で、P_1とP_2を結ぶ線上にある。形態は埋甕炉で、胴下半部を欠く甕形土器が逆位に埋設される。

本址は焼火災住居址と考えられる住居址である。その根拠は長辺となる東壁から南壁の壁際と北コーナーの壁際を中心に、多量の炭化物・材と焼土が検出されたことによる。両者は混在せず、床面近くに焼土が堆積し、その上に炭化物・材が遺存する。



第19図　第60号住居址（1/60）・炉址（1/30）

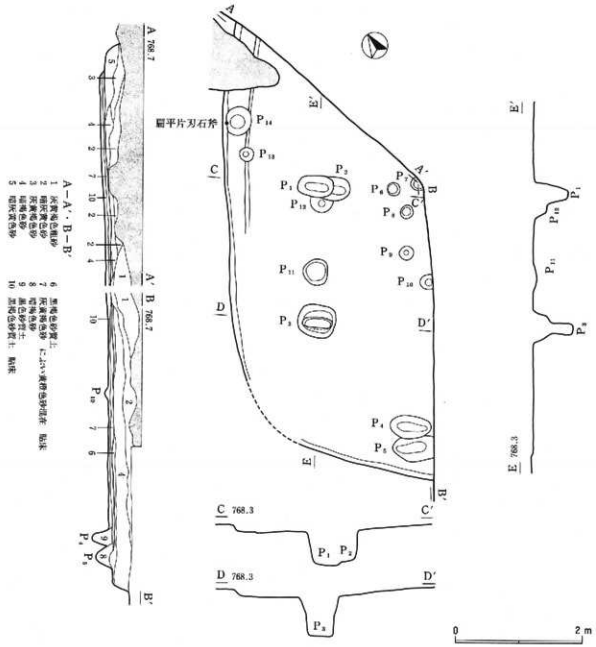
覆土は８層に分層された。覆土の一部に堆積の乱れがあるが、全体的にみて覆土は自然堆積と考えられる。第７層は炉の周囲に散布した炭化物の層で、壁際に見られた炭化物・材とは無関係のものと考えられる。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は1,005ｇである。器種には甕形土器、壺形土器、高杯形土器か鉢形土器がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは、炉体土器として使用された甕形土器のみである。赤彩された土器は55ｇで、高杯形土器か鉢形土器の口縁部である。石器は磨製石鏃、砥石、敲石が１点ずつ出土した。また、黒曜石砕片が１点と磨製石鏃の素材となる堆積岩片が出土した。

時期　出土した土器と住居址の形態からみて、弥生時代後期の住居址であると考えられる。

第61号住居址（第20・62図）

遺構　Ｂ－Ｃ区、Ｖ～Ｘ－87グリッドを中心に位置する。本址の北側は昨年度の調査で確認された自然流路１の一部と考えられる落ち込みに切られている。



第20図　第61号住居址（1/60）

本址の形態は壁の輪郭と柱穴の位置などからみて、平面形は隅丸長方形、短辺は6.0m程、長軸方向はN-32°-Eと推測される。長辺と考える西壁が調査区域外へ向かい直線的に延び、調査区域外にあると推測される主柱穴の位置などからみると、第47号住居址に匹敵する大型住居址の可能性がある。残存する壁の高さは3～9cmである。壁に関して記すべきことは、西壁北側の調査で住居址の拡張前の壁と考えられる段が検出されたことである。残存する壁の高さは4cmである。この段は南壁の内側で検出されていないため、住居址の拡張は部分的であった可能性がある。拡張作業は覆土の堆積状態からみて、内側から外側へなされたことが考えられる。新旧の床面には3cm程の厚みで砂質土および砂が貼床される。新しい床面は所々に硬化面があるが、古い床面は軟弱でP_1の南側は砂礫層の露出により荒れている。検出された穴はP_1(54cm)・P_2(48cm)・P_3(62cm)・P_4(47cm)・P_5(39cm)・P_6(4cm)・P_7(4cm)・P_8(4cm)・P_9(8cm)・P_{10}(12cm)・P_{11}(6cm)・P_{12}(22cm)・P_{13}(16cm)・P_{14}(17cm)である。主柱穴はP_1～P_3と考えられる。P_1とP_2は住居址の拡張に伴う柱穴の建て替えで、掘る位置が僅かにずれたのであろう。P_5とP_4は住居址の長軸線上で重複し、新旧関係はP_5が新である。平面形と位置からみて梯子を受ける穴か棟持柱のどちらかであろうが、他の住居址での類例からみて、梯子を受ける穴であると考えておきたい。炉は調査区域外にあると考えられる。

覆土は8層に分層された。第1層から第6層は壁際から流れ込んだ状態で堆積し、各層の砂は粒子の大きさと色調が均一に近い状態である。よって覆土は自然堆積と考えられる。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は715gである。器種には甕形土器、壺形土器、高杯形土器か鉢形土器がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものはない。赤彩された土器は15gで、高杯形土器か鉢形土器の破片である。混入品として条痕文系土器が1点出土した。石器は扁平片刃石斧が1点出土した。出土地点は新しい住居址の壁とP_{14}の境で、出土レベルは床面上約4cmである。

時期　出土した土器の大半が弥生時代後期の土器であること、住居址の形態は弥生時代後期に普遍的な形態であることからみて、本址は弥生時代後期の住居址であると考えられる。

第62号住居址（第21図）

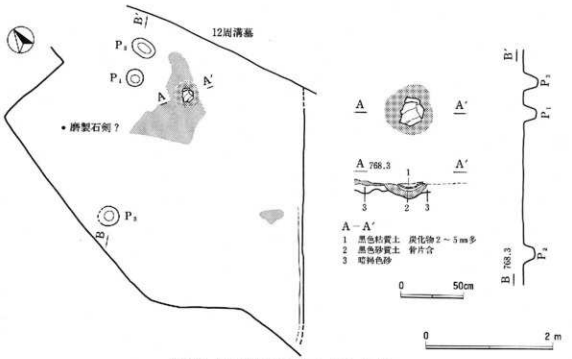
遺構　L区、ヤ-46・47グリッドに位置する。第57・58号住居址、第12号周溝墓、第198号土坑と重複し、本址はすべての遺構より古い遺構である。

本址の形態は長辺とみられる東壁、炉、主柱穴と考えられる2基の穴の位置からみて、長辺は5.5m前後、短辺は4.3m前後、長軸方向はN-37°-Eと推測される。検出された壁は第57号住居址と第12号周溝墓までの約1.2m間で、残存する壁の高さは約10cmである。床面は第57号住居址の床面より僅か5cm下から検出された。床面に硬化した面はない。検出された穴はP_1(22cm)・P_2(20cm)・P_3(24cm)である。主柱穴は位置と規模からみてP_1・P_2と考えられる。炉の位置は住居址の奥壁側であると考えられる。形態は土器敷炉で、浅い掘方内に内面を上にして土器が敷かれる。土器は甕形土器と考えられるもので、胴部の約1/3が遺存する。炉の頻繁な使用のためか、土器の内面は剥離が著しい。土器の厚さは約5cmの厚みで焼けている。

覆土は粗砂主体の砂層で、炭化物を多く含む特徴がある。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は5,350gである。器種には甕形土器、壺形土器、高杯形土器があり、主体は甕形土器である。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは、炉に使用されていた土器と壺形土器の2個体である。なお、第57号住居址の床面直下から、器壁の厚い弥生時代後期の土器がまとまって出土した。赤彩された土器は1点で、高杯形土器の脚部と考えられる。石器は断面が菱形に研磨された器種不明石器（磨製石剣？）の破損品が床面の直上より出土した。

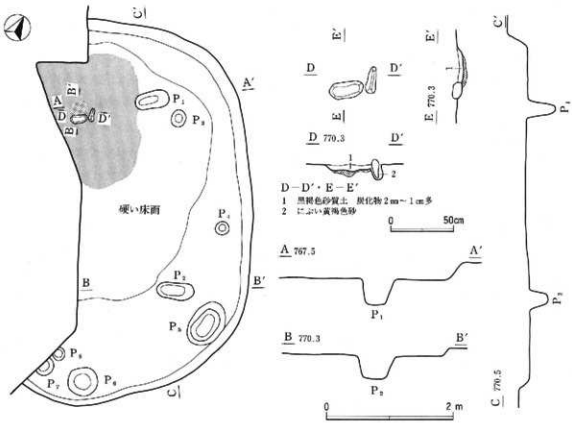
時期　出土した土器、炉の形態、他遺構との切り合い関係からみて、弥生時代後期の住居址と考えられる。



第21図　第62号住居址（1/60）・炉址（1/30）

第66号住居址（第22・62図）

遺構　P区、ナー139・140グリッドに位置する。第64号住居址・第49号溝址と重複し、第64号住居址より



第22図　第66号住居址（1/60）・炉址（1/30）

占い遺構である。第49号溝址との新旧関係は不明である。

本址の形態は壁の輪郭からみて、平面形は楕円形、平面規模は長辺6.1m、短辺は推測で5.0m前後、長軸方向はN-42°-Wと考えられる。残存する壁の高さは平均33cmで、床面からの立ち上がりは直立に近い。床面は壁下を除き、移植ゴテを跳ね返すほど硬化する。特に主柱穴の内側が顕著である。検出された穴はP_1(45cm)・P_2(38cm)・P_3(11cm)・P_4(15cm)・P_5(35cm)・P_6(26cm)・P_7(21cm)・P_8(20cm)である。主柱穴はP_1・P_2と考えられる。P_2の深さはP_1に対し10cmほど浅いが、P_2の深さに達しないうちに礫層に当たったためであろう。P_6は住居址の長軸線上に位置する。壁は直立するが、炉に対峙し壁に近接する位置にあることからみて、梯子を受ける穴と考えられる。P_8は位置的にみて貯蔵穴であろうか。炉は住居址の長軸線上に位置する。形態は扁平な礫がLの字形に配された石囲炉で、この状態が構築当初のままであるとの所見が得られている。

覆土は床面に近くなるほど層の乱れが顕著となる。床面直上の層は埋め戻しと考えられる。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は3,410gである。器種は甕形土器、壺形土器、高杯形土器、鉢形土器があり、主体は甕形土器である。内外面に強い刷毛調整痕を残す甕形土器1個体が一括で出土したが、図上での器形復元は困難である。赤彩された土器は180gあり、壺形土器、高杯形土器、高杯形土器か鉢形土器とみられる口縁部がある。石器は敲石が1点出土した。なお、本址内より（覆土か覆土下面の撹乱層か、出土層位が特定できない）、3mmの孔が穿たれた骨製とみられる製品が出土した。

時期　出土した土器と住居址の形態からみて、弥生時代後期の住居址であると考えられる。

古墳時代

第63号住居址（第23図）

遺構　Q区、ナ～ヌ－144グリッドに位置し、遺構の約1/3は調査区域外にある。確認面で検出された第6号焼土址は、本址より時期の新しい遺構と考えられる。

平面規模は短辺が4.2m、長辺が4.8m前後と推測される。よって平面形は長方形となり、長軸方向はN-53°-Wをさす。残存する壁の高さは北・東壁で平均45cmである。床面からの立ち上がりは急でやや内反り気味である。周溝は北コーナー部を除き壁下に掘削される。北コーナー部では床面レベルで地山の礫が露出するため、周溝は掘削されなかったと考えられる。周溝は幅14～22cm、床面からの深さは12～17cmである。床面下には住居址の中央付近に限り約3cmの厚みで砂が貼床される。周溝の脇は軟らかいが、炉と台石の周囲は硬化する。検出された穴はP_1(39cm)・P_2(33cm)・P_3(22cm)・P_4(15cm)で、主柱穴はP_1・P_2と考えられる。炉は住居址の中央より南壁寄りにある。形態は炉縁石を伴う地床炉である。炉縁石は2個の柱状礫で、深さ約9cmの掘方に据えられる。炉内には炭化物が厚く堆積し、地山が約2cmの厚みで焼けている。

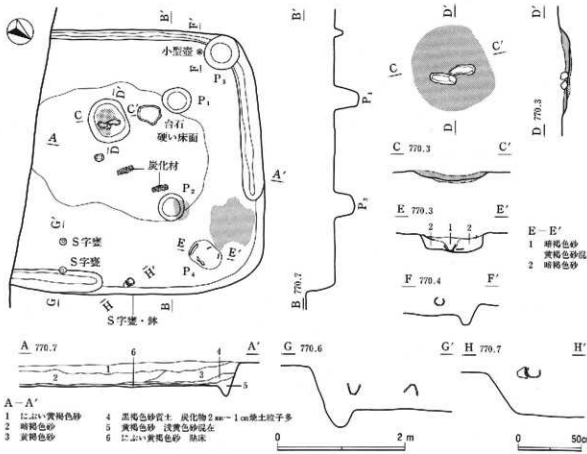
本址で注目されることは、①P_1に埋設された土器と、②覆土内から出土した土器の遺存状態と出土状態である。①の土器は壺の底部、S字甕の胴下半部と別個体の脚台部である。掘方の平面形は楕円形、規模は直径50×45cm、深さ20cmで礫層を掘り抜いている。埋設状態は壺の底部を正位に置き、その直上にS字甕の脚台部を逆位に置く。そして、土器の縁が床面に出るようにS字甕の胴下半部を逆位に埋設する。土器の内部と周囲に焼けた痕跡はなく、炭化物の散布もないことからみて、炉とは考えられない。②の土器はS字甕の脚台部が4点、小型壺と鉢が各1点である。鉢が完形である以外、他は土器の一部であったり、部分的に手が加えられたものである。S字甕の脚台部は胴部との接合部以下が遺存し、小型の壺は胴下半部に焼成後に穿孔された径4mmの孔があり、口縁部が打ち欠かれている。出土状態は4点のS字甕脚台部の内、2点は入子にされ、鉢に被して出土した。このS字甕の脚台部は横位で、正位の鉢にきちんと付けられている。その

状態からみて両者は置かれたものと考えられる。他の土器の出土状態も正位か逆位のどちらかであるため、それらも置かれたものと考えられる。

覆土は6層に分層された。第4層は焼土塊と炭化材を多量に含む層である。調査の所見として、住居址内で何かが焼かれたことにより形成された層であると考えられる。

遺物　出土した古墳時代前期の土器は4,290gである。器種には甕（S字甕、小型甕）、壺（二重口縁壺、直口壺）、小型丸底鉢、高杯がある。図上での器形復元も含め土器の器形が窺えるものは、S字甕、甕、小型甕、小型壺、鉢、高杯が各1個体と、S字甕脚台部が4個体である。石器は台石（作業面に光沢がある摩耗痕がある）が1点出土した。その他に調整加工のある黒曜石片が1点出土した。

時期　出土した土器と住居址の形態からみて、古墳時代前期の住居址であると考えられる。



第23図　第63号住居址（1/60）・炉址・土器出土状態（1/30）

第64号住居址（第24・62図）

遺構　P区とQ区が接する地点で、ナ－141グリッドに位置する。第66号住居址、第6号竪穴状遺構と重複し、どちらの遺構より新しい遺構である。

平面形は方形と考えられ、平面規模は東西で3.9mである。炉を通る軸方向はS-50°-Wを示す。残存する壁の高さは平均30cmで、周溝からの立ち上がりは直立に近い。周溝は壁下を全周し、幅13～20cm、床面からの深さは8～12cmである。床面の大半は第66号住居址の覆土内に造られている。床面はほぼ平らで、炉の北東部に硬化面がある。検出された穴はP1（21cm）・P2（24cm）・P3（15cm）・P4（12cm）・P5（19cm）・P6（9cm）・P7（11cm）・P8（13cm）・P9（18cm）・P10（16cm）である。どの穴も主柱穴とするには小振りな穴であり、主柱穴は特定できない。P2～P5は炉を通る軸線上にあり、対となる可能性がある。壁に近接した位置に

あるので、出入口部の施設に関わる穴であろうか。炉は住居址の中央から南西寄りで、形態は炉縁石を伴う埋甕炉である。炉体土器は胴中央部から下半部を欠く甕である。土器の下に1cm程の厚みで粗砂が敷かれているが、どのような意味を持つのだろうか。粗砂に焼けた痕跡はなく、土器内にも焼土は見当たらない。焼土は炉の直上に散布する炭化物層内で僅かに確認されたに過ぎない。

本址では覆土出土の土器の遺存状態と出土状態が注目される。出土した土器は2個体の高杯脚部（No.1・2）で、共に杯部と裾部を欠き、柱状の脚部のみ遺存する。土器の破損部を観察したところ、高杯は壊されたことが考えられる状態であった。このような土器の遺存状態は、器種こそ異なるが、本址の東に隣接する第63号住居址出土の土器に類似する。また、出土状態も覆土からで、壁際のものほど床面より高い位置から出土した点も類似する。ただ本址の場合、出土地点に置かれたのか否かを出土状態から推測することができない。

覆土は3層に分層された。各層の堆積状態に乱れはなく、砂粒子の大きさも揃っている。そして色調も均一である。覆土は自然に堆積したものであろうか。

遺物　出土した古墳時代前期の土器は2,040gである。器種には甕（S字甕、小型甕）、直口壺、小型丸底鉢、高杯がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは、炉体土器の甕が1個体、高杯の杯部が1個体、高杯の脚部が2個体である。石器は敲石が2点（1点は一部に磨滅痕がある）出土した。

時期　出土した土器と住居址の形態からみて、古墳時代前期の住居址であると考えられる。

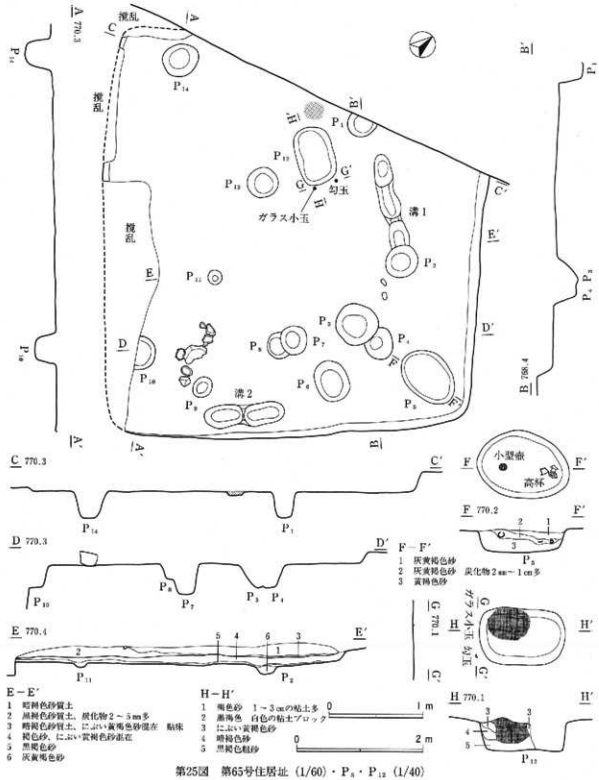
第24図　第64号住居址（1/60）・炉址・土器出土状態（1/30）

第65号住居址（第25・62図）

遺構　Q区、タ・チー143・144グリッドに位置する。遺構の一部は調査区域外にある。

平面形は方形である。平面規模は6.25×6.0mと推測され、長軸方向はN-51°-Wである。残存する壁の高さは16～28cmで、床面からの立ち上がりは直に近い。本址では新旧の床とみられる面が、同一プラン内に検出された。新しい床面下には約10cmの厚みで多量の土器を含む砂が貼床される。床面はほぼ平らで、住居址の中央付近に限り硬化する。住居址中央から西にかけての床面直上より、炭化材と焼土がまとまって検出された。この部分を見る限りでは被火災住居址と言える状態である。古い床面は全面が軟弱で、どの面を床面として良いのか判断に迷う程である。本址では大小の穴と溝が検出された。穴はP_1（38cm）・P_2（35cm）・P_3（43cm）・P_4（39cm）・P_5（23cm）・P_6（38cm）・P_7（49cm）・P_8（25cm）・P_9（22cm）・P_{10}（35cm）・P_{11}（9

cm)・P_{12}（43cm)・P_{13}（34cm)・P_{14}（45cm）である。この中で主柱穴と考えられるものは、位置と掘方からみてP_1・P_3・P_4・P_{10}・P_{14}である。しかし、これらの穴が新旧どちらの住居址に伴うものか、明らかにすることはできていない。溝は２本検出された。溝１の規模は幅24～31cm、深さ15～29cm、溝２は幅29～39cm、深さ10～19cmで、共に小さな浅い穴が連結する。炉とみられる焼土址は、古い床面の住居址中央から北西寄りにある。新しい床面から炉とみられる焼土址は検出されていない。



第25図　第65号住居址（1/60）・P_8・P_{12}（1/40）

本址では穴に伴う遺物の出土状態などが注目される。新しい床面で検出されたP_9では、小型壺と高杯の脚部が出土した。小型壺は頸部から上部を欠き、高杯は杯部と脚裾部の大半を欠く。欠損部の状態からみて、共に壊されたことが考えられる。出土状態は小型壺が正位で、高杯の脚部は横位から斜位である。土器が出土した層は炭化物を多量に含み、南・西壁際から北・東壁側へ流れ込むように堆積していたことから、土器は炭化物層と共にP_5へ流れ込んだとも考えられる。しかし、日常の器でない小型壺と高杯の遺存状態と出土状態からみて、土器は埋置されたと考えたい。そして、薬状の炭化物と覆土の上面に焼土を伴うことは、住居址内で何らかの祭祀が執り行われたことを示唆するように思われる。

P_{13}も新しい床面で検出された穴である。この穴からは人頭より一回り大きな粘土塊が、底面より約10cm上から出土した。またP_{12}の東脇ではスカイブルーのガラス小玉が1点と瑪瑙製の勾玉が出土した。両者は出土した層位からみて、新しい住居址に伴う遺物と考えられる。P_9のように住居址内で執り行われた祭祀を示唆するものであろうか。

新しい床面に伴う覆土は炭化物を多く含み、一部に炭化材と焼土が遺存する。新旧の覆土は堆積状態などからみて、埋め戻されたことが考えられる。

遺物　出土した古墳時代中期の土器は10,710ｇである。器種には甕、壺、杯、小型丸底壺、無頸壺、高杯がある。図上での器形復元も含め土器の器形が窺えるものは、甕が2個体、壺と小型丸底壺が各1個体、杯が5個体、高杯が3個体である。石器は敲石（石槌とも呼ばれる石器か）が1点、打製石斧の破損品と考えられるものが1点出土した。その他に調整加工のある黒曜石剥片が1点出土した。

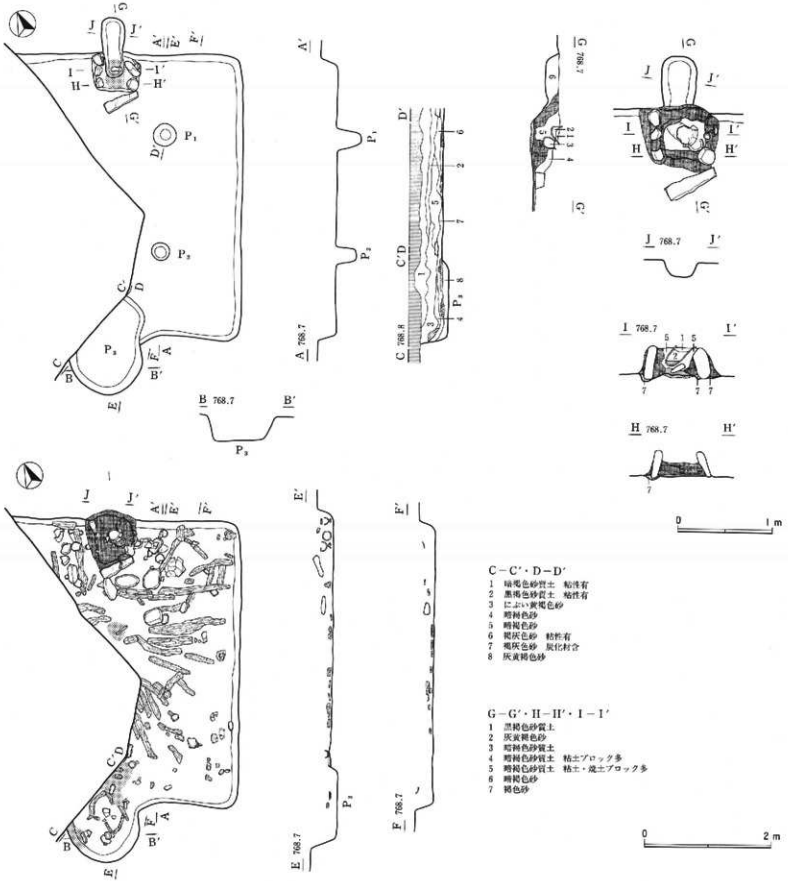
時期　出土した土器と住居址の形態からみて、古墳時代中期の住居址であると考えられる。

第46号住居址（第26図）

遺構　本址はK区とL区が接する地点、メー54、モー53グリッドに位置する。調査区の断面にかかる住居址で約1/2を調査することができた。弥生時代後期と考えられる第47号住居址と重複する。

平面形は方形で、南壁にP_8による張り出しがある。平面規模は東壁で4.5m、カマドが北壁の中央にあるとすれば北壁は4.0m前後となる。カマドのある壁に直交し、張り出しを通る軸方向はN-25°-Eを示す。残存する壁の高さは平均37cmである。床面からの立ち上がりは張り出し部で直立し、他でも直立に近い。床面はほぼ平らで、主柱穴の内側とカマドの周囲に硬化面がある。検出された穴はP_1（39cm）・P_2（33cm）・P_3（9cm）である。主柱穴は対角線上に位置するP_1とP_2である。P_3は平面形が円形で、床面より約12cm深い。底面は平らで軟弱である。このような穴は、本遺跡で検出された古墳時代後期の住居址には見当たらず、他遺跡での類例報告からみると貯蔵穴と考えることが妥当であろう。カマドの位置は北壁の中央部と推測される。構築材には古墳時代のカマドに普遍的な礫と粘土が用いられる。天井石と考えられる柱状の角礫と、天井部を覆う粘土が床面に崩落する以外、他の部分はほぼ構築時の状態と考えられる。カマドは長胴甕が掛けられたままで、北壁側からの土圧により南側に傾いている。その脇に小型の甕が正位に据えられるが、その土器と支脚石は長胴甕に押され斜めとなる。カマド内に焼土と炭化物が厚く堆積し、袖内側の粘土は焼け方が著しい。煙道は壁からの長さが55cm、幅は30～41cm、確認面からの深さは15cmである。支脚石と袖部の芯に使用された礫は、遺跡周辺の河原等で採集可能であるが、天井石はそれらの礫より離れた場所から遺跡内に持ち込まれたものである。

本址では建築部材とみられる多量の炭化材が、焼土と共に床面直上より出土した。その状態からみて本址は被火焼住居址と考えられる。炭化材は住居址内から満遍なく出土し、住居址中央に向かい放射状に遺存する。焼土はカマドの周囲にも散見されるが、特にP_8内の壁際に集中する。炭化材と焼土の直上から土器や礫



第26図 第46号住居址（1/60）・カマド（1/40）

が数多く出土した。土器には2枚重ねの完形の土師器杯や須恵器蓋をはじめ、甕や壺等の大形土器片がある。礫は拳大から人頭大の円礫、扁平なものである。注意されることは、土器と礫の外面に被熱の痕跡がなく、しかも土器の多くは正位で出土したことである。その状態からみて土器と礫は住居址が火を受けた後に置かれたのではないかと考えられる。

覆土は8層に分層された。覆土の堆積状態と遺物の出土状態からみて、第1・7・8層以外は埋め戻された層であると考えられる。従って、本址は火を受けた後に埋め戻された住居址と考えられる。

遺物　出土した古墳時代後期の土器は19,530gである。器種には甕（長胴甕、胴部球体の甕、小型甕）、甑、土師器杯か蓋（黒色・赤色処理）、高杯、須恵器蓋がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは、甕が12個体以上、甑が2個体、土師器杯か蓋が9個体（黒色処理5、赤色処理1）、須恵器蓋が1個体である。土器の出土面はカマド周辺を中心とする床面直上と、先に記述した炭化材と焼土直上の2面として捉えることができる。床面直上では甕や甑などが主体をなし、炭化材と焼土の直上では土師器杯、須恵器蓋、高杯などが主体となる。このように、面により出土した土器の器種が異なることを指摘できる。石器は凹石と敲石が3点ずつ出土した。また、磨製石鏃などの素材となる堆積岩に研磨痕のあるものが1点出土した。土製品として土製丸玉が1点出土した。出土した面は炭化材と焼土の直上である。

時期　出土した土器と住居址の形態からみて、古墳時代後期の住居址であると考えられる。

第49号住居址（第27図）

遺構　K区、フ・ヘー55グリッドに位置し、遺構の大半は調査区域外にある。第48号住居址、第8・9号周溝墓と重複し、本址はどちらの遺構より新しい遺構である。

本址の形態は壁の輪郭、カマドと主柱穴の位置からみて、平面形は方形、カマドのある壁に直交する軸方向はN-41°-Eである。平面規模は西壁で5.75m以上、カマドが北壁の中央にあるとすれば北壁は7.8m前後となる。残存する壁の高さは平均38cmで、床面からの立ち上がりは直立に近い。床面下には10cm程の厚さで砂が貼床される。検出された穴はP_1（56cm）・P_2（27cm）・P_3（26cm）である。P_1は位置と掘方からみて主柱穴と考えられる。P_2は中段のある楕円形の穴で、掘方が浅いため柱穴とは考えられない。カマドは粘土・礫・土器を用いて構築され、炊口部には土器が敷かれている。袖部と天井部の遺存状態が良好であることに加え、カマドに長胴甕が掛けられたままで出土したことから、カマドは構築時の状態を留めているように見受けられた。しかし、支脚石が抜き取られていること、天井部に架けられた扁平の角礫上から、破砕後に遺棄したと考えられる土器が出土したこと等からみて、カマドは住居址の廃棄に際し部分的に壊されていると考えられる。煙道は壁より僅かに外側へ出る程度である。カマドに使用された礫は、遺跡の周辺で採集できる円・扁平礫の安山岩の他に、遺跡から足を伸ばさねば採集できない花崗岩などがある。

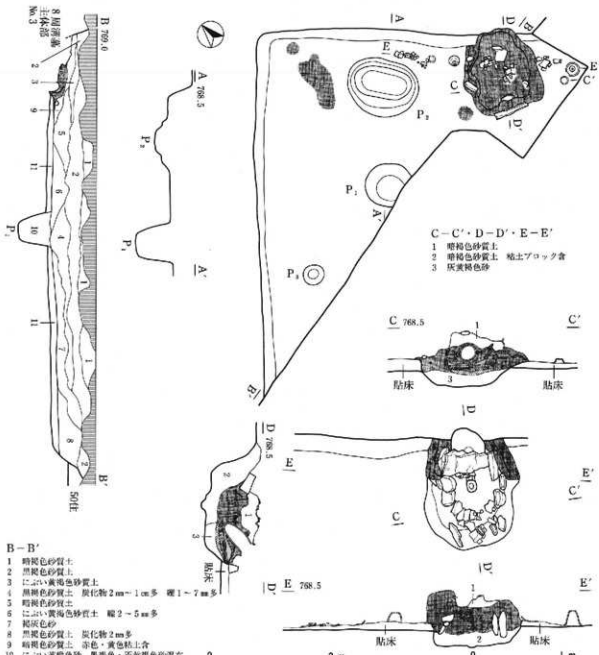
本址のカマドにおける特徴は、構築材に多くの土器が使用される点にある。袖部の芯材に礫と土器が併用されるが、土器は礫を補強するために添えられたようである。天井部の扁平な角礫の下には幾重にも重ねられた大形の土器片があり、袖部と同様に天井部を補強するものと考えられる。炊口部には1個体分の長胴甕が破砕して平らに敷かれている。以上のような特徴をもつカマドは、本遺跡において他の住居址に見ることはできない。

カマドの在り方と同じく、土器の出土状態も注目される。それは小型甕、甑、土師器杯等の土器が、カマドのある北壁に平行させて床面直上に置かれていることである。甑と土師器杯は完形で、甑は逆位に、土師器杯は正位と逆位に置かれている。小型甕は置かれた後に壊されたのか、或いは土圧で押し潰されたのか判断がつかない状態で出土し、原型を留めていない。

覆土は10層に分層された。第4層から第8層には多くの礫が含まれており、礫は出土状態からみて廃棄されたことが考えられる。よって、これらの層は埋め戻されたことになる。

遺物　カマドと床面直上を中心に出土した古墳時代後期の土器は23,710ｇである。器種には甕（長胴甕、胴部球体の甕、小型甕）、甑、土師器杯か蓋（黒色・赤色処理）、高杯（内面黒色処理）、手ずくね土器がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは、甕が11個体、甑が１個体、土師器杯か蓋が７個体、高杯が２個体、手ずくね土器が１個体である。なお、器形の窺えない須恵器が３点あり、１点は蓋であると思われる。石器は敲石が３点出土した。また、覆土より黒曜石剥片が５点出土した。

時期　出土した土器と住居址の形態からみて、古墳時代後期の住居址であると考えられる。

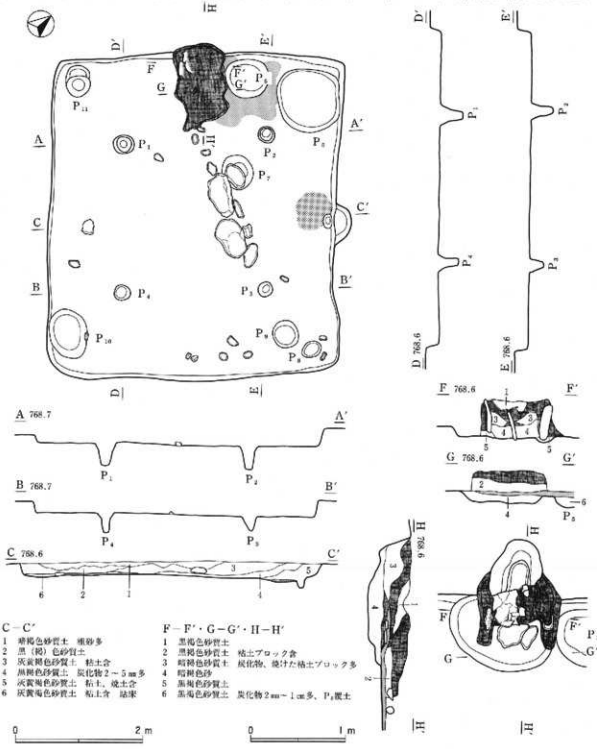


第27図　第49号住居址（1/60）・カマド（1/40）

第53号住居址（第28図）

遺構　K区、ネ・ノ−53・54グリッドに位置する。第10・11号周溝墓と重複し、本址はどちらの遺構より古い遺構である。

平面形は方形で、平面規模は5.25×4.5mである。残存する壁の高さは22〜28cmで、床面からの立ち上がりは直立に近い。床面は南から北へ緩傾斜し、壁下は軟弱で中央に向かい次第に硬化する。床面に密着して拳大から人頭大の礫と、ひと抱えほどある扁平な礫が出土したが、この中にカマドの構築材に使用されたとみ



第28図　第53号住居址（1/60）・カマド（1/40）

られる礫は見当らなかった。検出された穴はP_1（36cm）・P_2（35cm）・P_3（26cm）・P_4（30cm）・P_5（5cm）・P_6（16cm）・P_7（14cm）・P_8（4cm）・P_9（7cm）・P_{10}（10cm）・P_{11}（20cm）である。主柱穴はP_1～P_4で、対角線上に整然と配される。P_5とP_{10}は、規模と位置からみて貯蔵穴となる穴であろうか。カマドは新旧の2ヶ所が確認された。新しいカマドは礫を粘土で覆う構造で、遺存状態は良い。西壁の中央にあり、西壁に直交しカマドを通る軸方向はN-48°-Wである。袖部は構築当初のままであるが、天井部に架けられたであろう礫が見当らないことなどからみて、カマドは住居址の廃棄に際し部分的に壊されていると考えられる。炊口部に花崗岩と安山岩の扁平な礫が掘られ、燃焼部には支脚石となる棒状の花崗岩が直立する。カマド内とその周囲には、カマド使用に伴う炭化物が厚く堆積する。煙道は壁から65cm外側に張り出し、幅52cm、深さ33cmを測る。古いカマドは北壁の中央にあり、新しいカマドに対し約90°ずれている（N-42°-E）。袖部が残存することもなく、構築材の粘土すらない状態である。このような検出状態で古いカマドと認定した根拠は、壁直下の地山に焼けた痕跡があり、そこで支脚石の抜取り痕とみられる小さな穴が検出されたこと、住居址外への煙かな張り出しを煙道と考えたことなどからである。

覆土は7層に分層された。堆積状態と土質からみて、自然な流れ込みと考えられる層と、埋め戻しと考えられる層がある。後者の場合、粘土塊を多く含む特徴がある。

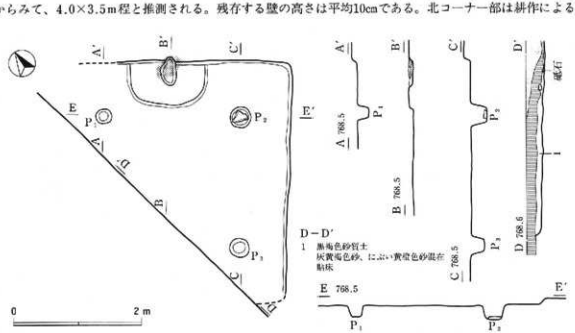
遺物　出土した古墳時代後期の土器は9,250gである。器種には甕（長胴甕、胴部球体の甕、小型甕）、土師器杯か蓋（黒色処理あり）、土師器碗、高杯、須恵器（蓋？あり）、手ずくね土器がある。図上での器形復元も含め土器の器形が窺えるものは、甕が3個体、土師器杯か蓋が4個体、土師器碗が1個体、手ずくね土器が1個体である。混入した土器として条痕文系土器が2点出土した。石器は敲石が1点出土した。その他、加工された可能性がある軽石、黒曜石剥片が1点出土した。

時期　出土した土器と住居址の形態からみて、古墳時代後期の住居址であると考えられる。

第56号住居址（第29図）

遺構　L区、ユ-41・42、ヨ-42グリッドに位置する。遺構の約1/2は調査区域外にある。

平面形は方形で、カマドのある壁に直交する軸方向はN-35°-Eを示す。平面規模はカマドと主柱穴の位置からみて、4.0×3.5m程と推測される。残存する壁の高さは平均10cmである。北コーナー部は耕作による削



第29図　第56号住居址（1/60）

平と、東から西へ流れた自然流路により削り取られている。床面の検出では掘方埋土（貼床）を覆土と間違えたため、カマドの周囲を除き掘り過ぎている。カマドの周囲に残る床面下には、掘方埋土が存在しないことからみて、この部分は住居掘削時に意識的に掘り残されたものと考えられる。検出された穴はP_1（19cm）・P_2（22cm）・P_3（22cm）である。位置と掘方からみて、すべて主柱穴と考えられる。3基の内、P_3の底面に限り厚みが約5cmの扁平な角礫が平らに据えられる。カマドは東壁の中央にある。床面の近くまで削平されているため、構築材の粘土と焼土が少量残存するだけである。

遺物　出土した古墳時代後期の土器は約400gである。器種は甕で、床面直上より出土した。また、須恵器の破片が2点出土した。石器は調査区の断面にかかり砥石が1点出土した。

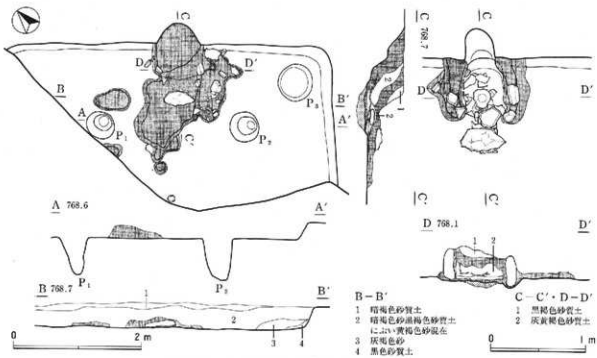
時期　出土した土器と住居址の形態からみて、古墳時代後期の住居址であると考えられる。

第57号住居址（第30図）

遺構　L区、ヤ−46・47グリッドに位置し、遺構の1/2以上は調査区域外にある。第58・62号住居址と重複し、どちらの遺構より新しい遺構である。

平面形は方形で、カマドのある北壁に直交する軸方向はN−42°−Eを示す。平面規模はカマドのある北壁で約5.2mと推測される。残存する壁の高さは30〜36cmで、床面からの立ち上がりは直立に近い。床面はほぼ平らで、カマドの手前に硬化面がある。検出された穴はP_1（60cm）・P_2（67cm）・P_3（18cm）で、P_1・P_2は位置と規模からみて主柱穴と考えられる。カマドは北壁の中央からやや東寄りに位置する。カマドの周囲に堆積する粘土は、構築材に使用されていたものが壁側から流出したものであろう。その粘土を除去すると、天井石と考えられる扁平な角礫や、土圧により潰れた長胴甕などが、床面から僅かに高い位置より出土した。袖部は構築当初のままであるが、支脚石は抜き取られ、燃焼部の上に破砕された胴部球体の甕が置かれている。その状態からみて、カマドは住居址の廃棄時に壊されていると考えられる。破砕された土器の下には炭化物層と粘土層が堆積し、その下は約10cmの厚みで焼けている。煙道は幅45cmで、壁外に40cmほど張り出す。

覆土は粘土と炭化物を少量含む砂質土である。堆積状態などからみて、自然堆積であると考えられる。



第30図　第57号住居址（1/60）・カマド（1/40）

遺物　出土した古墳時代後期の土器は11,180ｇである。器種には甕(長胴甕、胴部球体の甕、小型甕)、土師器杯か蓋、高杯、須恵器甕（？）がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは甕が３個体である。石器は敲石、台石(作業面に光沢のある摩耗痕がある)、自然面を残す剥片の縁辺に刃部が作りだされたものが１点ずつ出土した。その他に調整加工のある黒曜石剥片が１点出土した。

時期　出土した土器と住居址の形態からみて、古墳時代後期の住居址であると考えられる。

奈良時代

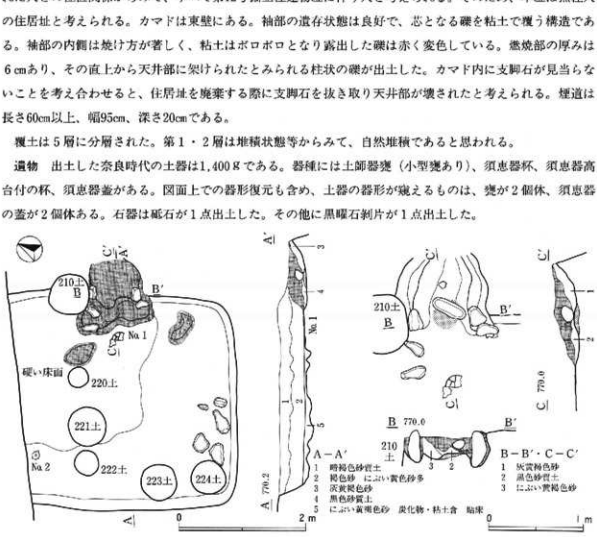
第69号住居址（第31図）

遺構　Q区、カ・キー145グリッドに位置し、西壁は調査区域外にある。第12号掘立柱建物址、第８号方形竪穴と重複し、どちらの遺構より古い遺構である。

平面形は方形、平面規模は東西壁で3.55ｍ、カマドのある壁に直交する軸線はN-65°-Eを示す。残存する壁の高さは平均37㎝で、床面からの立ち上がりは直立に近い。床面下には約10㎝の厚みで砂が貼床される。床面はカマド周囲から北コーナーにかけて硬化する。床面に密着して２個体の須恵器の壺（№１・２）が出土した。１点はカマドの炊き口部近くに裏返しに置かれたような状態で出土し、もう１点は住居址の北側へ正位に置かれたような状態で出土した。本址では６基の穴が検出されたが、出土遺物と本址の外側で検出された穴との位置関係からみて、すべて第12号掘立柱建物址に伴う穴と考えられる。そのため、本址は無柱穴の住居址と考えられる。カマドは東壁にある。袖部の遺存状態は良好で、芯となる礫を粘土で覆う構造である。袖部の内側は焼け方が著しく、粘土はボロボロとなり露出した礫は赤く変色している。燃焼部の厚みは６㎝あり、その直上から天井部に架けられたとみられる柱状の礫が出土した。カマド内に支脚石が見当らないことを考え合わせると、住居址を廃棄する際に支脚石を抜き取り天井部が壊されたと考えられる。煙道は長さ60㎝以上、幅95㎝、深さ20㎝である。

覆土は５層に分層された。第１・２層は堆積状態等からみて、自然堆積であると思われる。

遺物　出土した奈良時代の土器は1,400ｇである。器種には土師器甕（小型甕あり）、須恵器杯、須恵器高台付の杯、須恵器蓋がある。図面上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは、甕が２個体、須恵器の蓋が２個体ある。石器は砥石が１点出土した。その他に黒曜石剥片が１点出土した。



第31図　第69号住居址（1/60）・カマド（1/40）

時期　出土した土器と住居址の形態からみて、奈良時代の住居址であると考えられる。

平安時代

第42号住居址（第32図）

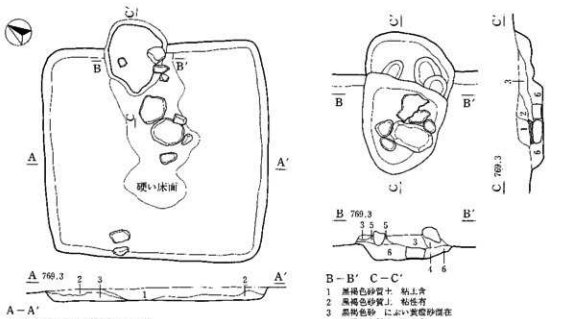
遺構　C′区、ホ・マ−95グリッドに位置する。第30号溝址と重複し、本址が新しい遺構である。

平面形は方形、平面規模は3.55×3.4m、カマドのある壁に直交する軸線はN-57° Eを示す。残存する壁の高さは平均10cmで、床面からの立ち上がりは緩い。床面は平らで、貼床はなされていない。カマドから住居址中央付近までの床面は、カマド構築材の粘土が散布し硬化する。この面から平均10cm上より、人頭大からそれ以上の大きさのある礫が出土した。礫は住居址が廃地化した時点での廃棄とも考えられるが、検出状態からみると何らかの目的で置かれたように思われる。礫に粘土の付着や焼けた痕跡はなく、カマドの構築材として使用されたものではないと考えられる。本址では主柱穴等の穴は検出されていない。カマドは東壁の中央からやや北寄りにある。煙道とみられる掘り込みは、平面形が不整円形で壁外に40cmほど張り出す。

覆土は3層に分層された。堆積状態等からみて、覆土は埋め戻されたことが考えられる。

遺物　出土した平安時代の土器は2,930gである。器種は土師器甕、土師器杯（黒色処理）、須恵器杯、須恵器盌がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは、土師器甕が2個体である。石器は敲石と砥石が各1点出土した。

時期　出土した土器と住居址の形態からみて、平安時代の住居址であると考えられる。



第32図　第42号住居址（1/60）・カマド（1/40）

第67号住居址（第33・63図）

遺構　Q区、セ−144・145グリッドに位置する。

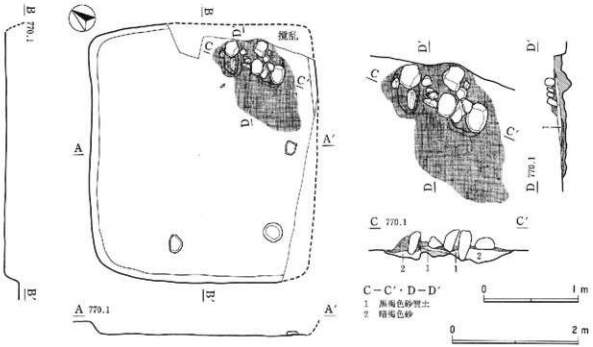
平面形は方形で、平面規模は4.2×3.6m前後と推測され、カマドのある壁に直交する軸線はN-53°-Eである。残存する壁の高さは平均20cmで、床面からの立ち上がりは直立に近い。床面下に貼床はなく、所々に地山の礫が露出する。床面は粘土の散布面に限り硬化する。カマドは東コーナー付近にあり、礫と粘土により構築される。…部が撹乱により削平されるが、袖部の遺存状態は良好である。燃焼部に拳大の扁平な礫が4

点あまり立てられていた。これが支脚石であるのか、或いはカマドの廃棄の際に立てられたものなのか、礫が火を受けたか否かの観察を怠ったことから判断できない。本址では主柱穴等の穴は検出されていない。

覆土は鉄分沈着により分層することが困難であった。暗褐色砂質土の単一層である。

遺物　出土した平安時代の土器は1,715gである。器種には土師器甕（甲斐型あり）、須恵器杯、須恵器凸帯付四耳壺、灰釉陶器蓋（須恵器か？）がある。図上での器形復元も含めて、土器の器形が窺えるものは、須恵器杯が1個体、灰釉陶器蓋（須恵器か？）が1個体である。

時期　出土した土器と住居址の形態からみて、平安時代の住居址であると考えられる。



第33図　第67号住居址（1/60）・カマド（1/40）

(2)　竪穴状遺構

第4号竪穴状遺構（第34図）

遺構　今年度は遺構の北側を調査した。

本址の形態は平面形が隅丸長方形、平面規模は3.25×2.35m、長軸方向はN-34°-Eを示す。残存する壁の高さは4～16cmで、床面からの立ち上がりは緩い。底面はほぼ平らで硬化した面はない。本址に伴う穴などは検出されていない。

覆土は3層に分層された。各層は壁側から流れ込んだ堆積状態を示す。

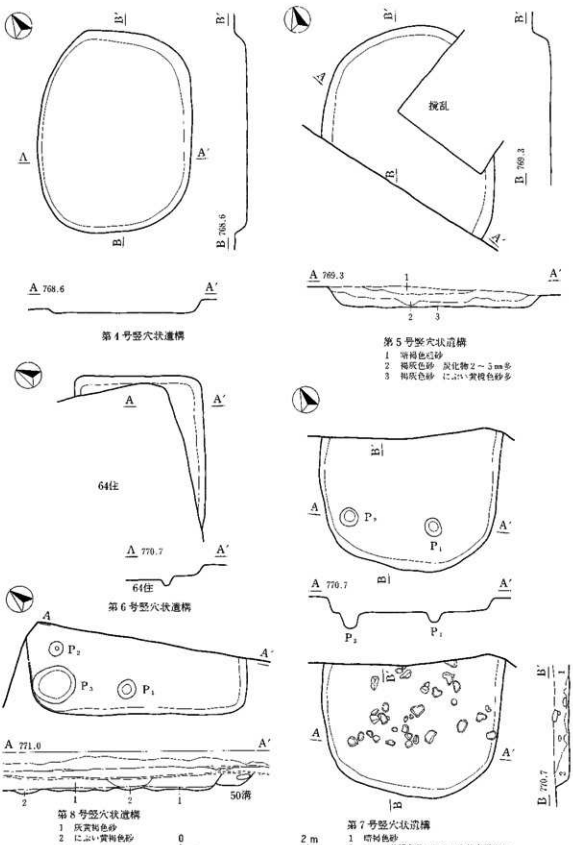
遺物　出土した弥生時代後期の土器は110gである。器種には甕形土器、壺形土器がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものはない。

時期　弥生時代後期の遺構であると考えられる。

第5号竪穴状遺構（第34・63図）

遺構　C'区、ノ・ハ－94・95グリッドに位置し、遺構の約1/4は調査区域外にある。本址は第5号周溝墓内で検出されたため周溝墓の主体部と考えることもできるが、位置的な関係以外に両者を結びつける根拠はない。そのため、竪穴状遺構として報告する。

平面形は楕円形で、平面規模は長軸が3.7m前後、短軸は2.7mと推測される。長軸方向はN-11°-Eと推測



第4号竪穴状遺構

第5号竪穴状遺構
1 暗褐色砂
2 褐灰色砂 炭化物2～3mm多
3 褐灰色砂 に赤い黄橙色砂多

第6号竪穴状遺構

第8号竪穴状遺構
1 灰黄褐色砂
2 に赤い黄褐色砂

第7号竪穴状遺構
1 暗褐色砂
2 に赤い黄褐色砂 に赤い黄橙色砂混在

第34図 竪穴状遺構 (1/60)

される。残存する壁の高さは39～50cmで、底面からの立ち上がりは緩い。本址に伴う穴などは検出されていない。

覆土は3層に分層された。各層は壁側から流れ込んだ状態で堆積する。

遺物　出土した弥生時代中期後半と後期の土器は840gである。器種には甕形土器、壺形土器、高杯形土器か鉢形土器がある。図上での器形復元も含めて、1個体の器形が窺えるものはない。赤彩された土器は40gで、高杯形土器か鉢形土器である。石器の出土はなく、黒曜石砕片が4点出土した。

時期　出土した土器からみて、弥生時代後期の遺構であると考えられる。

第6号竪穴状遺構（第34図）

遺構　P区とQ区が接する部分、ナ・ニー141・142グリッドに位置する。本址の大半は第64号住居址により削平される。

平面形は長方形で、平面規模は短軸が2.05m前後と推測される。長軸方向はN-61°-Eを示す。残存する壁の高さは13～21cmで、底面からの立ち上がりは緩い。底面は硬化していない。

覆土は堆積状態からみて、自然堆積であると考えられる。

遺物　赤彩された弥生土器が10g出土した。高杯形土器か鉢形土器のどちらかであると考えられる。

時期　本址の形態と出土した土器、第64号住居址との切り合いからみて、弥生時代後期から古墳時代前期に構築された遺構であると考えられる。

第7号竪穴状遺構（第34・63図）

遺構　P区とQ区が接する部分、ヌ・ネー141・142グリッドに位置する。本址の1/2から1/3は調査区域外にある。

本址は竪穴状遺構とした遺構であるが、底面から検出された2基の穴を柱穴と考えるならば、極めて小形の竪穴住居址とも考えられる。調査区域外に炉のある可能性を残すが、調査区内で炉が検出されなかったこと、断面において床面と見なせる層が確認されなかったことなどから、竪穴状遺構として報告する。

平面形は隅丸長方形で、平面規模は短軸が2.85m、長軸方向はN-26°-Eを示す。残存する壁の高さは11～22cmで、底面からの立ち上がりは直に近い。底面は凹凸が著しい上に軟弱で、木の根による撹乱が顕著である。検出された穴はP_1（17cm）・P_2（25cm）である。底面に多くの木の根が入る状態での検出であるため、撹乱を柱穴と誤認した可能性もないわけではないが、検出状態などの所見によれば本址に伴う穴として良いものと考える。第1層では卵大から人頭大ほどの礫が多量に出土した。礫は整然と配された状態ではなく、中央にまとまる傾向がある。遺構が窪地化したある時期に第1層と共に投げ込まれたものと考えられる。

覆土は2層に分層された。第1層は先のとおり埋め戻された層であると考えられる。第2層は壁側から流れ込んだ状態で堆積し、色調も地山に近いものである。よって、自然堆積と考えられる。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は2,720gである。器種は甕形土器（内外面に刷毛調整痕を強く残す甕形土器あり）、高杯形土器、鉢形土器がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは、第1層から出土した甕形土器である。赤彩された土器は70gで、高杯形土器と鉢形土器である。石器は敲石が1点出土した。

時期　出土した土器からみて、弥生時代後期の遺構であると考えられる。

第8号竪穴状遺構（第34図）

遺構　P区、ヌ－139グリッドに位置し、遺構の約2/3は調査区域外と考えられる。第49・50号溝址と重複し、第50号溝址より新しい遺構である。第49号溝址との新旧関係は不明である。

本址は調査時に竪穴住居址とした遺構であるが、炉が検出されていないなど竪穴住居址とする根拠に欠けるため、竪穴状遺構に改名して報告する。

平面形は壁の輪郭からみて方形で、南北辺は3.4m前後、南北軸の方向はN-40°-Wである。残存する壁の高さは5～9cmで、底面からの立ち上がりは緩い。底面には4～8cmの厚みで砂が貼床される。底面は木の根と思われる撹乱が多く入るために荒れている。検出された穴はP_1（21cm）・P_2（11cm）・P_3（12cm）である。P_1とP_2は掘方からみて柱穴と考えられるが、本址の外側に同様の穴が分布する状況からみて、本址に伴う穴とは言い切れない。

覆土は2層に分層された。第1層は暗褐色砂とにぶい黄色砂が混在する砂層で、一気に埋没したような堆積状態である。

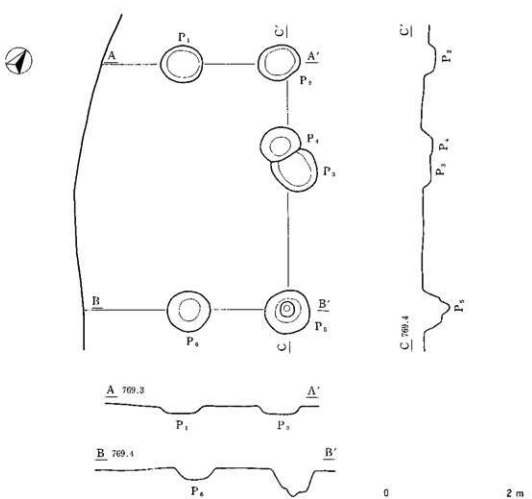
遺物　調査面積が狭いことに加え、覆土の厚さが薄いためか、土器の出土はない。

時期　本址は古墳時代中期面とした面に覆われるため、それ以前の遺構となる。

(3) 掘立柱建物址

第11号掘立柱建物址（第35図）

遺構　C'区、ノ・ハ－92～94グリッドに位置し、遺構の一部は調査区域外にある。第43号住居址・第5号周溝墓と重複し、どちらの遺構より新しい遺構である。



第35図　第11号掘立柱建物址（1/60）

検出された柱穴は6基である。P_4は位置的にみて本址に伴わない穴との見方もできるが、覆土の色調は類似し、規模的にも他と遜色がないため、P_3と切り合う同じ性格の穴と考えられる。柱間はP_1-P_2間が1.6m、$P_2\cdots P_3$間は1.7m、P_3-P_5間は2.2m、P_5-P_6間は1.6mで、東西方向の柱間に比べて南北方向の柱間の方が広い。柱穴の平面形は円形と楕円形で、上面径は57～70cm、確認面からの深さは11～29cmである。P_5では柱穴の中心付近に建物の自重による柱の食い込み痕が検出された。底面より8cmの深さである。

覆土は黒褐色の砂質土がベースとなり、柱穴によっては粗砂や炭化物が多く入るものがある。覆土が薄いためか、断ち割り調査で柱痕が確認されたものはない。

遺物　6基の柱穴から120g（16点）の土器が出土した。すべての土器は弥生時代中期後半から後期と考えられる。その内、赤彩された土器は20gで、高杯形土器か鉢形土器と考えられる。

時期　本址は弥生時代後期終末と考えられる第5号周溝墓を切るため、古墳時代以降の掘立柱建物址と考えられる。

第12号掘立柱建物址（第36図）

遺構　Q区、エ～ケ－146・147グリッドを中心に位置する。遺構の一部は調査区域外にあると考えられる。第69号住居址、第51号溝址、第5・7号方形竪穴と重複し、第69号住居址より新しい遺構で、第51号溝址との新旧関係は不明である。第5・7号方形竪穴は位置的にみて、本址に付属する遺構の可能性がある。

本址を構成する柱穴は第203号土坑から第224号土坑の22基と考えている。平面形は遺構が調査区域外に延びるために不明である。本址の桁行きは南西から北東方向で、調査区の北断面に沿って配列する土坑が隅柱となり、第209号土坑から第216号土坑を結ぶ線上の土坑が東柱と考えられる。側柱での柱間は梁本的に2.0～2.2m、東柱では4.2～4.4mとなる。土坑の平面形は円形基調で、規模は直径約70～80cmで、確認面からの深さが約50～70cmのものと、直径約40～50cmで確認面からの深さが40～50cmの2タイプに分けられる。

土坑の覆土は暗褐色砂質土に2㎜～2cm大の粘土塊と2㎜～1cm大の炭化物を含有するものが主体をなし、方形竪穴の覆土と類似する。幾つかの土坑では本大から人頭大の礫が覆土より出土した。これらは柱を押さえるための根固め礫であると考えられる。12基の土坑で断ち割りを行ったが、柱痕が確認されたものはない。

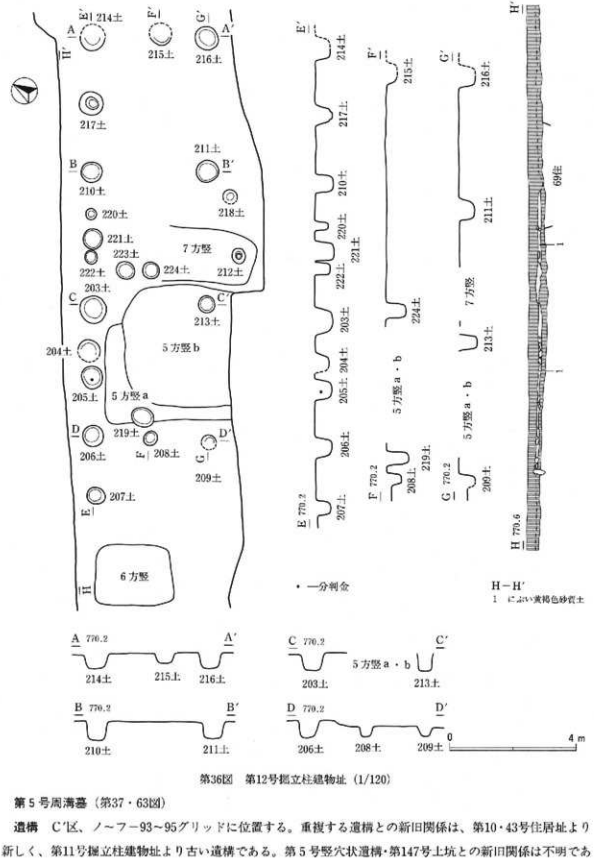
調査区の北断面において、近・現代とみられる2枚の水田層下に、本址と同時期に造成されたとみられる面が確認された。この面はにぶい黄褐色砂質土からなり、大形で扁平な礫を伴う。礫の中には直立するものもある。

遺物　遺物が出土した土坑は12基である。この中で近世とみられる遺物が出土した土坑は、第204・205・211・213・221号土坑の5基である。第211号土坑では焙烙が一括で出土し、第204・221土坑では焙烙の破片が出土した。第213号土坑では本薬焼の銚子とみられる注口部が出土した。注口部は直に近い形で立ち上がる。全面に灰釉が施釉され、胴部下半に鉄絵の文様がある。第205号土坑では慶長一分判金とみられる銭貨が出土した。重量は4.4gである。出土した位置は土坑の底面から約35cm上である。

時期　第213号土坑で出土した本薬焼の銚子とみられる注口部と、第205号土坑で出土した一分判金からみて、近世前半の掘立柱建物址と考えられる。

(4) 周溝墓

昨年度の調査では、周溝の平面形により方形周溝墓或いは円形周溝墓と呼称し、それぞれ2基の遺構に番号を付している。ところが、今年度に検出された周溝墓には周溝の平面形が方形とも円形とも言えるものと、周溝のごく一部が検出されたため全形が判然としないものがある。そこで、今年度は単に周溝墓とし第5号から番号を付すことにした。

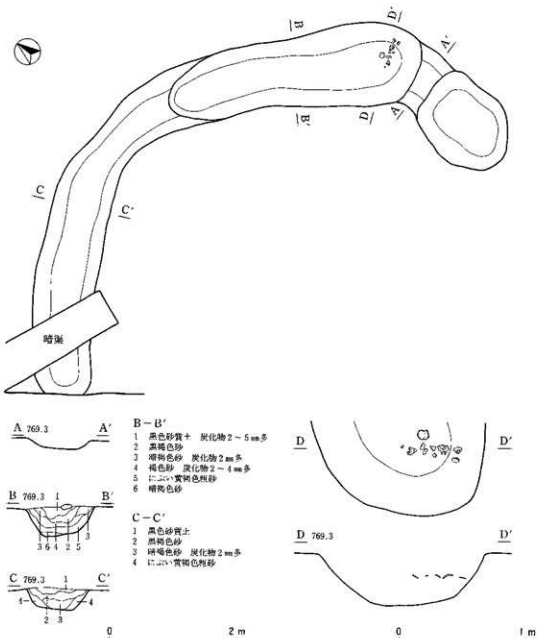


第36図　第12号掘立柱建物址（1/120）

第5号周溝墓（第37・63図）

遺構　C'区、ノ～フ－93～95グリッドに位置する。重複する遺構との新旧関係は、第10・43号住居址より新しく、第11号掘立柱建物址より古い遺構である。第5号竪穴状遺構・第147号土坑との新旧関係は不明である。なお、昨年度の調査で第16号土坑とした遺構は、今年度の調査により周溝の一部と判明した。

平面形は方形と言うより不整な円形で、平面規模は直径9.0m前後と推測される。確認面での周溝の幅は



第37図　第5号周溝墓（1/60）　土器出土状態（1/30）

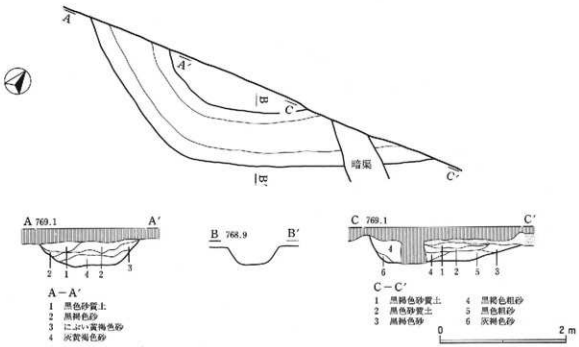
70～128cmで、深さは10～51cmである。周溝の西側が調査区の境界付近で立ち上がるため、ここを陸橋部と考えることもできる。しかし、第10号住居址内では周溝が床面に達しないほど浅いなど、周溝の深さが地点により極端に異なることを考慮すれば、一概に陸橋部と言い切ることはできない。周溝に区画される形で検出された第5号竪穴状遺構は、位置的にみると主体部とも考えられる。しかし、規模が大きすぎると思われること、位置的な関係以外に両者の関係を積極的に評価できないことなどから、主体部ではない遺構と考えている。主体部は周溝の検出状況からみて、削平された可能性が高いと考えられる。

本址で注目すべきことは、周溝内より一括出土した内彎口縁壺、所謂ひさご壺である（D－D'）。出土地点は周溝の東側で、底面より約15～20cm高い位置から出土した。土器は破砕後に廃棄されたようで、周溝の外側から流れ込む状態で出土した。ひさご壺は当地域において極めて希少な土器であり、先述した出土状態に加え、出土地点の周溝部が他より幅広で深く掘削されていることは重要であると考える。周溝内埋葬など、

ここで何らかの行為が行われたことを示唆する在り方である。覆土は4層と6層に分層された。基本的にレンズ状の堆積である。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は3,300gである。器種には甕形土器(内外面に刷毛調整痕を強く残す甕形土器あり)、壺形土器、高杯形土器、鉢形土器がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは、甕形土器が1個体と、ひさご壺が1個体である。石器は敲石、黒曜石両極石器、使用痕のある剥片、調整加工のある剥片が1点ずつ出土した。その他に、黒曜石の剥片・砕片が3点出土した。

時期　出土した土器からみて、弥生時代後期終末の周溝墓であると考えられる。



第38図　第6号周溝墓 (1/60)

第6号周溝墓（第38・63図）

遺構　K区、B′・C′−56グリッドに位置し、遺構の大半は調査区域外にある。構築地点は微高地の北縁辺部である。

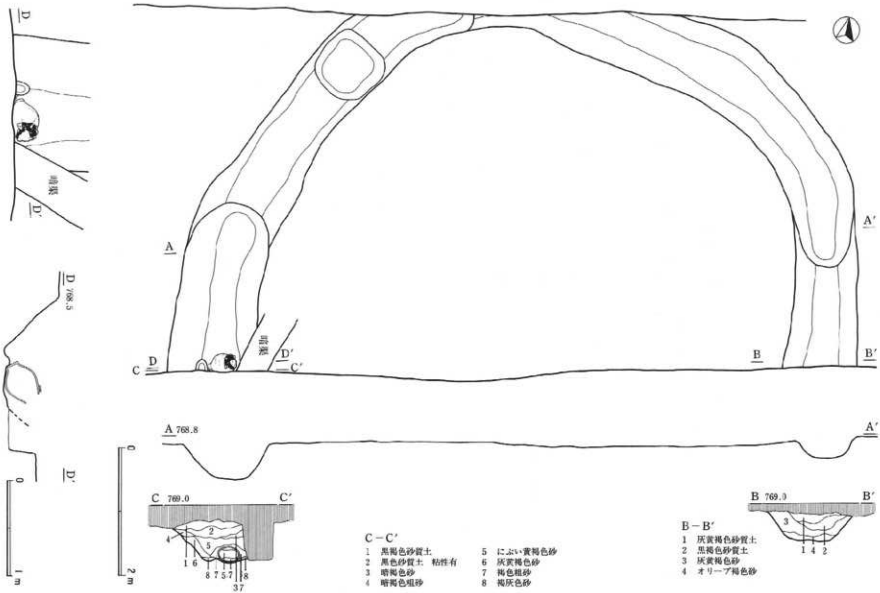
確認面での周溝の幅は79〜90cm、深さは22〜30cmである。断面形は逆台形で、北へ向かうほど壁の傾斜は緩くなる。覆土は4層と6層に分層された。周溝の外壁に沿って黒色〜黒褐色砂質土がレンズ状に堆積し、それより下層では周溝の内側から外側へ流れ込む状態であった。このことは、周溝の埋没が内側から始まり、周溝内に盛土がなされていたことを示している。

遺物　出土した土器は475gである。器種には高杯形土器か鉢形土器がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものはない。赤彩された土器は25gで、高杯形土器か鉢形土器である。石器の出土はなく、磨製石鏃などの素材となる堆積岩片が出土した。

時期　古墳時代前期の遺物包含層が周溝を覆うため、それ以前の周溝墓となる。

第7号周溝墓（第39・64図）

遺構　K区、リ〜ヲ−56・57グリッドに位置し、遺構の約1/2は調査区域外にある。第45号住居址と重複し、本址が新しい遺構である。また周溝の内側にある第153号土坑は、本址と時期の異なる遺構と考えられる。



第39図 第7号掘建柱 (1/60) 土壙出土状態 (1/40)

平面形は検出された周溝からみると、円形基調と考えられる。平面規模は直径10.8m以上である。確認面での周溝の幅は96～155cm、深さは28～63cmである。断面形は各地点で異なり、西側で逆台形、東側でU字形となる。主体部は後世の撹乱により削平されたのか、或いは調査区域外に存在するのかは不明である。

本址では周溝から出土した壺形土器（第64図1）が注目される。土器は周溝の底面に密着して、口縁部から頸部が東を向く横位で出土した。口縁部から胴部にかけて土圧によるひびが入るが、原形は留めている。土器は頸部より上を欠損し、その状態からみて故意に打ち欠かれたことが考えられる。さらに、欠損した口縁部の一部は頸部に置かれたかの状態で出土した。胴部や底部に穿孔はなく、土器の内部から副葬品となるような遺物や骨片こそ出土していないが、土器の出土状態と遺存状態は周溝内埋葬が行われたことを示唆する。覆土は1層と8層に分層された。レンズ状の堆積を示す部分と、周溝の内側から流れ込んだ状態を示す部分とがある。

遺物　出土した土器は7,515gである。器種には甕形土器、壺形土器、高杯形土器、鉢形土器がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは壺形土器が1個体である。赤彩された土器は115gで、壺形土器の胴部とみられるもの、高杯形土器か鉢形土器の口縁部、高杯形土器の脚部、口唇直下に櫛描波状文のある鉢形土器とみられるものがある。石器の出土はなく、黒曜石剥片・砕片が3点、磨製石鏃などの素材となる堆積岩片が7点出土した。

時期　出土した土器と住居址との切り合い関係からみて、弥生時代後期の周溝墓であると考えられる。

第8号周溝墓（第40・64図）

遺構　K区、フ～ミ－53～56グリッドに位置し、遺構の一部は調査区域外にある。本址は複数の遺構と重複し、第48・51号住居址・第9号周溝墓より新しく、第49号住居址より古い遺構である。第154・157・158・199号土坑との新旧関係は不明である。

遺構を説明するにあたり、便宜的に第9号周溝墓との重複部を西溝、周溝の幅が最も広くなる北側部分を北コーナーとする。平面形は楕円形、或いは隅丸長方形といえ、平面規模は短軸が8.5m以上、長軸は13.0m前後と推測される。長軸方向はN-47°-Wで、これにほぼ直交するN-43°-Eが主軸方向となる。確認面での周溝の幅は北溝123～140cm、東溝98～127cm、南溝85cm、西溝55～85cmで、深さは北溝25～35cm、東溝24～34cm、南溝16～24cm、西溝54～63cmである。周溝で注意されることは、第9号周溝墓と周溝を共有すること、地点により断面形が異なることである。周溝の共有では、重複部での断面観察により第9号周溝墓より新しいことが確認された。しかし、周溝を共有する点からみて、両者の構築された時期に大きな隔たりはないと考える。断面形は第9号周溝墓との重複部がV字形、それ以外では逆台形からU字形で、変換点は西コーナーである。周溝の覆土は4層に分層された。基本的にレンズ状の堆積であり、周溝の内側からの流れ込みは顕著ではない。

本址では3基の主体部が検出された。主体部No.1・2の調査では墓坑であるとの所見は得られなかったが、No.3の調査において出土遺物に副葬品とみられるものが出土し、掘方での埋葬施設の存在を裏付ける痕跡が確認された。そこで、長軸方向がNo.3と類似する2基の土坑も、主体部とすることが妥当であると考える。以下、No.1から順に説明していく。

No.1は第51号住居址、第199号土坑と重複する。平面形は隅丸長方形とも言える形で、平面規模は265×215cm、長軸方向はN-55°-Eを示す。残存する壁の高さは47～58cmで、底面からの立ち上がりは急である。底面はほぼ平らである。覆土は土質や締まり具合からみて、埋め戻しと考えられる。第2・3層は焼土の塊を含み、焼土は南壁に接し帯状に分布する。ただし、壁面に焼けた痕跡はない。断面の観察では、

焼土下に水平堆積する砂層内に、2㎜～1㎝大の多量の炭化物が確認された。木棺の底板が炭化したものであろうか。

No.2は第49号住居址との重複により西側が削平される。平面形は隅丸長方形、平面規模は長軸が不明で短軸は147㎝である。長軸方向はN-43°-Eを示す。掘方はNo.1同様にしっかりしていて、残存する壁の高さは38㎝、底面からの立ち上がりは直立に近い。底面はほぼ平らである。黒土の土質や締まり具合はNo.1に類似し、埋め戻されたことが考えられる。No.1と異なる点として、焼土を含まないこと、木棺の痕跡を示唆する立ち上がりが確認されたことである。

No.3もNo.2と同様に、第49号住居址により西側が削平される。平面形は隅丸長方形、平面規模はNo.1・2より一回り小振りで、長軸は130㎝以上、短軸は103㎝である。長軸方向はN 40°-Eを示す。残存する壁の高さは28㎝で、底面からの立ち上がりは北・東壁で直立気味、南壁では緩い。本遺構では埋葬施設に木棺の使用が確認された。根拠の1つは小口穴の検出である。小口穴は東壁から30㎝ほど南西寄りにあり、平面形は長楕円形、平面規模は34×20㎝、底面からの深さは20㎝である。もう1つは主体部の確認面で、主体部より一回り狭い範囲に木棺の範囲と考えられる色調の異なる面が確認されたことである。この面と小口穴の位置とが対応することも確認されたため、色調の異なる面は木棺の範囲を示していると考えられる。No.3で特筆されるのは、豊富な遺物が出土したことである。木棺内から硬玉製勾玉1点、銅製品2点(径が3.5㎝ほどの小形の帯型銅鋲?)、ガラス小玉65点以上(65点の内、破損品は3点。色調はスカイブルー61点、ライトグリーン4点。)、2～7㎜大の人骨片が出土した。出土状態は硬玉製勾玉の直下に2点の銅製品があり、その周囲にガラス小玉が散在する。

本址では北コーナーの掘方と、そこから出土した壺形土器(B－B′、第64図28)の遺存状態などから、周溝内への埋葬が示唆される。それは、北コーナーは周溝の幅が最も広く、覆土は強い粘性を帯びる多くの骨片が含まれていること、その地点より頸部に2.0×1.5㎝ほどの孔が穿たれる壺形土器が底面より15㎝ほど高い位置から出土したことによる。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は3,925gである。器種には甕形土器、壺形土器、高杯形土器があり、鉢形土器とみられるものもある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは壺形土器と甕形土器が1個体ずつである。赤彩された土器は95g で、高杯形土器の他、壺形土器と鉢形土器とみられるものがある。混入した土器として条痕文系土器が1点出土した。石器は砥石と考えられるものが1点と、磨製石鏃の未製品と考えられるものが1点出土した。また、黒曜石砕片が1点、磨製石鏃などの素材となる堆積岩片が3点出土した。

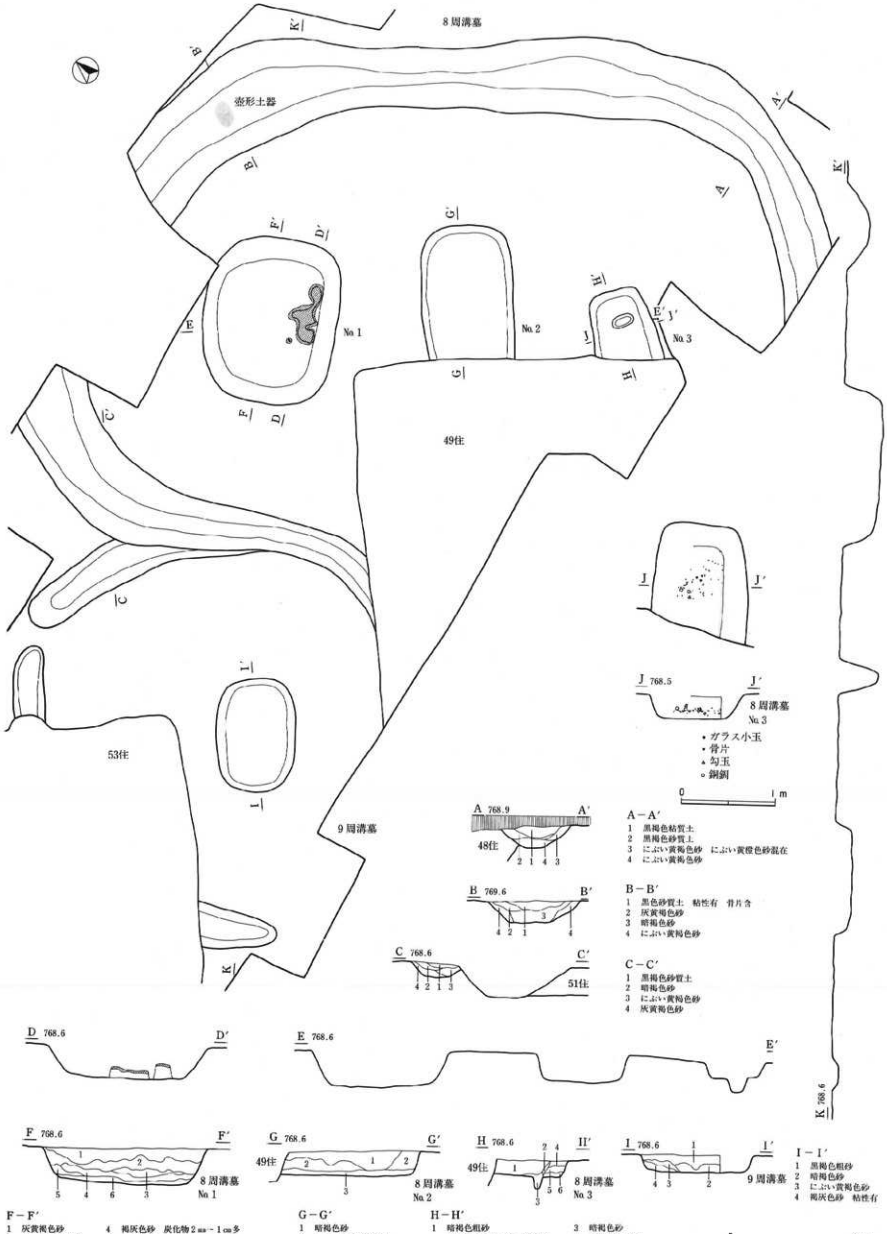
時期　出土した土器からみて、弥生時代後期の周溝墓であると考えられる。

第9号周溝墓（第40・65図）

遺構　K区、ノ－ツ－53・54グリッドに位置する。本址は複数の遺構と重複し、第50号住居址より新しく、第49・53号住居址と第8号周溝墓より古い遺構である。

周溝の平面形は不整な円形である。平面規模は直径が6.5m前後と推測され、平面規模を推測し得た周溝墓の中では最も小規模のものとなる。周溝は第8号周溝墓との共有部分以外で、幅48～70㎝、深さ7～26㎝を測る。断面形はU字形である。陸橋部は南と北に1ヶ所ずつあり、幅は北側で30㎝、南側で75㎝以上ある。周溝の覆土は4層に分層された。堆積状態は基本的にレンズ状である。

主体部は平面形が隅丸長方形、平面規模は172×126㎝、長軸方向はN-41°-Eを示す。残存する壁の高さは平均30㎝、底面からの立ち上がりは直立気味である。底面はほぼ平らである。覆土は土質と締まり具合など



第40図 第8・9号周溝墓（1/60）、8周溝墓No.3遺物出土状態（1/40）

からみて埋め戻されたことが考えられる。埋葬施設に木棺が使用されたか否かについては、覆土の断面に木棺の存在を示唆する立ち上がりが確認されていないこと、底面から木棺の小口穴が検出されていないことにより不明である。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は310gである。器種は甕形土器、壺形土器のほか、高杯形土器か鉢形土器とみられるものがある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものはない。赤彩された土器は10gで、高杯形土器か鉢形土器とみられる。石器は敲石が1点出土した。その他、黒曜石砕片が1点出土した。

時期　出土した土器と住居址との切り合い関係からみて、弥生時代後期の周溝墓であると考えられる。

第10号周溝墓（第41・64図）

遺構　K区、ト～ヌ－50～54グリッドに位置し、遺構の一部は調査区域外にある。本址は複数の遺構と重複し、第54・55号住居址より新しく、第53号住居址、第11号周溝墓、柱穴群、第168号土坑より古い遺構である。

遺構の説明は便宜的に遺構図版で上となる周溝を東溝、陸橋部を西コーナーとする。平面形は方形と円形が折衷したような形である。第53号住居址と重複する部分では弧状となり、北コーナーと西コーナーでは直角に近い屈曲を示す。平面規模は南北で10.7mを測り、東西は10.5m前後と推測される。南北溝に平行し西溝に直交する軸方向はN－40°－Eを示す。陸橋部は西コーナーにあり、155cmの幅で地山が掘り残される。確認面での周溝の幅は北溝90～95cm、東溝73～122cm、南溝60～74cm、西溝90～111cmで、深さは北溝24cm、東溝29～51cm、南溝16～31cm、西溝5～17cmである。断面形は逆台形ともU字形ともいえる形である。周溝の覆土は2層から4層に分層された。基本的に上層に黒褐色砂質土、下層に砂層がレンズ状に堆積する。第55号住居址との重複部では、黒褐色砂質土の直下に拳よりも一回り大きな礫が据えられたかの状態で出土した。

主体部は周溝の中央から北東寄りにある。平面形は隅丸長方形、平面規模は240×164cmで、長軸方向はN－60°－Eを示す。断面形は箱形で、底面からの立ち上がりは西壁を除き直立気味である。底面は礫層の露呈で荒れているが、ほぼ平らである。覆土は6層に分層された。すべての層は硬く締まる特徴があり、埋め戻されたものと考えられる。

本址では主体部の長軸方向が注意される。主体部の長軸方向は西溝に直交する軸方向から東へ約20°ずれており、仮に周溝が方形を意識して掘削されたとすれば、主体部の長軸方向は故意にずらされたと考えられないだろうか。周溝の平面形が円形と方形が折衷したような形であることと、何らかの関係があるのではないかと思われる。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は2,925gである。器種には甕形土器、壺形土器、高杯形土器、鉢形土器がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものはない。赤彩された土器は50gあり、壺形土器、高杯形土器、鉢形土器がある。石器は敲石、凹石、黒曜石両極石器が1点ずつ出土した。その他に、磨製石鏃などの素材となる堆積岩片が2点出土した。

時期　出土した土器と他の遺構との切り合い関係からみて、弥生時代後期の周溝墓であると考えられる。

第11号周溝墓（第41・65図）

遺構　K区、ネ・ノ－50グリッドを中心に位置する。第55号住居址、第10号周溝墓と重複し、本址はどちらの遺構より新しい遺構である。

遺構の大半は調査区域外にあるため、周溝の平面形や規模は明らかでない。確認面での周溝の幅は85～109cm、深さは40～55cmである。断面形は他の遺構と重複しない部分で逆台形、重複部ではU字形である。覆土

は3層に分層された。堆積状態はレンズ状である。

遺物　出土した土器は弥生時代後期のみで540gである。器種には甕形土器、壺形土器、高杯形土器、鉢形土器がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものはない。赤彩された土器は40gで、高杯形土器と鉢形土器である。

時期　本址の周溝は第10号周溝墓の周溝と共有するため、両者の掘削された時期に大きな隔たりはないと考える。従って、弥生時代後期の周溝墓であると考えられる。

第12号周溝墓（第42・65図）

遺構　L区、ユ～ル－43～50グリッドに位置し、遺構の東側は調査区域外にある。第58・62号住居址と重複し、本址はどちらの遺構より新しい遺構である。

遺構の説明では便宜的に遺構図版の上を北とする。また、周溝が途切れる部分を陸橋部と想定し、ここを北コーナーとする。

平面形は東・西溝が南・北溝より長いとみられるため長方形と考える。平面規模は長軸が15.5m前後と推測され、長軸方向はN－35°－Wを示す。確認面での周溝の幅は北溝80～156cm、南溝130cm、西溝81～130cm、深さは北溝17～32cm、南溝21cm、西溝44～88cmである。周溝の断面形は地点によって極端に異なり、南・北溝では逆台形からU字形、西溝ではV字形となる。前者から後者への変換点はどちらもコーナー部付近であり、周溝の掘方は辺単位で変えられていることが考えられる。主体部は調査区域外にあるのか、或いは削平されてしまったのか、検出されてはいない。覆土は9層に分層された。基本的にレンズ状の堆積である。断面形がV字形となる西溝では上層に黒褐色砂質土、下層に様々な色調の砂が堆積し、他の地点では地山に類似する色調の砂が堆積する。

本址では北溝の西コーナー近くから出土した甕形土器（第65図23）が、周溝内への埋葬を示唆する遺物として注意される。土器は周溝の底面より約10cm高い位置から、土圧により潰れた状態で出土した。破片となり周囲に散在するものも多いが、横位であることが確認された。復元作業の結果、口縁部から胴部の一個体を欠くことが明らかとなった。土器の遺存状態と出土状態からみて、完形の土器が横位の状態で、撹乱により上面のみ削平されたものと考えられる。土器の底部には径が3cm程の孔がある。外側からの穿孔である。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は2,250gである。復元された土器として甕形土器が1個体ある。器種には甕形土器、壺形土器、甑形土器がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは甕形土器が1個体である。混入した土器として条痕文系土器が1点出土した。その他、黒曜石砕片が1点出土した。

時期　出土した土器からみて、弥生時代後期の周溝墓であると考える。

(5) 土　坑

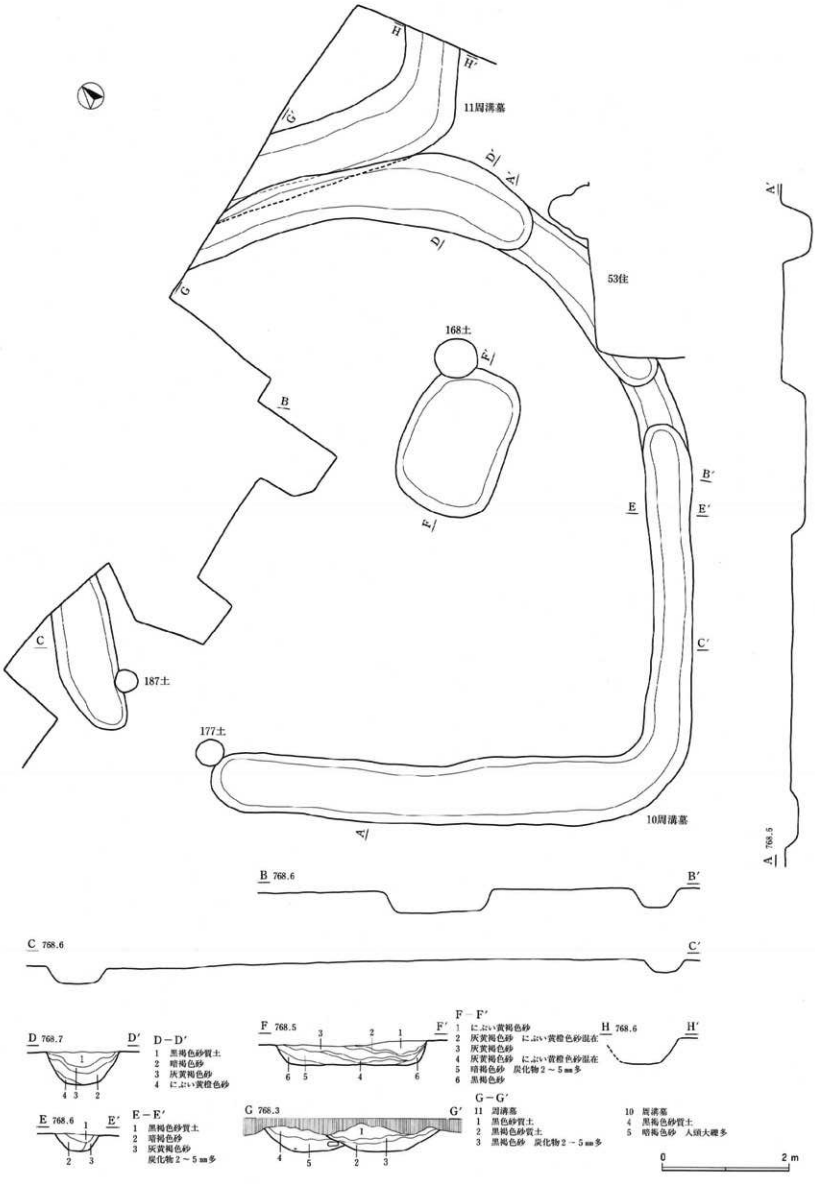
今年度の調査で番号を付した土坑は97基である。その中には掘立柱建物址を構成する柱穴などや欠番となった土坑が含まれており、これらを差し引いた土坑の実数は62基である。ここでは、3基の土坑を取り上げて説明する。他の土坑については付表を参照されたい。

第191号土坑（第43・65図）

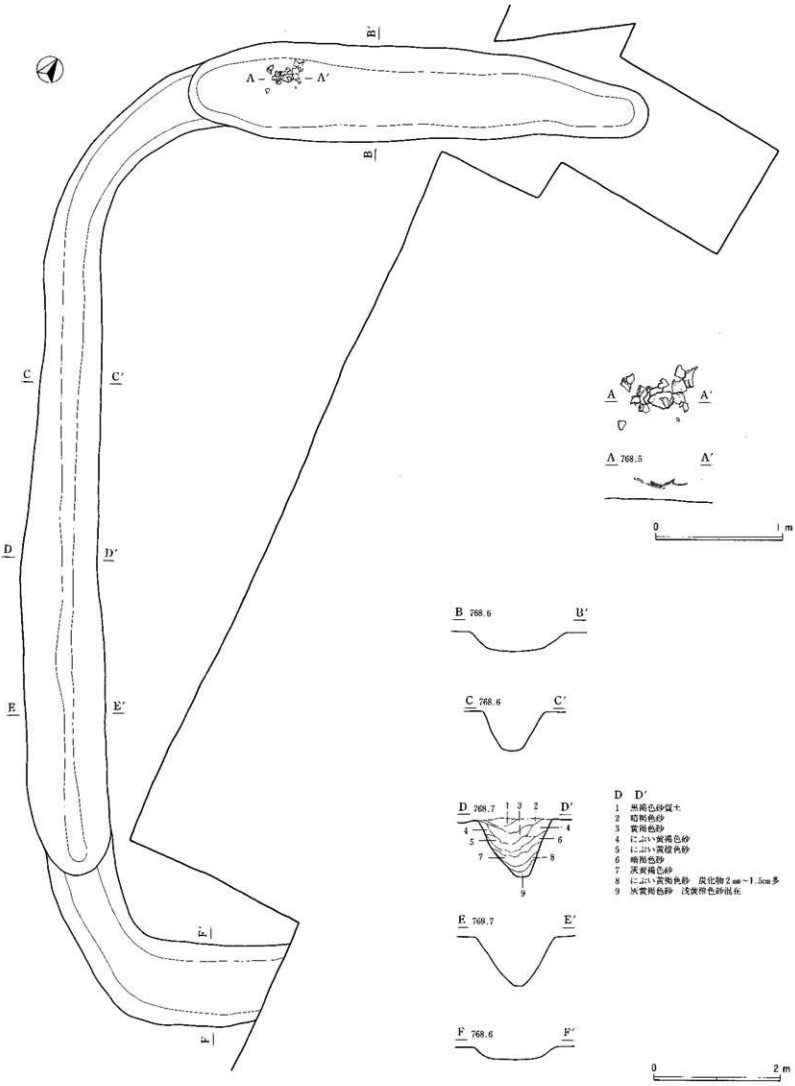
遺構　L区、モ・ヤ－49グリッドに位置する。第46号溝址と重複し、本址が古い遺構と考えられる。

平面形は不整円形、或いは楕円形で、平面規模は248×250cm、長軸方向はN－40°－Eを示す。深さは確認面から最も深い地点で75cmである。壁の中程に段があるため、底面からの立ち上がりは緩くみえる。

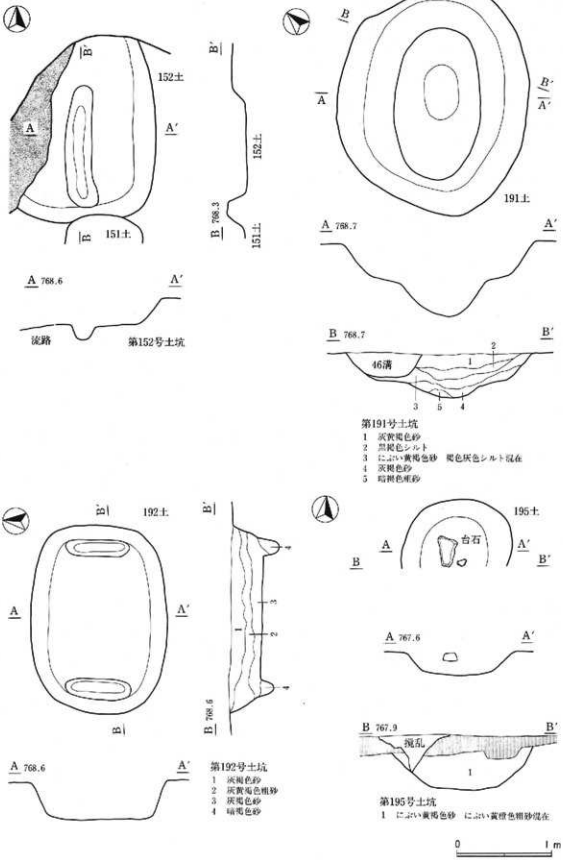
覆土は5層に分層された。各層はレンズ状に堆積するため基本的に自然堆積であると考えられるが、覆土上層から出土した壺形土器は破砕後に廃棄されたような出土状態である。覆土の上層は埋め戻されたものと



第421図 第10・11号掘建墓(1/60)



第42図 第12号掘建柱建物（1/60） 遺物出土状態（1/30）


152土
151土
A
A′
B
B′
768.3
151.上
152.上
A 768.6
流路
第152号土坑
191土
A 788.7
B 768.7
46溝
1
2
3
5
4
第191号土坑
1 灰黄褐色砂
2 黒褐色シルト
3 にぶい黄褐色砂 褐色灰色シルト混在
4 灰褐色砂
5 暗褐色細砂
192土
768.6
第192号土坑
1 灰褐色砂
2 灰黄褐色細砂
3 灰褐色砂
4 暗褐色砂
195土
白石
A 767.6
B 767.9
撹乱
第195号土坑
1 にぶい黄褐色砂 にぶい黄橙色細砂混在
0
1 m

第43図 土坑 (1/40)

考えられる。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は1,100gである。器種には甕形土器、壺形土器があり、高杯形土器、鉢形土器とみられるものもある。赤彩された土器は20gで、高杯形土器か鉢形土器とみられるものである。

時期　出土した土器と溝址との切り合い関係からみて、弥生時代後期の土坑であると考えられる。

第192号土坑（第43図）

遺構　L区、ヨ・ラ−51グリッドに位置する。

調査では本址の形態が墓坑と考えられる上に、周辺から数基の周溝墓が検出されていたこともあり、周溝墓の主体部であるとの観点に立ち周溝となるべき溝址の検出に重点を置いた。しかし、本址に伴う周溝は検出されず、単独の墓坑であるとの結論に至った。

平面形は隅丸長方形、平面規模は200×144cmで、長軸方向はN−80°−Eを示す。確認面からの深さは最も深い地点で32cmである。断面形は箱形で、壁の立ち上がりは直に近い。両短辺の底下より、木槌の小口穴とされる長楕円形の穴が検出された。東側の小口穴は平面規模が61×22cmで、底面からの深さは25cm、西側では70×22cmで、深さは21cmである。

覆土は4層に分層された。各層は土質と締まり具合などからみて、埋め戻されたものと考えられる。

遺物　副葬品となるような遺物の出土はなく、弥生土器が10g（3点）出土したに過ぎない。

時期　本址は弥生時代後期とみられる第12号周溝墓の位置を認識した上で、これと距離をおいた位置に構築されたと考えられる。また、出土した土器が弥生土器のみであることなどからみて、弥生時代後期の墓坑であると考えられる。

第195号土坑（第43図）

遺構　J区、ネ−28・29グリッドに位置する。構築地点は微高地の西縁辺部から谷部への落ち口である。

遺構確認トレンチにより本址の南側を失ったが、平面形は残存部からみて不整円形と考えられる。平面規模は120×110cm前後と推測され、確認面からの深さは最も深い地点で25cmである。断面形は皿状で、底面からの立ち上がりは緩い。底面から15cmほど高い位置より台石が出土した。大きさは人頭大で扁平な形状である。作業面が上となる出土状態からみて、台石は土坑内へ埋置されたことが考えられる。なお、本址の周囲から類似する形態の土坑（第193・194号）が検出された。検出面も同じであることからみて、3基の土坑は同じ頃に掘削された可能性が高いと考えられる。

覆土は単一層で、埋め戻された可能性がある。

遺物　出土した遺物は弥生土器のみで、30g（8点）の出土である。この中に弥生時代後期の土器が3点含まれている。石器は先述した台石（作業面に光沢のある摩耗痕がある）が1点出土した。また、磨製石鏃の未製品と考えられるものが1点出土した。

時期　出土した土器の中に弥生時代後期のものがあり、本址を覆う層より弥生時代後期の一括土器が出土している。よって、本址は弥生時代後期に埋没したことになり、掘削の時期はそれ以前となる。

(6)　溝　址

今年度の調査で新たに溝址とした遺構は14本である。この中で時期を推測し得えたものは8本である。弥生時代後期と考えられる溝址が3本、弥生時代後期から古墳時代前期が1本、古墳時代前期が1本、中世が3本である。ここでは、昨年度の続きを調査した溝址を含む9本の溝址について説明する。なお、第40号溝址は(3)古墳時代前期両の中で説明している。

第16号溝址（第44・66図）

遺構　本址は昨年度の調査で存在が明らかとなった溝址である。今年度は昨年度の続きを調査し、K区まで延びることが確認された。第44号住居址、第7号周溝墓と重複し、本址は前者より新しく、後者より古い遺構である。

今年度に検出された溝址の全長は21.1mで、第34号溝址と平行する形で緩やかに蛇行する。確認面での幅は74～86cm、深さは20cm前後である。断面形は逆台形及びU字形である。

覆土は3～4層に分層された。各層の色調は地山に類似し、粗砂を含む割合が高い。二次的に水成堆積した層は確認されていない。

本址の性格について、今年度の調査結果より以下のことが考えられる。本址の断面形状と確認面からの深さは、環濠と考えられる第34号溝址と大きく異なるものである。しかし、本址の掘削方向は第34号溝址の掘削方向と概ね同じ方向であること、微高地の北縁辺部に掘削されることからみて、第34号溝址と同様の性格をもつ溝址と考えられる。さらに、昨年度に検出された第17・18・23号溝址と関連する溝址であると考えられる。

ここで問題となる点がある。それは、昨年度の調査で考えられた本址と第17・18・23号溝址との新旧関係が、今年度に考えられたことと矛盾することである。昨年度は本址の覆土の色調と出土した土器からみて、第17・18・23号溝址より新しい溝址と考えていた。そして、時期は特定できないまでも古墳時代以降の可能性があるとした。ここに、今年度の調査で考えた本址の時期に矛盾が生じている。以下、この矛盾が生じた原因について記述する。

本址の断面形はU字形で、第17号溝址のV字形とは大きく異なる。覆土の土質と色調なども異質であり、本址を環濠と考えることなく調査を進めていた。本址と第17号溝址との重複部は、両者の覆土が類似するため新旧関係が捉えにくい状態であった。最初に引いた分層線は、本址が第17号溝址より古いことを示していたのだが、検出当初からの思い込みと確認面から出土した古墳時代以降の1点の土器を本址に伴う遺物と考え、報告書の作成時に第17号溝址との新旧関係を逆転させている。このことにより矛盾が生じてしまったのである。

以上の記述は事実記載の項にふさわしくないものであるが、調査に主観を入れ過ぎたことに対する反省として記述したものである。そこで、本報告書に昨年度の調査で作成した図面を掲載し、記述も合わせて訂正させて頂きたい。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は、昨年度と今年度を合わせて500gである。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものはない。石器類は黒曜石砕片が1点出土した。

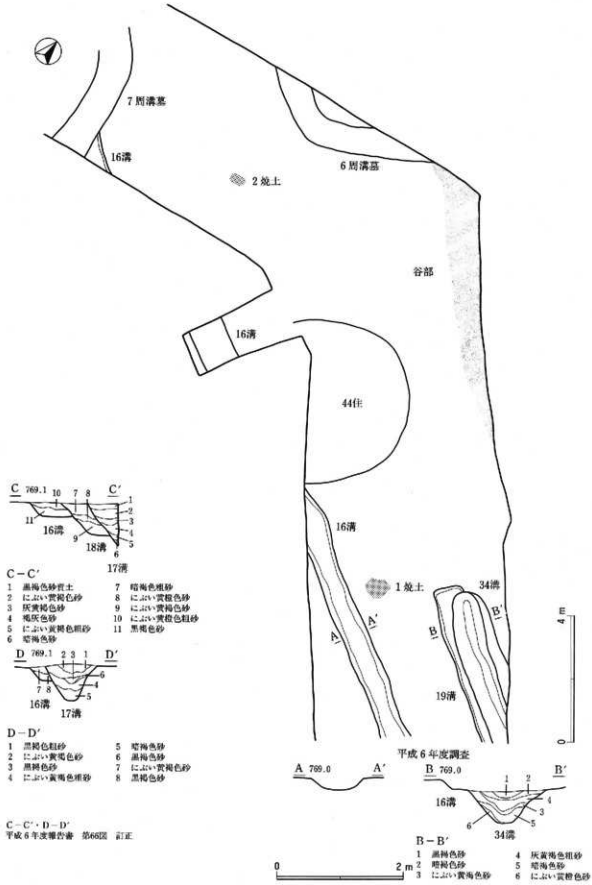
時期　環濠の一部と考えられることからみて、弥生時代後期の溝址であると考えられる。

第30号溝址（第45・65・66図）

遺構　C′区で検出された溝址である。第42号住居址と重複し、本址が古い遺構である。

本址は緩やかな弧を描き南北に掘削される。今年度に検出された溝址の全長は10.6mである。昨年度の調査においてA区の西隅まで延びることが考えられており、直線距離にすると約47mとなる。確認面での幅は88～120cmで、深さは22～39cmである。C′区内では南端と北端のレベル差は殆どないが、C′区の北端とA区とではC′区の方が約20cm高い。断面形はU字形、または逆台形である。

覆土は壁際から堆積が始まり、次いで底面の中央付近に粗砂が堆積したと考えられる。粗砂層より廃棄されたと考えられる遺物が多量に出土している。



C－C′・D－D′
平成6年度報告書　第66図　訂正

第44図　第16・34号溝址（1/120・1/60）

本址の性格を考えるとき、覆土の堆積状態と遺物の遺存状態が重要と考えられる。覆土については粗砂が底面の中央付近に水成堆積し、さらに底面に鉄分の集積層があることからみて、ある時期に水と接していたことは確実と言える。調査では水路か否かを明らかにできなかったが、水路であるとした場合、出土した土器に摩耗の顕著なものが少ないことから、遺物が廃棄された時点では止水に近い状態であったと考えられる。

遺物　出土した土器は弥生時代中期後半に限られ、その量は5,260ｇである。昨年度に出土した土器との合計は15,960ｇに及ぶ。器種は甕形土器、壺形土器、高杯形土器、鉢形土器がある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは、甕形土器が２個体、壺形土器が３個体である。赤彩された土器は1,150ｇで、壺形土器、高杯形土器、鉢形土器がある。黒曜石の出土量は515ｇである。製品には石鏃、石錐があり、石鏃の未製品、使用痕のある剥片、調整加工のある剥片や、剥片・砕片が出土した。その他に、打製石斧の破損品とみられるものと水晶の剥片が出土した。

時期　出土した土器からみて、弥生時代中期後半の溝址であると考えられる。

第31～33号溝址（第46図）

遺構　Ａ区の谷部より検出された。第31号溝址は第33号溝址と第４号列石と重複する。第33号溝址との切り合いは不明である。第４号列石とは第31号溝址が列石を切るようにも見えるが、列石が僅かに溝址の上端にかかることからみて、溝址が先に掘削されたと考えられる。なお、第40号溝址は第33号溝址の下層より検出された。

第31号溝址は全長23.8ｍ、確認面での幅は31～59㎝、深さは８～32㎝である。溝の底面は微高地側から断層崖側へ傾斜する。覆土は２層に分層された。底面上に堆積した第２層には粗砂が縞状に混在する。

第32号溝址は第31号溝址の東約３ｍに平行して掘削される。検出された溝址の全長は13.2ｍ、確認面での幅は51～101㎝、深さは12～18㎝である。溝の底面は地形に対し、ほぼ平らに掘削されている。覆土は２層に分層され、第１層は黒褐色砂質土ににぶい黄橙色砂が斑に入り、第２層は黒褐色シルトである。どちらも二次的に水性堆積したことが考えられる。

第33号溝址は第31･32号溝址に直交し、第４号列石に沿う溝址である。検出された溝址の全長は7.5ｍ、確認面での幅は17～38㎝、深さは6～11㎝である。溝の底面は東から西へ傾斜する。

遺物　第31号溝址で出土した土器は弥生時代後期、古墳時代前期のＳ字甕ほか、奈良時代から平安時代の須恵器が10数点と、中世と考えられる内耳土器が１点、土師質土器が５点以上出土した。また、黒曜石砕片が１点出土した。

第32号溝址で出土した土器は弥生時代後期、古墳時代前期、奈良から平安時代の須恵器が10点あまりと、土師質土器が２点出土した。

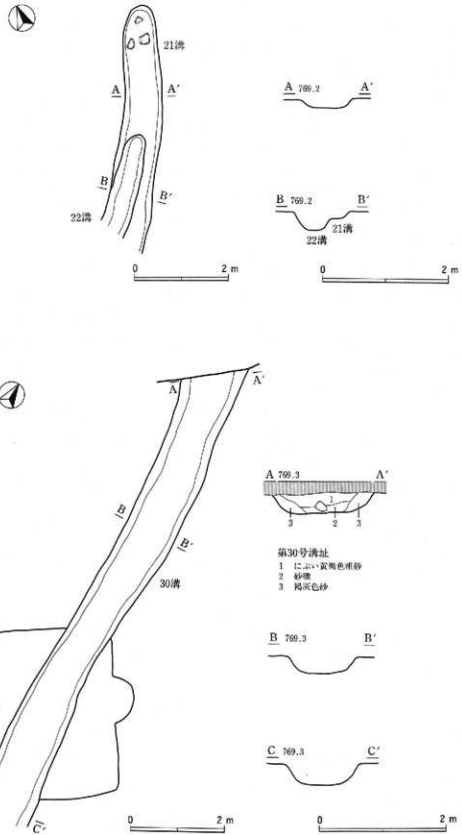
第33号溝址では土器は出土していない。

時期　３本の溝址の時期は、出土した土器と遺構の検出された層位からみて中世であると考えられる。なお、第31～33号溝址と第４号列石の位置関係は平行するか直交するかであるため、相互の帰属時期に大きな隔たりはないと考える。

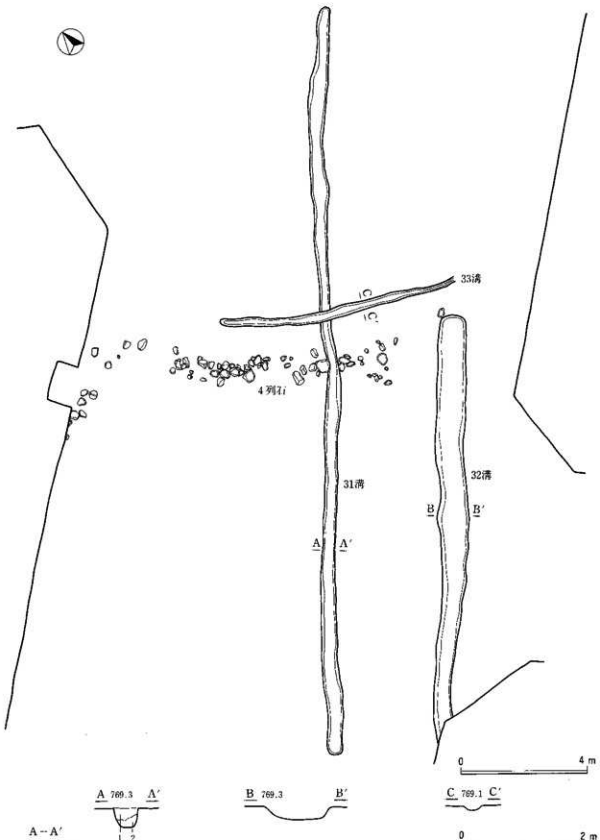
第34号溝址（第44・66図）

遺構　Ｉ区に位置し、調査区東断面にかかり検出された。第19号溝址と重複し、本址が古い遺構である。

本址は微高地の北縁辺部に掘削される。掘削方向は第16号溝址とほぼ平行する。検出された溝址の全長は6.9ｍで、Ｉ区とＫ区が接する部分で確認された谷部へ落ち口で終息する。確認面での幅は120～131㎝、深さは62～75㎝で、断面形はＶ字形である。掘削される位置と掘方、出土した土器からみて、昨年度に検出され



第45図　第21・30号溝址（1/80・1/60）



第46図　第31～33号溝址（1/120・1/60）

た第17号溝址に繋がる溝址と考えられる。

覆土は6層に分層された。各層は基本的にレンズ状の堆積状態で、土器の存在を示唆するような一方向への流れ込みは確認されていない。

遺物　出土した土器は弥生時代後期のみで、その量は960gである。器種には甕形土器、壺形土器があり、高杯形土器か鉢形土器とみられるものもある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものはない。赤彩された土器は50gで、壺形土器、高杯形土器か鉢形土器とみられるものがある。石器類は黒曜石の石核とみられるものが1点、磨製石鏃の素材となる堆積岩片が1点出土した。

時期　出土した土器と関連する遺構の時期からみて、弥生時代後期の溝址であると考えられる。

第37号溝址（第47・67図）

遺構B区からの検出で、第41号溝址と近接する。

本址の掘削方向は南東から北西である。周囲に掘乱を受けた部分が多く、そのためか検出された溝址の全長は3.6mに過ぎない。確認面での幅は48～92cm、深さは10～32cmである。断面形はU字形で、一部に壁の崩落とみられる部分がある。底面はほぼ一定の深さで掘削されている。

本址で注目される点は、弥生時代後期の甕形土器（第67図2）が底面に密着して出土したことである。出土状態は溝の掘削方向に沿う横位である。土器の遺存状態は完形に近く、欠損部は口縁部と胴部の一部のみである。胴部の欠損部は、割れ口が極めて新しいため穿孔されたものではないと考えられる。これまでに溝址出土の土器で器形復元されたものは、いずれも周溝墓（第5・7・8・12号）の周溝から出土している。そのことに加え、本址に直交する第41号溝址を関連する溝址と考えるならば、本址を周溝墓の周溝と考えることができる。また、第165号土坑の位置と長軸方向も注意されるところである。

覆土は6層に分層された。第3層から第6層は二次的に水成堆積したと考えられる粗砂とシルトなどである。これらの層が溝址の性格を示すものであれば、本址を水路とすることが妥当であるが、遺構の検出状態や土器の出土状態などからみると水路とすることは難しいと思われる。

遺物　出土した弥生土器は1,420gである。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものは、甕形土器が1個体である。

時期　出土した土器からみて、弥生時代後期の溝址であると考えられる。

第42号溝址（第48・67図）

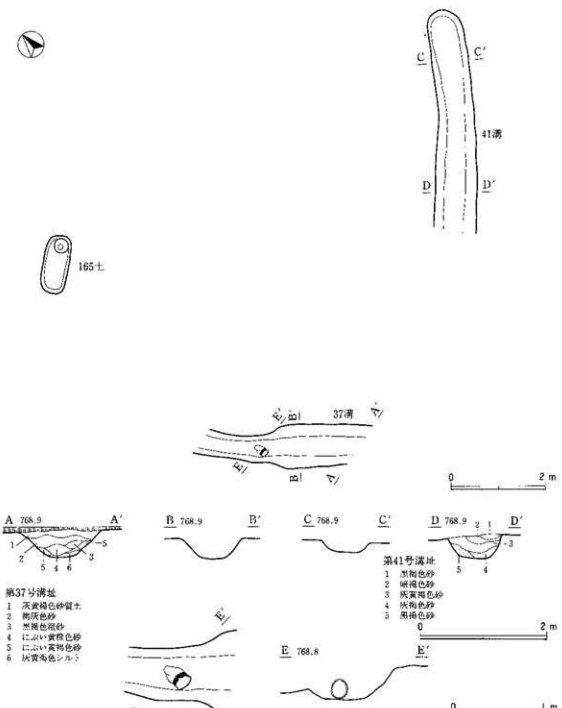
遺構　K区の西隅に位置し、調査区の断面にかかり検出された。本址は検出された位置、掘削される方向、断面形状、出土した土器などからみて、昨年度に検出した第15号溝址と繋がる可能性が高い。

掘削方向は南北で、全長は3.2m、確認面での幅は170cm以上、深さは66～81cmである。断面形は中程に段があるV字形となる。段は掘削時の足場として意識的に作り出されたものとも考えられる。

覆土は8層に分層された。上層から砂質土、砂、シルトが堆積し、一方向から流れ込む層は確認されていない。第2層から第5層は乱れた堆積状態を示し、第2層では人頭大程度の礫が10点あまり出土した。このことから、覆土の一部は埋め戻されたことが考えられる。

遺物　第2層を中心に弥生時代後期の土器が出土した。その量は1,080gである。器種には甕形土器、壺形土器、高杯形土器があり、鉢形土器とみられるものもある。図上での器形復元も含め、土器の器形が窺えるものはない。赤彩された土器は280gで、高杯形土器と、鉢形土器とみられるものがある。石器類は磨製石鏃の素材となる堆積岩片に剥離痕のあるものが1点出土した。

時期　出土した土器と関連する遺構の時期からみて、弥生時代後期の溝址であると考えられる。

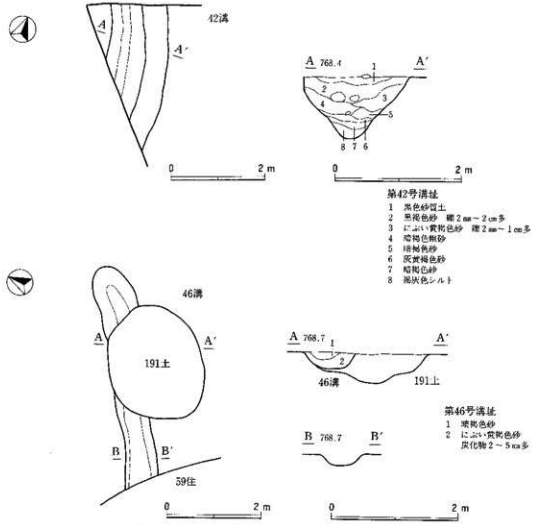


第47図　第37・41号溝址（1/80・1/60）　土器出土状態（1/40）

第47号溝址（第49・67図）

遺構　P区とQ区が接する部分からQ区にかけて検出された。第235・236号土坑は位置的にみて本址に伴う土坑の可能性がある。

本址は古墳時代前期の第63号住居址を囲むように東から西へ弧状に掘削される。検出された溝址の全長は7.4m、確認面での幅は60～125cm、深さは13～24cmである。断面形はU字形である。溝内において第235・236号土坑が検出された。第235号土坑は円形で、平面規模は40×34cm、溝底面からの深さは23cm、第236号土坑は楕円形で、平面規模は52×32cm、溝底面からの深さは45cmである。柱痕が存在したか否かは不明である。



第48図　第42・46号溝址（1/80・1/60）

覆土は2層に分層された。堆積状態はレンズ状である。

遺物　出土した土器は360ｇで、弥生時代後期の土器が主体をなす。赤彩された土器は20ｇである。古墳時代前期と中期とみられる土器が検出面より1点ずつ出土したが、本址付近は部分的に深い位置まで撹乱が及んでいることもあり、これらの土器は周辺の遺構より混入した可能性がある。

時期　出土した土器の主体をなす時期をとれば弥生時代後期の溝址となる。本址の上面は古墳時代中期面とした面に覆われていた可能性がある。そして、弥生時代後期と考えられる第7号竪穴状遺構、古墳時代前期と考えられる第63・64号住居址と近接するものの重複しない位置関係からみて、弥生時代後期から古墳時代前期の間に掘削された溝址であると考えておきたい。

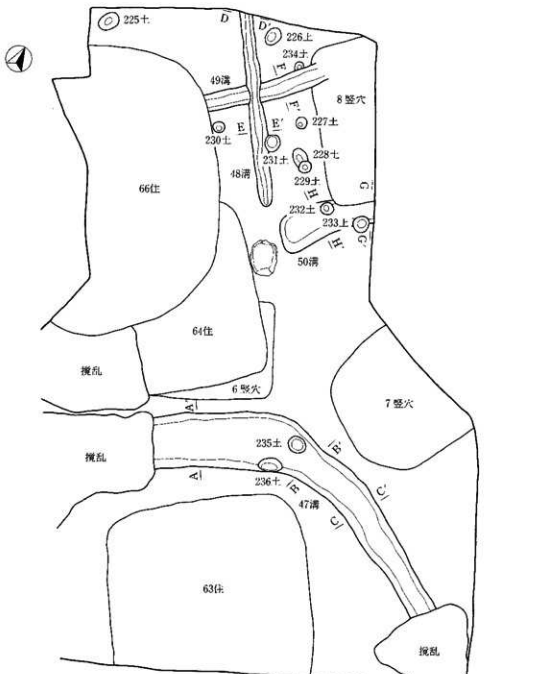
(7) 列　石

直線的に礫が配された遺構を列石とした。今年度は4基が検出された。

第2号列石（第50図）

遺構　A区、微高地と谷部との間より検出され、O′−73グリッドに位置する。

検出された礫は5点であるが、掘方とみられる浅い掘り込みが南西に延びていることからみて、本址は南西方向へ続くことが考えられる。礫はいずれも河原の礫である。



第49図　第47～50号溝址（1/80・1/60）

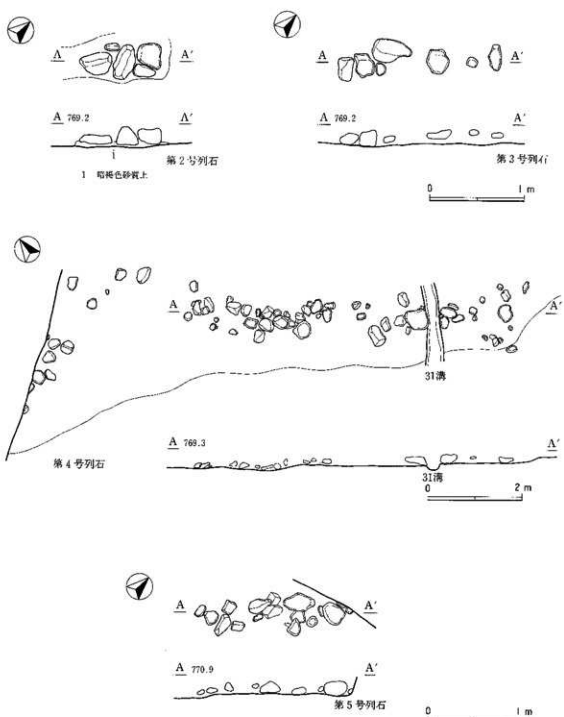
掘方内の土は暗褐色砂質土で、硬く締まっている。

遺物　列石周囲の礫上面レベルより、内耳土器の破片が数点出土した。

時期　礫が据えられた面は中世とみられる耕作土層内と考えられる。従って、該期の列石であると考えられる。

第3号列石（第50図）

遺構　A区、微高地と谷部との間から検出され、T′−74グリッドに位置する。



第50図　列石（第2・3・5号は1/40、第4号は1/80）

検出された礫は7点で、いずれも河原の礫である。礫の周囲を精査したが、掘方と考えられる掘り込みは確認されなかった。

遺物　列石に伴う遺物の出土はない。

時期　礫が据えられた面は中世とみられる耕作土層内と考えられる。従って、該期の列石であると考えられる。

第4号列石（第50図）

遺構　A区の谷部に位置し、谷の走行方向に沿う。第31号溝址と重複し、列石が僅かに溝址の上端にかかることにより、本址が古い遺構であると考えられる。ただし、溝址の項で記述したように、構築された時期に大きな隔たりはないと考える。

列石はA区にほぼ直交する形で、南西から北西方向に直線的に並ぶ礫からなる。列石の直下には2㎜～2㎝大の礫を含有する黒褐色土（土石流と考えられる）が堆積し、一部はこの層に食い込むことから自然礫とも考えられた。しかし、この層に大形の礫は含有されず、大形で扁平な礫は据えられた状態を示している。さらに、列石を構成するほどの大きな礫は検出面周辺にみられないため、人為的に配された礫であると判断した。礫はすべて河原の礫である。

遺物　礫に接して須恵器が1点、礫の上面より中世と考えられる土師質土器が数点出土した。

時期　列石を覆う層より出土した最も新しい時期の土器は中世と考えられる。また、列石が据えられた可能性のある層（直下の黒褐色土）より、中世の土師質土器と考えられる土器が出土した。以上からみて、中世の列石であると考えられる。

第5号列石（第50図）

遺構　P区の北断面にかかり検出された。ナー139グリッドに位置する。

検出面は古墳時代中期面の上面と下面との間で、該期に動かされたことが考えられる暗褐色～黒褐色砂質土内である。また、中期面の下面に伴う第7号焼土址の直上に位置する。

検出された礫は20点あまりで、いずれも河原の礫である。列石の方向は北東から南西である。調査区の断面で掘方の有無を検討したが、掘り込みは確認されなかった。

遺物　列石内から出土した遺物はない。

時期　検出された層の時期からみて、古墳時代中期の列石と考えられる。

(8) 柱穴群（第51図）

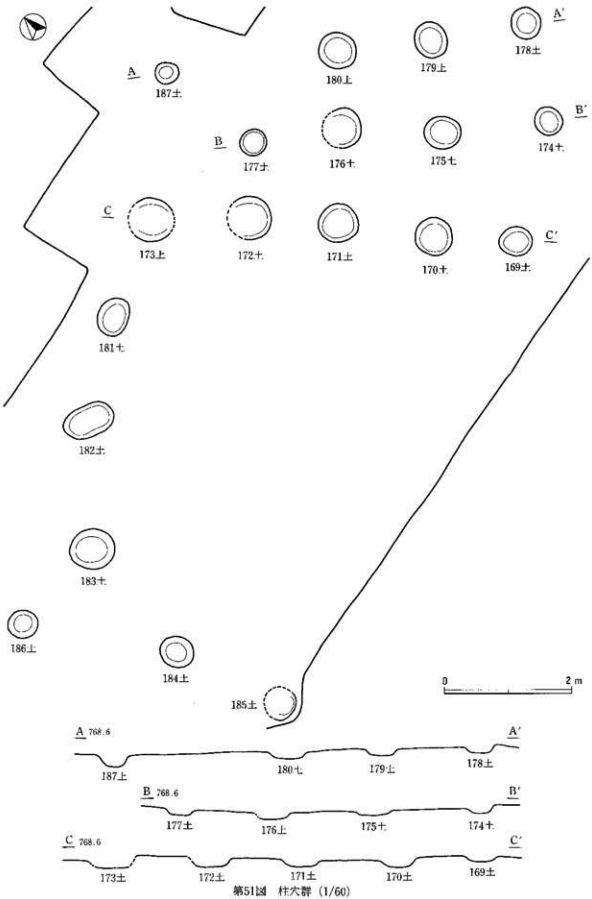
K区の南西において、柱穴とみられる土坑がまとまって検出された。土坑どうしを組み合わせる基準が見出せないため、柱穴群と呼称し一括で報告する。

遺構　K区、ソート－51～53グリッドを中心に分布する。第54号住居址、第10号周溝墓と重複し、どちらの遺構より新しい遺構である。

柱穴群とした土坑は19基である。第185号土坑の検出位置からみて、調査区域外へ続くことが考えられる。160番台と170番台の土坑の中に、約1.2～2.0mの間隔をもち配列するものがみられるが、掘立柱建物址とするための基準が見出せない。柱穴の平面形は円形を基調とする。上面径は35～82cm、確認面からの深さは7～20cmである。平面と断面において柱痕が確認されたものは第174・176号土坑である。

覆土は黒色～黒褐色土に明黄褐色砂が入り、粘性を帯びる特徴がある。

遺物　土器が出土した土坑は13基である。弥生時代後期から古墳時代以降と考えられる土器があり、弥生時代後期の土器は重複する該期の住居址と周溝墓からの混入品とみるのが妥当と考える。


A
187土
B
177土
C
173上
172十
171上
180上
176十
179上
175七
178土
A′
B′
174十
C′
170十
169土
181七
182土
183十
186上
184土
185土
0
2 m
A 768.6
A′
187上
180七
179上
178土
B 768.6
B′
177土
176上
175十
174十
C 768.6
C′
173土
172土
171土
170土
169土

第51図　柱穴群 (1/60)

時期　他遺構との切り合いと、古墳時代以降と考えられる土器の出土からみて、古墳時代以降の柱穴群であると考えられる。

(9) 焼土址

竪穴住居址などの居住施設に伴う炉址やカマドではないと判断された焼土址に対し番号を付した。第7・8号焼土址は、(3)古墳時代中期面と盛土の中で触れることにする。

第1号焼土址（第52図）

遺構　I区、F′−63グリッドに位置する。第44号住居址、第19・34号溝址に近接する。

焼土は42cm×36cmの不整円形で、厚みは8cmである。断ち割りにより、焼土址より一回り大きな掘り込みが確認された。深さは15cmで、掘方と考えられる。

遺物　焼土址内より時期不明の土器が1点出土した。

時期　本址の時期は不明である。

第2号焼土址（第52図）

遺構　K区、B′−58グリッドに位置する。第44号住居址と第6・7号周溝墓に近接する。

焼土は46cm×28cmの東西に細長い不整形で、厚みは8cmである。

遺物　周囲から弥生時代中期後半以降の土器が出土した。

時期　本址の時期は不明である。

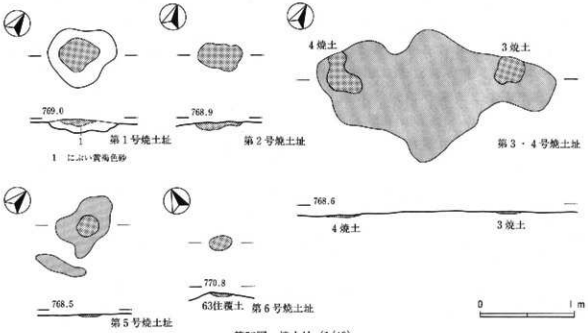
第6号焼土址（第52図）

遺構　Q区、ニ−144グリッドに位置する。本址は第63号住居址の覆土内から検出された。

焼土は24cm×14cmの東西に長い楕円形で、厚みは4cmである。本址を確認した面は第63号住居址の床面から約55cm上である。

遺物　焼土内より古墳時代中期の高杯などが出土した。

時期　出土した土器からみて、古墳時代中期の焼土址であると考えられる。また、検出レベルは(3)古墳時代中期面とした面とほぼ同じであり、本址はその面に伴う可能性が高い。



第52図　焼土址（1/40）

⑽ 埋設土器

竪穴住居址などの遺構に伴わない単独のものを埋設土器とした。

第1号埋設土器（第53図）

遺構　A区の調査区北断面にかかり検出された（E－E′）。

検出当初、埋設土器を礫で囲む竪穴住居址の炉址であると考えていたが、焼土を伴わない単独のものであることが明らかとなり埋設土器の名称を付した。掘方は径60cmほどで、深さは15cmである。土器は甕で、底部を欠く胴部下半の約1/3が敷かれる。その上と脇に4点の河原の礫が据えられる。掘方内の覆土は黒褐色砂質土である。

遺物　掘方から出土した遺物は先述した甕のみである。

時期　検出された層からみると古墳時代前期以降の遺構と考えられる。土器の残存部は最も特徴のない胴部下半であるが、古墳時代前期の土器であると考えられる。

⑾ 谷部と弥生時代遺物包含層（第53・67・68図）

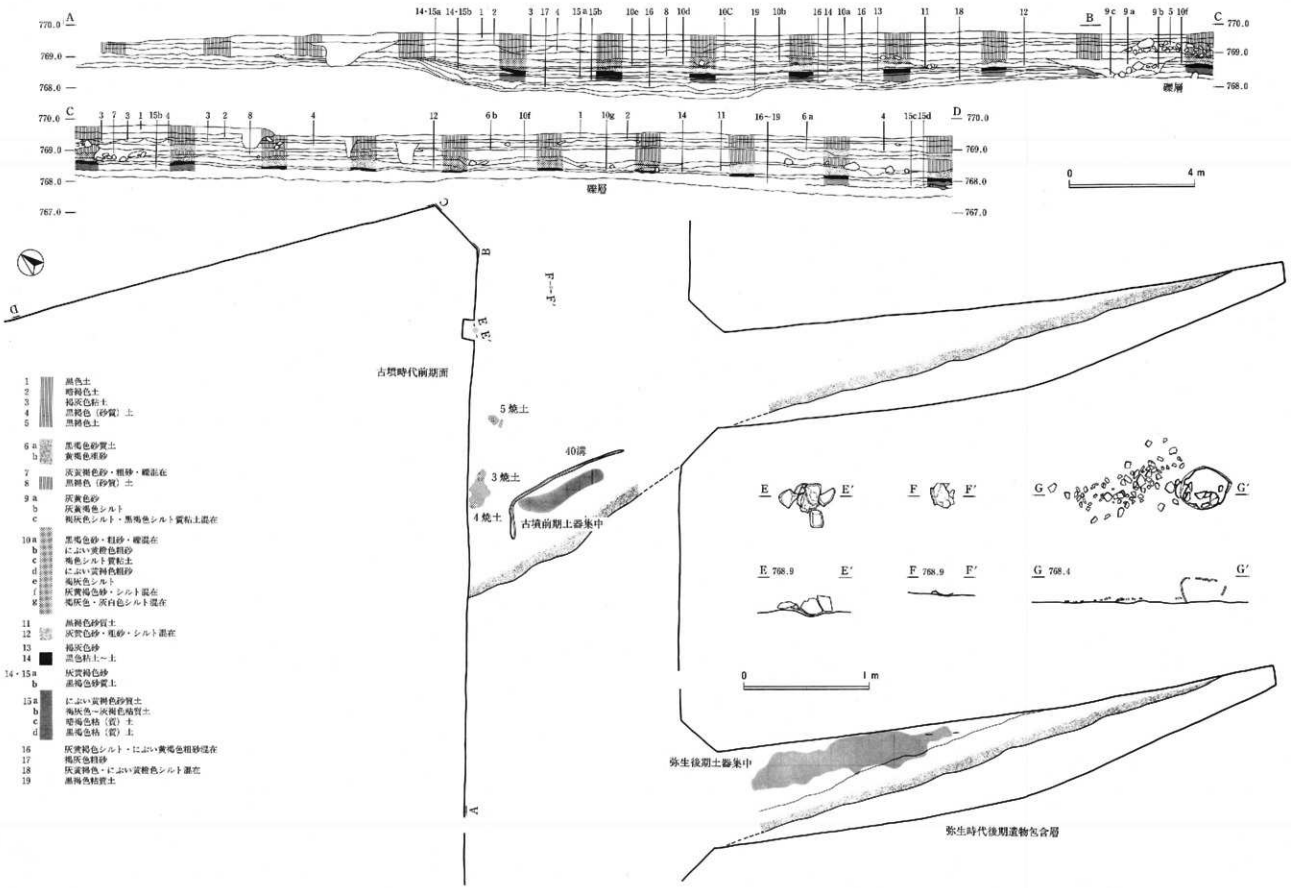
谷部は弥生時代後期に環濠集落などがつくられた微高地と断層崖との間に位置する。

調査区ではA・I・J・M～O区が該当する。A・N・O区では微高地と断層崖の間隔が狭く、谷の方向は自然地形に規制されることとなる。ここでは断層崖に沿った南東から北西方向である。M区に入ると微高地と断層崖との間隔が扇状に広くなり、谷も幅広になっていく。これにつれて、A・N・O区では南東から北西方向への一筋の谷であったものが、幾筋もの小さな谷へと枝分かれすることが考えられる。J区では微高地の北縁辺部に沿い、北東から南東方向へ向かう谷が確認されているが、この谷も枝分かれした一筋の谷であると考えられる。

谷部の調査は弥生時代後期の遺物包含層までを対象とした。シルト混じりの砂層が遺物包含層で、その下端を該期に形成された自然流路の下端（谷底）と考えている。谷を横切るA区と、谷に沿うM区とN区の調査では、湧水に悩まされながらも谷部に関わる多くの情報が得られた。特にA区では、この地点における谷部のおおよその規模や形態を捉えることができた。谷の幅については、どの範囲をもって谷の幅とすべきか問題があるが、微高地から続く基盤層が断層崖方向へと落ち込む肩部から断層崖の下端までの間とすると、50m程度の幅を有することになる。微高地で検出された弥生時代後期の竪穴住居址確認レベルと該期の谷底のレベルにより、微高地平坦面の中央付近と谷底との比高差を計測すると、約1.5mとなる。谷の形態を弥生時代後期の遺物包含層でみると、微高地側から約25°の傾斜で谷底へと落ち込み、いったん立ち上がった後、緩やかな起伏を経て、断層崖へ向かい立ち上がるものと捉えられる。

A・M・N区の調査では、弥生時代後期と古墳時代前期の遺物包含層が確認された。古墳時代前期では⑿古墳時代前期面として別項に記述したので、ここでは弥生時代後期について触れることとする。

先述したとおり、弥生時代後期の遺物包含層は該期の自然流路の下端直上に堆積したシルト混じりの砂層である。この層より出土した弥生時代後期の土器は、時期からみて環濠集落と対応することが考えられるため、遺物包含層は環濠集落と同時期に形成された層であると考えられる。土器はN区からの出土が多く、大半は破片で出土した。図上での器形復元を含め器形が窺える土器は4個体で、この中に出土状態と遺存状態が注意される壺形土器がある（G－G′、第67図41）。土器はN区から出土し、出土状態は正位で遺存状態は口縁部から頸部と胴部の下半を欠損する。欠損部は人為的な打ち欠きと考えられる上、胴部の欠損部は穿孔とみられる。土器は正位に置かれたか、或いは埋置されたかの確証はないが、遺存状態からみる限り容底へ向かい投げ込まれたものとは考え難い。また、この土器に近接し横位で出土した甕形土器は（第68図23）、底部



第53図　谷部と弥生時代後期遺物包含層・古墳時代前期面（1/240）土器出土状態（1/30）

のみを欠いている。

遺物　出土した弥生時代後期の土器は約15,850gである。石器類では黒曜石の剥片が2点、磨製石鏃の未製品とも考えられる研磨痕のある堆積岩1点、磨製石鏃などの素材となる堆積岩片が7点出土した。

⑿　古墳時代前期面（第52・53図）

A区の谷部において、焼土址・土器集中と溝址が検出された。土層断面によると、谷がある程度埋没した段階に同一面に残された遺構であると考えられた。この面を便宜的に古墳時代前期面と呼称する。

焼土址は3基（第3号～5号）が検出された（第52図）。3基は近接し、それぞれの焼土の周囲に炭化物が散布する。検出面が同じ面と考えられるため、3基の焼土址は同時に形成されたか、或いは短期間の内に形成されたことが考えられる。第3号焼土址は28cm×26cmの不整円形、第4号焼土址は41cm×37cmの不整形、第5号焼土址は22cm×20cmの円形で、厚みはいずれも3cm内外である。共に地山が赤く変色する程度の焼け方で、住居址の炉址のように堅緻な燃焼により形成されたものではないと考えられる。また、検出面には床面と考えられる硬化面はなく、調査区の断面にも竪穴住居址となる掘り込みも確認されていない。焼土址内からS字甕の胴部の破片が少量出土した。

土器集中は1ヶ所である。第40号溝址に囲まれるようにして出土した5個体分以上のS字甕を土器集中とした。土器は土圧により押しつぶされた状態で出土した。復元作業により2個体が器形復元されたが、どちらも完形とならないものである。土器に伴う掘り込みの有無は確認ができていない。土器集中から約7m離れた地点より、S字甕1個体（F－F'）と高杯2個体が出土し復元された。なお、同一面より小型丸底鉢、直口壺などの破片が出土した。

溝址は第40号としたものである。A区に直交する形でL字状を呈し、全長は10.4m、確認面での幅は16～32cm、深さは9～15cmである。本址の検出面は古墳時代前期と考えられる第3～5号焼土址と同じ面である。さらに本址に囲まれた（L字の内側）状態で、古墳時代前期の土器集中が検出された。本址はそれらと何らかの関係があると考えられる。

遺物　出土した古墳時代前期の土器は6,190gである。土器集中以外から出土した土器も含め、9個体について器形復元が可能である。

⒀　古墳時代中期面と盛土（第54図）

P区とQ区において、第7・8号焼土址を伴う炭化物の散布面が2面（以下、上面と下面とする）検出された。この面は古墳時代中期に形成されたことが考えられるため、便宜的に古墳時代中期面と呼称する。また、古墳時代中期面の上層には中期面との関連性が考えられる盛土が確認されたため、併せて報告する。なお、古墳時代中期面と重なる遺構で、報告書で触れていない遺構との新旧関係は次のとおりである。第48～50号溝址は検出面と出土した土器からみて、古墳時代中期面より古いことが考えられる。第225～234号土坑の10基については、覆土が第2層から第5層が混在したような色調であったため、新旧関係を明らかにすることはできなかった。ただ、1基の土坑より古墳時代前期と考えられる土器が出土しており、これが確実に土坑に伴うものであるとすれば、上限は古墳時代前期となる。

遺構　古墳時代中期面はP区及びQ区の断面において確認され、P区では面で検出された。また、盛土はP区の断面において確認された。

古墳時代中期の面と考えた根拠として、①上面と下面が古墳時代前期と考えられる第63・64号住居址と中期と考えられる第65号住居址を覆うこと、②調査区の断面に炭化物を多量に含有する黒色土の薄層が焼土を伴い面をなして確認され、上面の直上を覆う暗褐色土（第2層）及び下面の直上を覆う暗褐色～黒褐色砂質

土（第4層）内には弥生時代後期から古墳時代中期の土器のみが包含されていたこと、③P区のほぼ中央より、下面に据えられたと考えられる75×55×30cmの安山岩が検出されたことからである。

上面と下面の黒色（砂質）土の薄層は、共に1～6cmの厚みである。下面では部分的に硬化した面が確認された。これらの層に多く含有される炭化物は焼土址の周辺で厚みを増す。焼土址は上面と下面に1ヶ所ずつあり、どちらも調査区断面にかかり検出された。下面に伴う第7号焼土址は約10cm厚みがあり、住居址の炉なみに焼けている。上面の第8号焼土址の厚みは約5cmで、地山が赤く変色する程度の焼け方である。

先述したように、上面と下面は暗褐色砂質土及び黒褐色砂質土に覆われる。層の厚みは5～23cmである。この層より古墳時代中期の高杯など該期の土器が出土した。盛土された層とは土色、含有物、締まり具合などの面で大きく異なるが、整地のため？に動かされた層であると考えている。下面の形成については、第8号竪穴状遺構などの残存する壁の高さからみて、地形の高い側を削り低い側を埋めたてていると考えられる。

盛土はP区の調査区北・東断面で確認された。古墳時代中期面との関連性を考えた根拠は、盛土から出土した土器で最も時期の新しいものが該期であったことなどによる。遺存状態の良い東断面によると、最も厚いところで38cmを測る。土色や締まり具合などにより10層以上の単位に分層が可能で、全体的につき固めたように硬く締まっているなど、版築ともいえる状態を示す。

古墳時代中期面と盛土がのる原地形は、第Ⅱ章　調査区の地形の中で記述したとおり、周辺よりも小高い小規模な台地であることが考えられている。そのような地形にのるためか、両者の層はP区の北断面から西と南へ極めて緩やかに傾斜することが土層断面図で見てとれる。従って、次年度に調査予定の北及び東へも、緩傾斜しながら続くことが推測される。

遺物　古墳時代中期面の下面から盛土の間より出土した該期の土器は1,050g である。器種には甕、杯、小型丸底壺？、無頸壺、高杯などがあり、主体は高杯である。図上での器形復元を含め、土器の器形が窺えるものは出土していない。古墳時代中期面の下面より鉄鏃と考えられる鉄製品が1点出土した。錆ぶくれの上、錆と土が固着し、辛うじて原形が推測できる状態である。鏃身部のみが遺存し、逆刺がある広根式である。

⑭　畝状遺構

遺構　Ⅰ・K・L区において検出された。

畝の本数は90本あまりで、確認面での畝の間隔は10～70cmである。主軸方向はN-14°-EからN-34°-Eの間におさまり、大きく3方向に分けることができる。畝間に入る溝は、確認面での計測で長さ1.35～6.8m、幅25～75cm、深さ1～14cmである。溝の覆土には灰褐色粘質土と黒色粘質土がある。

遺物　溝から出土した遺物は、弥生時代中期後半から中世の土器である。

時期　検出された層位と、溝から出土した土器からみて、中世の遺構であると考えられる。

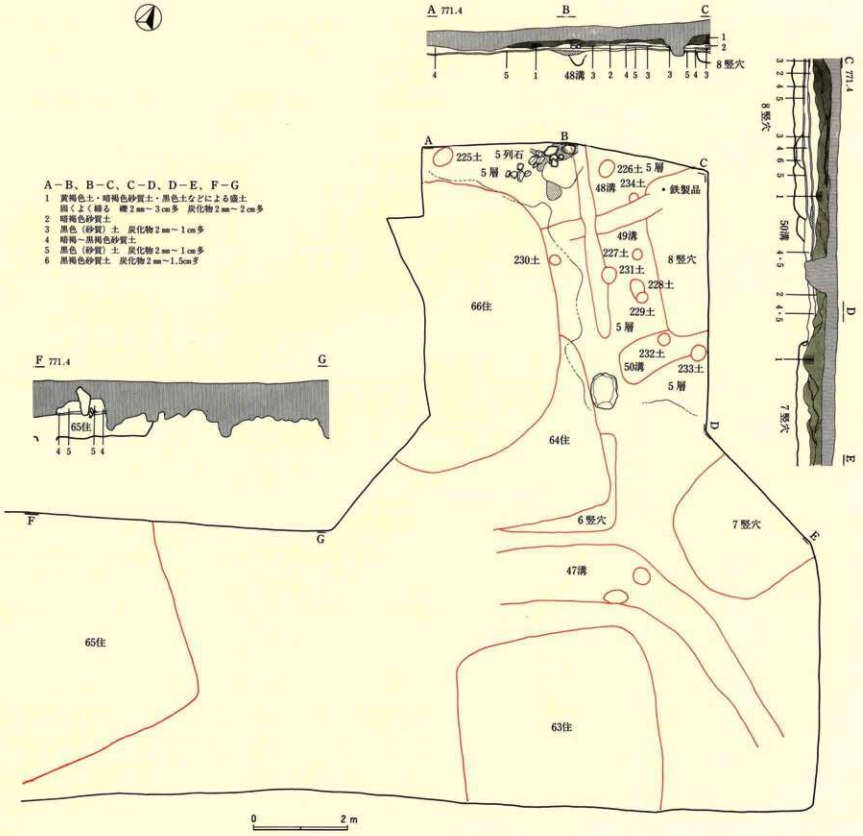
⑮　方形竪穴

第5号方形竪穴a・b（第55図）

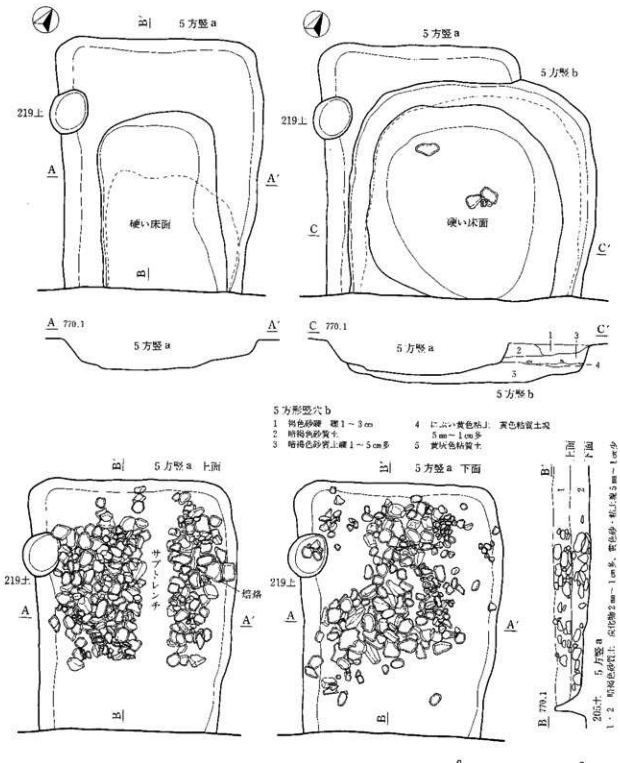
遺構　Q区、エ～オ－146・147グリッドに位置し、遺構の1/3ほどは調査区域外にあると考えられる。本址は第12号掘立柱建物址内にあり、位置関係からみて掘立柱建物址に付属する方形竪穴の可能性もある。第69号住居址、第7号方形竪穴と近接する。

第5号方形竪穴aはbのつくり替えと考えられたため、ここでは両者を報告する。

第5号方形竪穴aは平面プランを変えずに底面の貼り替え（以下、上面と下面）が行われている。平面形は長方形、平面規模は長辺3.95m以上、短辺3.15m、長軸方向はN-32°Wである。上面で残存する壁の高さは平均25cmで、底面からの立ち上がりは急である。底面はほぼ平らに貼床され、所々に硬化面が確認された。



第54図　古墳時代中期面と盛土（S＝1/80）



第55図　第5号方形竪穴a・b（1/60）

下面で残存する壁の高さは41～60cmで、底面からの立ち上がりは北・東壁は急で、西壁では緩い。底面は中央付近が隅丸長方形に窪み、その南側は硬化する。上面・下面ともに大小の河原の礫が底面の北側に集中して検出された。上面では東西約2.6m、南北約2.2mの長方形の範囲に礫がまとまる。礫の多くは3重から4重に重なり合うが、積石されたとは思えない状態である。下面では逆L字形に礫が分布し、東側の礫の大き

さは西側に比べて小振りである。

第５号方形竪穴ｂはａに貼床される。平面形は隅丸長方形、平面規模は東西3.9ｍ、南北3.5ｍ以上である。残存する壁の高さは50～65㎝で、東壁の立ち上がりは直立に近い。底面は中央部が不整形に窪む。硬化した面は底面のほぼ全面で確認され、特に底面中央部の一段低い面では顕著であった。

ａ・ｂの覆土は第55図のとおりで、礫と粘土塊を多く含む特徴がある。

遺物　ａの上面では古墳時代中期と後期の土器、奈良時代から平安時代の須恵器、近世と考えられる焙烙が出土した。焙烙は礫に押し潰された状態で底面に密着して出土した。底部のみを欠いている。石器は砥石が１点出土した。その他、平面形が4.0×3.7㎝の円形で厚みが1.6㎝に加工された軽石？の中央に、径が５㎜の穿孔がなされる石製品が１点出土した。ａの下面では弥生時代後期、古墳時代中期、奈良時代から平安時代の須恵器、中世の土師質土器、近世の陶磁器が出土した。銭貨は寛永通宝が１点出土した。古寛永とみられる。

ｂでは弥生時代後期、古墳時代前期のＳ字甕、中期の壺、平安時代の甲斐型杯などの破片が出土した。

時期　出土した遺物の中で最も時期の新しいものは近世である。従って、該期の方形竪穴であると考えられる。

第６号方形竪穴（第56図）

遺構　Ｑ区、アー146グリッドに位置する。

平面形は隅丸長方形、平面規模は長辺2.4ｍ、短辺1.95ｍ、長軸方向はN-29°-Wである。残存する壁の高さは31～44㎝で、底面からの立ち上がりは直立気味である。底面は礫層に当たるため荒れているが、平らに掘削されている。

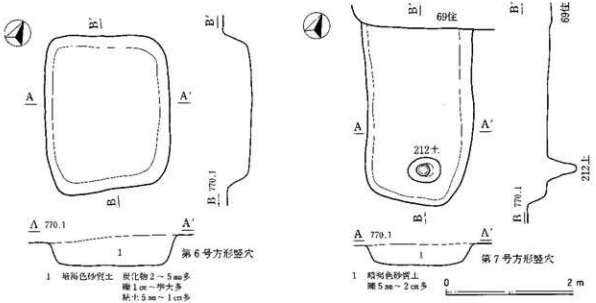
覆土は暗褐色砂質土の単一層で、礫、炭化物、粘土塊を多く含む特徴がある。

遺物　本業窯の輪禿皿が１点出土した。約2/3が遺存する。

時期　出土した遺物の特徴からみて、近世初頭の方形竪穴であると考えられる。

第７号方形竪穴（第56図）

遺構　Ｑ区、カ－146・147グリッドに位置する。第69号住居址と重複し、本址が新しい遺構である。本址



第56図　第６・７号方形竪穴（1/60）

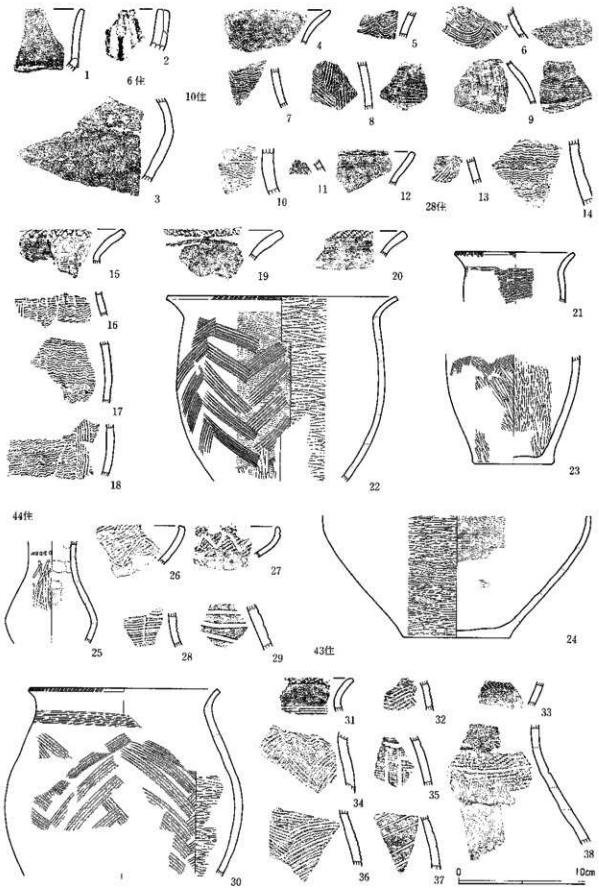
は第５号方形竪穴ａ・ｂと同様に、第12号掘立柱建物址に付属する方形竪穴となる可能性もある。

平面形は長方形、平面規模は長辺2.8ｍ以上、短辺1.65ｍ、長軸方向はＮ-28°Ｗである。残存する壁の高さは30～40cmで、底面からの立ち上がりは直立気味である。底面はほぼ平らで、硬化した面はない。

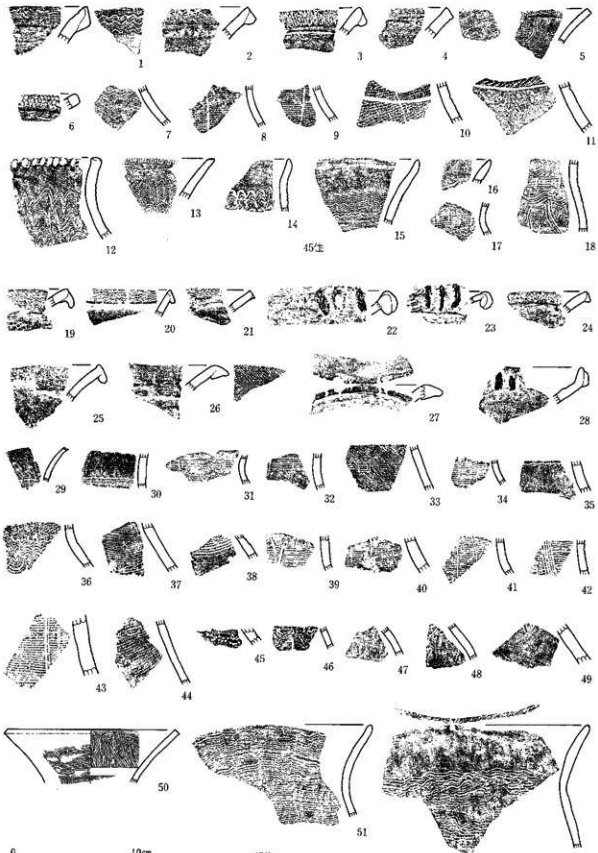
覆土は暗褐色砂質土の単層で礫を多く含む特徴がある。他の方形竪穴にみられた粘土塊は含まれていない。

遺物　奈良時代から平安時代の須恵器が１点出土したのみである。

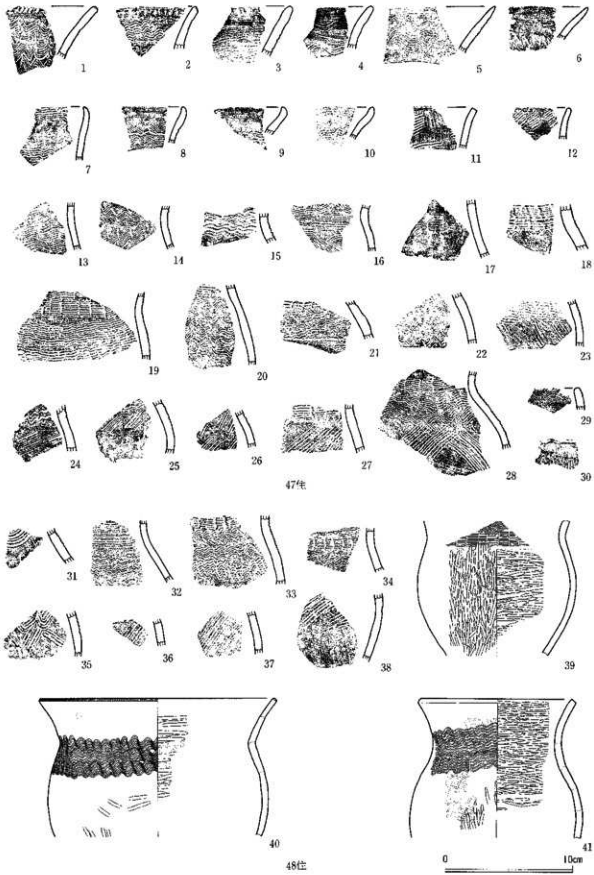
時期　時期が特定できる遺物の出土はないが、近世と考えられる第12号掘立柱建物址と第５号方形竪穴との位置関係からみて、該期の遺構である可能性がある。



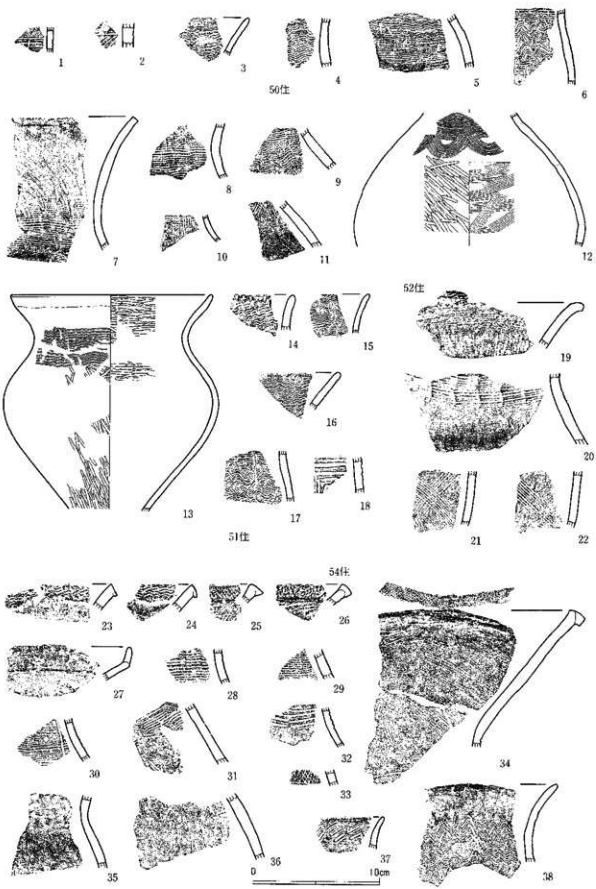
第57図　第6・10・28・43・44号住居址出土土器（1/3、21～25・30は1/4）



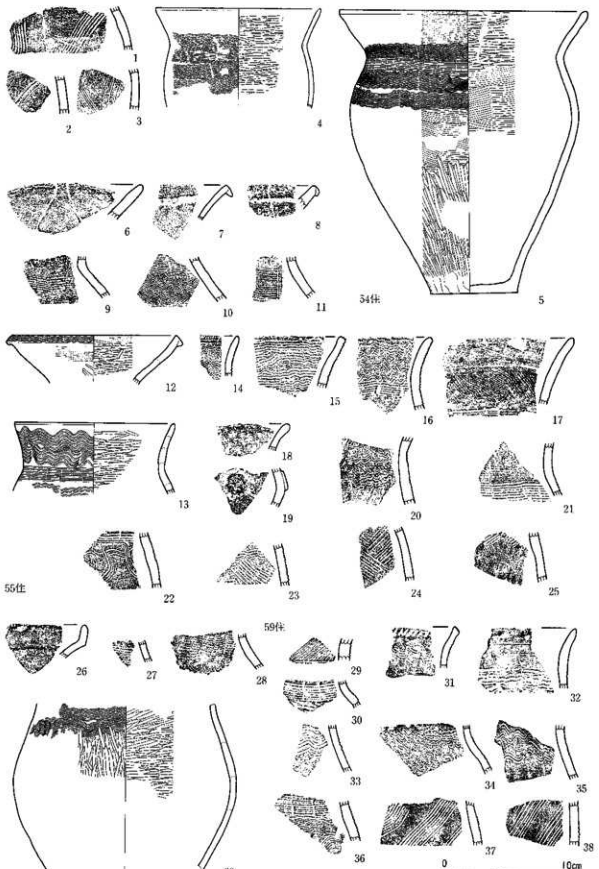
第58図　第45・47号住居址出土土器（1/3、50は1/4）



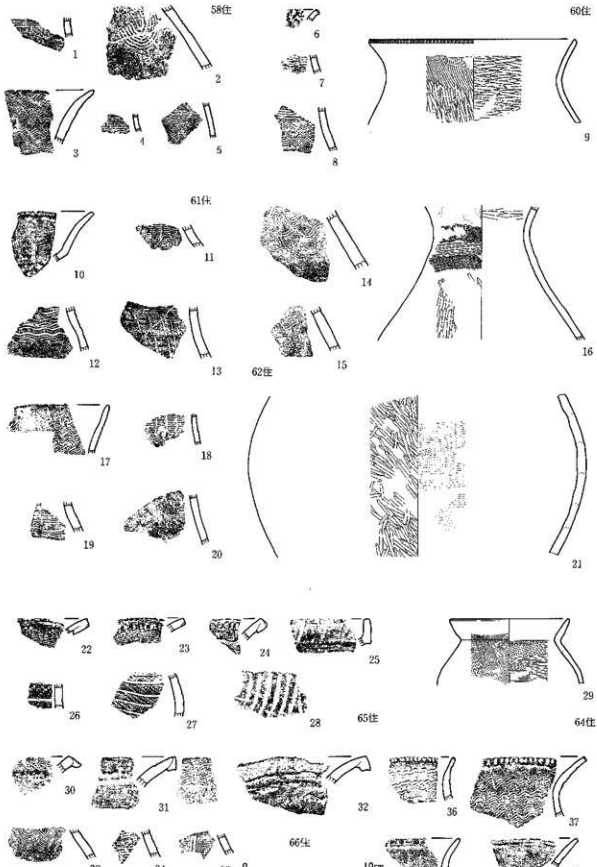
第59図　第47・48号住居址出土土器（1/3、39～41は1/4）



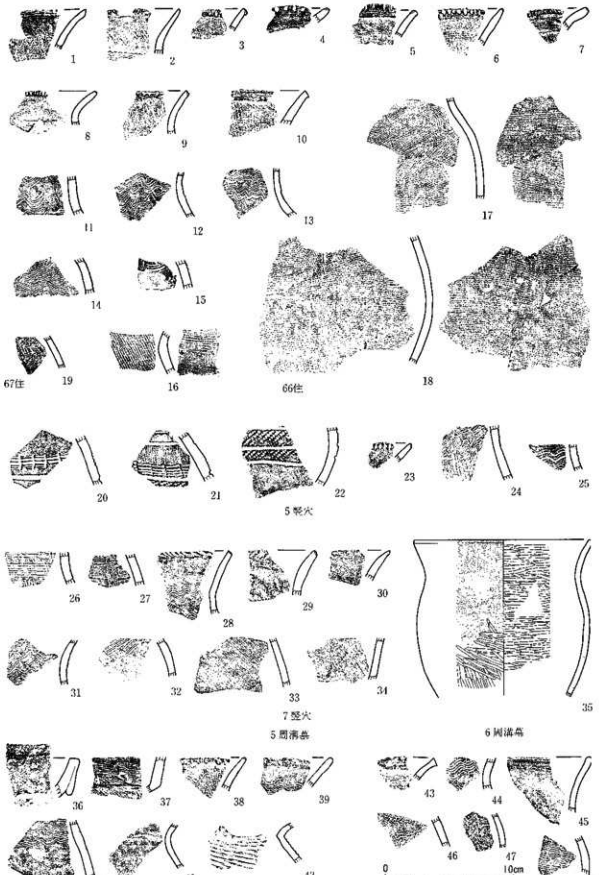
第60図　第50・51・52・54号住居址出土土器（1/3、12・13は1/4）



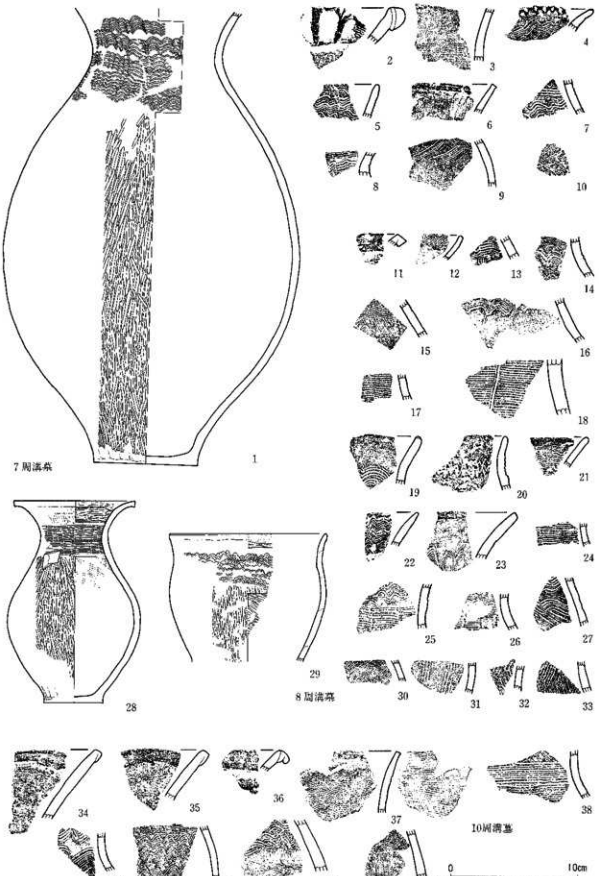
第61図　第54・55・59号住居址出土土器（1/3、4・5・12・13・39は1/4）



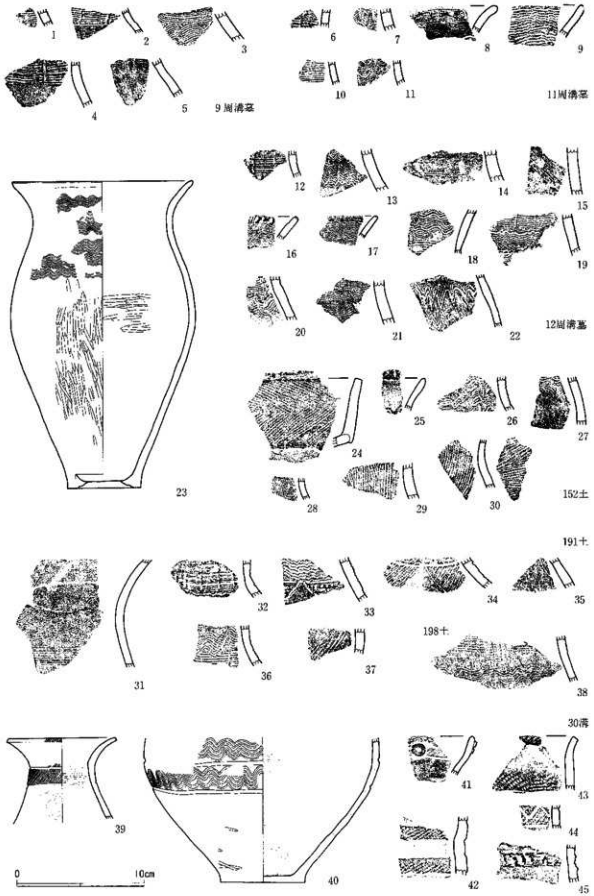
第62図　第58・60・61・62・64・65・66号住居址出土土器（1/3、9・16・21・29は1/4）



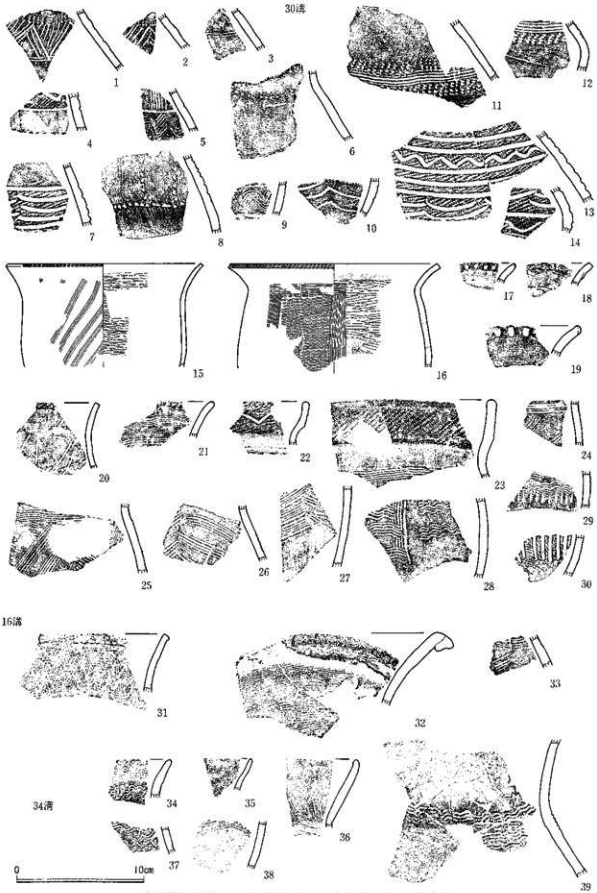
第63図　第66・67号住居址、第5・7号竪穴状遺構、第5・6号周溝墓出土土器（1/3、35は1/4）



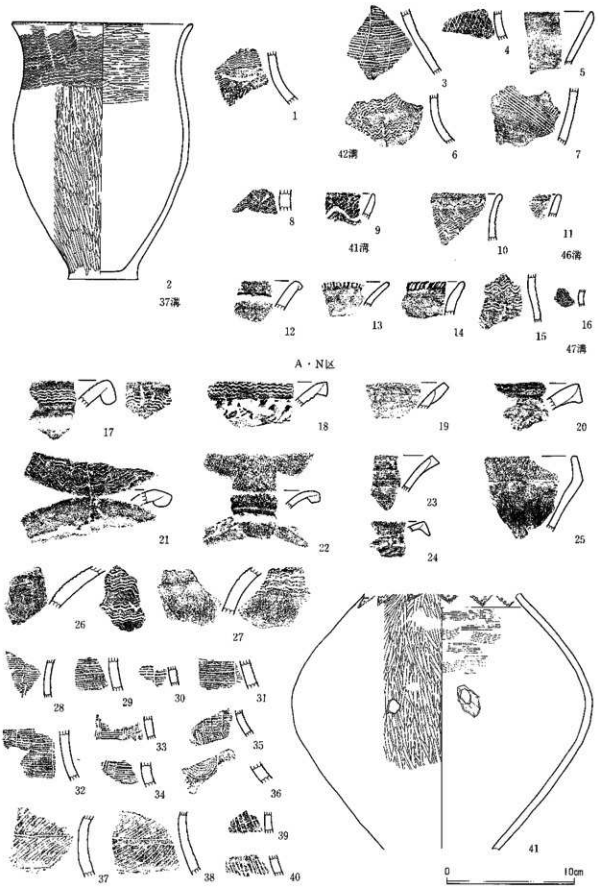
第64図　第7・8・10号周溝墓出土土器（1/3、1・28・29は1/4）



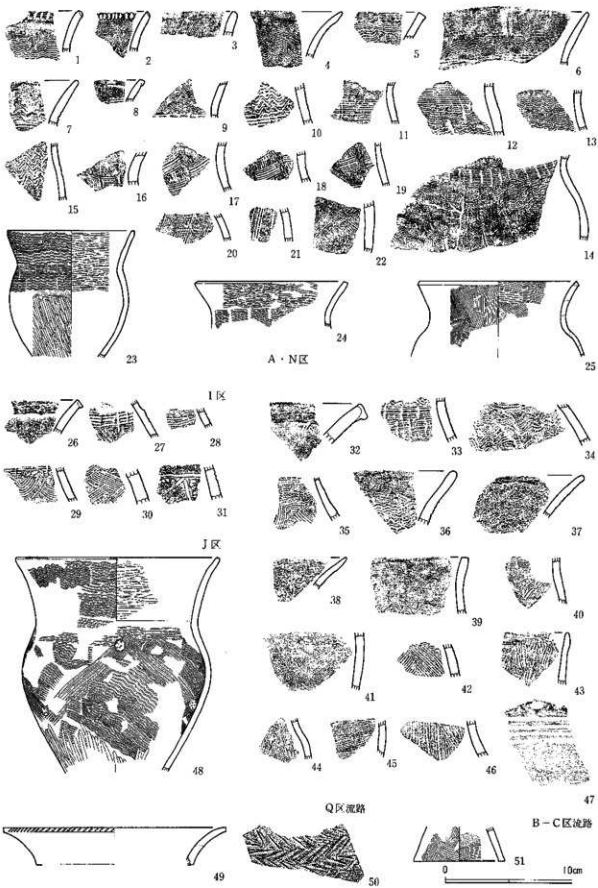
第65図　第9・11・12号周溝墓、第152・191・198号土坑、第30号溝址出土土器（1/3、23・39・40は1/4）



第66図　第16・30・34号溝出土土器（1/3、15・16は1/4）



第67図　第37・41・42・46・47号溝址、A・N区、弥生時代後期遺物包含層（1/3、2・41は1/4）



第68図　A・N・I・J・Q・B－C区弥生時代後期遺物包含層（1/3、23～25・48・49・51は1/4）

第Ⅳ章　調査の成果と課題

第１節　環濠集落について

(1)　環濠集落の概要

平成６年度の調査において、遺跡範囲の中央部から北西部に微高地の存在が確認された。微高地の東縁辺部と南西部より弥生時代後期と考えられる数本の溝址が検出され、その内側から該期の５軒の竪穴住居址が検出されるに至り、弥生時代後期の環濠集落の存在が示唆された。しかし、竪穴住居址と溝址から出土した土器が少量である上、担当者が後期土器編年を理解していないことも相まって、地形と遺構、及び遺構どおしの位置関係からみた所見程度に過ぎなかった。

今年度の調査区であるⅠ・Ｋ・Ｌ区は微高地の中央付近に位置する。ここでは弥生時代後期の竪穴住居址が11軒と、昨年度に検出された溝址の続きと考えられるものが検出された。竪穴住居址では炉址に土器が埋設されているものや、床面直上より器形の窺える土器の得られたものが数軒ある。これらの土器の時期は弥生時代後期前半から中葉の古段階に位置づけられるものと考えられ、溝址の時期についても同じ時期であると考えられた。遺構の位置関係と帰属時期からみて、微高地に展開する弥生時代後期の集落は環濠集落であると判断した。

２年度の調査により以下のことが明らかとなった。

１．時期は弥生時代後期前半から中葉の古段階と考えられる。

環濠内から16軒の竪穴住居址が検出された。重複するものは第58号住居址と第62号住居址のみである。

主軸方向は２方向に大別され、約90°のずれがある。重複するものと近接するものを考慮すると、竪穴住居址からみた集落の時期は２時期ないし３時期に細分されることとなる。しかし、環濠集落の存続期間は短期間で、後期中葉の新段階以降には周溝墓が構築されると考えられる。これらの周溝墓に対応する集落は、微高地の南側一帯に移るものと考えられるが、ここでは環濠と思しき溝址は検出されていない。

２．規模は東西約100ｍ、南北は70ｍ以上と考えられる。

東西の計測は第16号溝址を東とし、同一の溝址と考える第15号溝址と第42号溝址を結ぶ推定線の中程を西とした。南北は第15号溝址と第23号溝址を結ぶ線の中程を南とし、第62号住居址の北壁を北として計測した。平面形は不整円形と考えられ、面積は7,000㎡以上と考えられる。

３．環濠は全周しない。

第15号溝址と第23号溝址との間に約55ｍの間隔がある。また、第22号溝址とでは50ｍの間隔がある。この溝址が検出されていない地点は、微高地の中でも標高の高い地点と考えられる。そのため、後世の攪乱や本調査での表土剥ぎ作業により溝址を削平したことも考えられる。しかし、第15号溝址と第23号溝址の終・始部は急激に立ち上がることが確認されており、その状態から後世に削平されたとは考え難い。また、弥生時代後期の竪穴住居址の壁も低いながら検出されていることを考慮すれば、溝址全体が失われたとは考えられない。従って、溝址は意図的に掘削されなかったものと考えたい。

４．環濠の一部に自然地形を補完的に利用している。

第17号溝址と繋がる可能性が高い第34号溝址は、Ｉ区とＫ区が接する地点のやや東で終息することが確認された。また、環濠となる溝址の検出が予想されたＬ区及びＪ区において溝址は検出されていない。

微高地と断層崖の間にあたるA・M・N区では断層崖に沿う浅い谷が確認され、I区とK区が接する地点でもこの谷の肩部が確認されている。谷底からは環濠集落の時期に対応する土器がまとまって出土している。また、微高地の北西から西側にあたるJ区では、北東から南西に向かう谷が確認された。ここでも環濠集落の時期に対応する土器が出土している。

以上、溝址と微高地に接する谷の位置関係からみて、微高地の北縁辺部から北西縁辺部では、谷が環濠の一部として補完的に利用されていると考えられる。

5．環濠の本数は北から東で1重または2重、西から南で1重である。

北から東で1重または2重としたが、1重とは第16・17・18・23・34号溝址を1本の溝址と考えたことによる。平面図では第16号溝址と第17・18・34号溝址が同時存在したようにもみえるが、土層断面で第16号溝址が第17号溝址に切られる調査結果が得られている。掘削方向が同じであったり平行することからみて、第17・18・34号溝址は第16号溝址の掘り直しと理解したい。2重とは第22号溝址を環濠と認めた場合である。

6．環濠内の諸施設は竪穴住居址と土坑から構成される。

現段階で環濠内より検出された諸施設は、16軒の竪穴住居址と10基余りの土坑（柱穴状のものも含む）が検出されたに過ぎない。一般に倉庫と考えられる掘立柱建物址は検出されず、竪穴住居址の入口側コーナー付近に貯蔵穴と考えられる掘り込みが認められる以外、これと言った施設の痕跡は見られない。

7．環濠の断面形はV字形と逆台形である。

断面形がV字形のものは第15号溝址とこれに繋がる可能性が高い第42号溝址、第17号溝址とこれに繋がる可能性が高い第34号溝址などである。また逆台形のものは第16号溝址などである。微高地の東縁辺部での溝址の切り合いでは、逆台形からV字形へ掘り直していると言える。

(2) 環濠集落の成立要因

長野県内での環濠集落は、近年の大規模開発に伴う発掘調査で検出数を増しているところである。しかし、家下遺跡のように環濠集落のおおよその規模が把握された例は、県内において初見であると思われる。

環濠について、その構築の第一義的な目的は防御であることに異論はないところである。環濠を構築することは集落を守る必要性が生じたことの表れであり、家下遺跡と周辺遺跡との間に何らかの社会的な緊張関係が生じたためと考えられる。それを引き起こした要因と考えられるのは、遺跡を取り巻く自然環境である。現在でも断層崖下からは清冽な湧水がこんこんと湧き出し、その水が田畑を潤している。弥生時代においても、湧水によって涵養されていた湿地帯が微高地と断層崖間に広がり、ここを水田として利用していた景観が推定される。今年度の調査では弥生時代後期から古墳時代前期の水田土壌とも考えられる黒色粘土層が確認されている。

沖積低地の占める割合が少ない当地域において、家下遺跡の位置する場所は弥生集落をつくる上で絶好の自然環境を備えていると言える。即ち、この恵まれた自然環境をめぐり周辺の集落との間に社会的な緊張関係が生じたと考えられるのである。では、家下遺跡の集落と緊張関係にあった集落とは？。

家下遺跡の周辺に所在する弥生時代後期の遺跡として、断層崖上（沖積段丘面）の横井遺跡、阿弥陀堂遺跡、永明中学校校庭遺跡が知られている。いずれも遺跡の一部を調査したに過ぎず、集落規模や構造はつかみきれていないが、その中でも5次に亘る調査が行われた阿弥陀堂遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居址が19軒検出されており、該期の大規模集落であると考えられている。19軒の竪穴住居址の中には後期前半から中葉に位置づけられるものが何軒もあり、崖上と崖下に該期の集落が併存していたことになる。阿弥陀堂遺

跡発掘調査報告書の写真図版では、地形の性格上、竪穴住居址の多くが礫層を床面や壁面としていることが見て取れる。これに対し、家下遺跡では礫層の上に砂が厚く堆積するため砂層内に床面の設けられるものが多い。竪穴住居址の掘削が容易で居住環境も快適であったと思われる。また、断層崖上にも水田可耕地となり得る湿地帯も存在していたと考えられるが、家下遺跡ほど恵まれたものではないと推測される。従って、現段階では断層崖上の大規模集落と考えられている阿弥陀堂遺跡との間に、家下遺跡の自然環境をめぐる社会的な緊張関係が生じたことで、環濠が掘削されたと考えておきたい。

第2節　周溝墓について

(1) 周溝墓の概要

平成6・7年度の調査により12基の周溝墓が検出され、この中に弥生時代後期と考えられるものが存在する。諏訪地域では弥生時代後期遺跡の発掘件数が少ないことも影響してか、該期の周溝墓は検出されていない。従って、家下遺跡で検出された該期の周溝墓は当地域において初見であり、当地域の墓制を考える上で重要な発見である。

微高地には弥生時代後期前半から中葉の古段階まで環濠集落の存続が考えられ、その廃絶後に周溝墓が構築されている。12基の周溝墓の内、環濠集落内に構築されたものは9基である。以下、9基の周溝墓について概要を記述する。

1．構築時期は後期前半まで遡るものはなく、古くても後期中葉の新段階であると考えられる。

第6号周溝墓を除く8基の周溝墓は、環濠集落（竪穴住居址）を切ることが確認されている。従って、これらの周溝墓の帰属時期の下限は後期中葉の新段階となる。また、8基の中で周溝内より出土した一括土器により、遺構の時期を特定できるものが幾つかある。それは第2号方形・7・8・12号周溝墓の4基である。第2号方形周溝墓は後期後半としたが、古墳時代前期初頭まで時期の上がる可能性がある。第7号周溝墓は後期後半、第8号周溝墓と第12号周溝墓が後期中葉の新段階から後半と考えられる。

2．平面形態には円形基調と方形基調がある。

第7・8・9号周溝墓を円形基調、第2号方形・10・12号周溝墓を方形基調と考える。他は不明としておく。

3．主体部の検出された周溝墓がある。

第2方形・8・9・10号周溝墓の4基で主体部が検出されており、第8号周溝墓では3基の主体部が検出されている。

4．陸橋部が2ヶ所（以上）のものと、周溝のコーナー部に1ヶ所のものがある。第9号周溝墓は2ヶ所（以上）の陸橋部をもち、第2方形・10・12？号周溝墓は方形プランの一辺のコーナーに陸橋部をもつ。

5．周溝を共有するものがある。

第8号周溝墓と第9号周溝墓、第10号周溝墓と第11号周溝墓が周溝を共有する。遺構の切り合いは、前者で第8号周溝墓、後者で第11号周溝墓が新しい遺構と考えられる。

6．主体部に木棺の小口穴をもつものがある。また小口穴はないが、木棺の想定されるものがある。

第2号方形周溝墓と第8号周溝墓のNo.3とした主体部で、木棺の小口穴とされる掘り込みが検出されている。また、土層断面の観察などから小口穴をもたない木棺の存在が示唆されたものは、第8号周溝墓のNo.2とした主体部である。

7．主体部から硬玉製勾玉、ガラス小玉、銅製品（小形の銅鋼？）の出土したものがある。

第８号周溝墓の主体部No３では硬玉製勾玉１点、ガラス小玉65点以上、銅製品２点の遺物が出土した。８．周溝内から一括で土器の出土するものがある。また、その中には周溝内埋葬を示唆するものがある。

第２号方形・７・８・12号周溝墓の４基で、第２号方形周溝墓と第12号周溝墓は壺形土器、第７号周溝墓と第８号周溝墓は壺形土器である。周溝の底面に密着して出土したものは第２号方形周溝墓と第７号周溝墓である。土器からみて周溝内埋葬を示唆するものは第７・８・12号周溝墓の３基である。また、周溝の掘方が示唆するものとして第２号方形周溝墓がある。

(2) 千曲川流域の周溝墓

周溝墓の形態は、時期や地域によって様々な形をもつことが知られている。その周溝墓に埋葬された人々の立場や社会状況などの違いが、周溝墓の形を規定する要因と考えられる。

第Ⅳ章第３節では、家下遺跡の土器は犬竜川流域よりも千曲川流域との結びつきが強いことを指摘している。家下遺跡の周溝墓が千曲川流域の中でどのように位置づけられるものかをみる前に、千曲川流域の周溝墓について概観する。

長野県の周溝墓の変遷について、出現の時期や系譜などに触れた画期的な論考に、青木和明氏の「長野県における周溝墓の変遷」(1984年)がある。それを受け継ぐかたちで青木一男氏は「千曲川流域の周溝墓覚書」(1991年)、「科野の区画墓・墳丘墓における円と方(メモ)」(1993年)において、千曲川流域を対象として、周溝墓の時間的な位置づけ、周溝墓の分類と消長、伝播ルートなどについて論考されている。両氏の論考は以下のように概括されると思われる。

千曲川流域の周溝墓には、埋葬主体部を円形の溝で区画したものと方形の溝で区画したものが知られている。両者は弥生時代後期に併存するが、青木和明氏が「小規模不定形周溝墓」としたものを含めた円形周溝墓の出現が先行すると考えられている。土器が出土した円形周溝墓で最古のものは、佐久市岡田畑Ｂ遺跡の２号周溝墓で後期中葉に位置づけられている(千野編年のⅤ－３段階)。その後、後期後半まで継続するようである。この時期の円形周溝墓の特徴は径が10ｍ以下の比較的小規模なものが多い。主体部の検出率は高く、これは盛土が低いためであると考えられている。主体部には鉄鋤やガラス小玉などの豊富な副葬品が埋納され、周溝内に中部高地型櫛描文系の土器を廃棄する率が高いとされる。青木和明氏は千曲川流域の初源の周溝墓は小規模な不定形の溝をもつもので、同流域の在来の墓制であると解釈した。青木一男氏も同様の見解を示し、円形周溝墓は主体部の区画を強く意識するものと捉え「円を志向する区画墓」と仮定している。

方形周溝墓は円形周溝墓に比べ全般的に規模が大きく、周溝の一辺が14～20ｍ、或いは30ｍ近くになるものもある。主体部の検出率は円形周溝墓に比べて低い。このことは一定の盛土がなされていたためと考えられている。主体部からの副葬品の出土は貧弱で、周溝内から出土する土器も多くないとされる。千曲川流域で土器が出土した最古の方形周溝墓は、長野市篠ノ井遺跡群聖川堰防地点ＳＤＺ６で後期後半から終末に位置づけられている(千野編年のⅤ－４～５段階)。この周溝墓は方形プランの一辺の中央部に陸橋部をもち、後の前方後方型周溝墓へ繋がるものとされている。このタイプの他に、佐久市後沢遺跡１号周溝墓にみられる方形プランの一辺のコーナー部に陸橋部をもつもの、飯山市上野遺跡３号周溝墓にみられる陸橋部をもたないものがある。青木和明氏は円形周溝墓を千曲川流域の在来の墓制と解釈する一方、方形周溝墓は外来の墓制として把握できる可能性を示している。青木一男氏はこれを発展させ、一辺の中央に陸橋部をもつものを天竜川を遡上し千曲川流域に達したものであるとし、一辺のコーナー部に陸橋部をもつものを甲斐地方、陸橋部をもたないものを越後地方との関係が想定されるとしている。そして、方形周溝墓を主体部の周囲を区画し、さらに一定の盛土をもって一定の土地空間を墓とする意識が強いと捉え「方を志向する墳丘墓」と仮定

している。

(3) 家下遺跡の周溝墓の位置づけ

家下遺跡の周溝墓（環濠集落内検出）が千曲川流域の中でどのように位置づけられるものかを、平面形態と規模などから考えてみたい。

(1)の2で円形基調の周溝墓としたものは、第7・8・9号周溝墓である。

第7号周溝墓は径10.8m以上で、主体部は削平されたのか調査区域外にあるのか不明である。平面形態からみて「円を志向した区画墓」として捉えて良いと考える。本址の時期は周溝内から出土した壺形土器からみて後期後半と考えられる。青木一男氏が指摘している、在来墓が方形周溝墓（墳丘墓）の影響を受けたことで、規模が大きくなったものであろうか。

第8号周溝墓は平面形態が楕円形或いは隅丸長方形としたもので、「円を志向する区画墓」と捉えて良いものと考える。平面規模は長軸が13.0m前後、短軸が8.5m以上である。本址の時期は周溝内から一括出土した壺形土器からみて後期中葉の新段階と考えている。本址では3基の主体部が検出された。最も規模の小さな主体部には木棺の小口穴とされる掘り込みがあり、硬玉製勾玉、ガラス小玉、銅製品が出土した。「円を志向する区画墓」の主体部では、豊富な副葬品の出土率が高いことを青木一男氏が指摘しているが、主体部から副葬品が出土した周溝墓は今のところ本址に限られる。

第9号周溝墓は推定径が6.5m前後、陸橋部を2ヶ所（以上）もち、主体部が検出されていることなどからみると、青木一男氏のいう「円を志向する区画墓」の典型例である。時期も周溝を共有する第8号周溝墓との関係からみて後期中葉の新段階と考えている。時期的にも千曲川流域のものと矛盾しない。

一方、(1)の2で方形基調の周溝墓としたものは、第2号方形・10・12号周溝墓である。

第2号方形周溝墓は平面規模が9.0×7.8mで、主体部に小口穴をもつ木棺の埋置が考えられている。本址の時期は昨年度の報告書で周溝底面より出土した甕形土器（刷毛調）より後期後半に位置づけたが、頸部がくの字に屈曲し、胴部が球胴化傾向にあること、刷毛調整が他のものに比べて粗いことなどからみて、後期終末或いは古墳時代前期初頭まで時期が上がる可能性もある。

第10号周溝墓は方形と円形が折衷したような平面形態であるが、陸橋部の位置からみると「方を志向する墳丘墓」として良いと思われる。第III章第1節(4)周溝墓では、周溝の一部が円形であることを方形区画の一部を故意に円形区画となるように掘削したと考え、これに併せ主体部の長軸もずらされたと考えた。このことは第IV章第3節で記述したように、家下遺跡の土器の一部に東海東部地方或いはその周辺地域の土器がもつ属性を在地の土器が吸収したものがあるとの考えによるところもある。本址では時期の決め手となる土器の出土はないが、環濠内の竪穴住居址を切ることに加え、周囲から検出された周溝墓の時期からみて、後期中葉の新段階から後半の周溝墓と考えておきたい。

第12号方形周溝墓は長軸が15.5m前後で、主体部は調査区域外にある可能性を残す。本址の時期は周溝内から出土した甕形土器からみて後期中葉の新段階から後半と考えられる。本址は「方を志向する墳丘墓」として良いと考える。遺構の時期も青木一男氏の指摘に矛盾しない。

第IV章第3節で示した土器の編年観が妥当であるならば、後期中葉の新段階から後期後半に「円を志向する区画墓」と「方を志向する墳丘墓」が同じ盆域に共存することとなる。この状態は中部高地型櫛描文系の土器と東海型の土器が交錯する山梨県敷島町金の尾遺跡でも見ることができる。先述したように、青木一男氏は方形プランの一辺のコーナーに陸橋部をもつ方形周溝墓は甲斐地方から伝播したものであると想定している。このことと、家下遺跡で指摘した壺形土器と甕形土器の一部にみられる異系統の諸属性を東海東部地

方またはその周辺地域に求めたことは、時期的にみても当遺跡では矛盾なく説明されることとなる。

第3節　弥生時代後期の土器について

(1)　弥生時代後期の土器の概要

家下遺跡では数多くの弥生時代後期の遺構が検出されており、それに伴う該期の遺物も相当な量に及ぶ。遺物の中心は土器で、出土量は市域の他の遺跡で出土した土器の量を遙かに凌駕する。器形復元された土器も多く、市域はもとより諏訪地域の土器編年の基軸となり得る資料と考える。

昨年度の報告書において、環濠集落（竪穴住居址と環濠となる溝址）から出土した土器と、環濠集落外（環濠集落が構築された微高地の南側一帯に構築された竪穴住居址）の土器にみられる口縁部形態や調整技法の違いを、時間差或いは集団差が表れていると指摘した。具体的には、昨年度の時点で環濠集落から出土する土器の中に折り返し口縁（第61図12など）や複合口縁（第65図24など）をもつ壺形土器と、刷毛調整痕を強く残す甕形土器（第68図25など。以下、刷毛甕とする。）が出土していないことによる。さらに、これらの土器は当地域の土器様相を表すとされる岡谷市橋原遺跡の土器群には見られないことより、いわゆる「橋原式土器」で当地域の土器様相がひと括りされるものかの疑問を投げかけている。

問題となる点は、家下遺跡から出土した上記の壺・甕形土器が在来の土器であるのか否かや、それらを含めた家下遺跡出土の土器が後期のどの段階に位置づけられるものであるのか明らかにされていないことである。そこで、市域の土器様相を理解する足掛かりとして、環濠集落から出土した土器を中心に若干の検討を加えてみたい。

(2)　家下遺跡の土器様相

これまで諏訪地域における弥生時代後期の土器は、天竜川流域下伊那地方の「座光寺原・中島式土器」と千曲川流域の「箱清水式土器」とが融合し合い成立した土器であると言われてきており、諏訪地域内での小地域差が示唆されながらも、諏訪湖の北側に位置する岡谷市橋原遺跡出土の土器群により語られてきた。さらに、上伊那地方から山梨県北部地方を「橋原式土器文化圏」としてひと括りする考えも出されている。そこで、家下遺跡と橋原遺跡の土器がもつ諸属性を比較し、まず諏訪地域の土器について概観してみる。なお、橋原遺跡の土器との比較は報告書により行ったことを断っておく。

共通点として以下のことなどが指摘される。

1．赤色塗彩された壺形土器が少ない。
2．赤色塗彩された高杯形土器や鉢形土器が、器種組成の中に一定量含まれている。
3．甕形土器に口縁部が短めで、胴部の張り出しが弱い、胴長のものがある。
4．甕形土器の頸部に櫛描簾状文を施文する場合、古い段階ほど多く見られ、新しくなるにつれて減少する傾向がある。

相違点として以下のことなどが指摘される。

1．橋原遺跡では壺形土器の口縁部を受口状に折立するものが多く見られるが、家下遺跡では稀である。逆に家下遺跡の壺形土器には折り返し口縁、複合口縁があるが、橋原遺跡では稀である。
2．家下遺跡の壺形土器の頸部には、篦状工具及び櫛状工具による丁字文が一定量みられる。また、篦状工具による横線区画内に斜行沈線などを充填するものがある。これらは、橋原遺跡では稀である。
3．橋原遺跡では櫛描簾状文の施文手法に最内型と中部高地型が共存するが、家下遺跡では中部高地型の施文手法が圧倒的に多い。

4．橋原遺跡では甕形土器の櫛描波状文が多段となる場合、上下の段が重ならないように一定の間隔をあけるものが半数ほどみられるが、家下遺跡では上下の段を重ねるものが圧倒的に多い。

5．橋原遺跡では甕形土器の内外面に強い刷毛調整痕を残し、同一工具で口唇部に刻みを入れたもの（刷毛甕）が見当たらない。

6．家下遺跡の壺・甕形土器には、櫛描短線文や櫛描円弧文を施文する率が低い。

以上からみて、橋原遺跡の土器は天竜川流域との結びつきが強く、家下遺跡の土器は千曲川流域との結びつきが強いと言えそうである。このことは既に神村透氏により指摘されていることころでもある（1988年）。

それでは、橋原遺跡との比較の中で指摘し得た家下遺跡の土器にみられる属性について、地理的に近い千曲川上流域の佐久地方の土器と比較してみる。以下の2点は家下遺跡に限ってみられる属性であると考えられる。

1．壺形土器に折り返し口縁と複合口縁をもつものがある。

2．甕形土器の内外面に強い刷毛調整痕を残すものがある。

1は家下遺跡に限って出土するものではなく、周辺遺跡の横井遺跡、阿弥陀堂遺跡、御社宮司遺跡で出土が報告されている。2は諸遺跡の資料にあたっておらず存否は明らかでないが、1の壺形土器の出土状況から考えて存在する可能性が高いと思われる。これらの土器は、東海地方東部、またはその周辺地域（直接的には山梨地方か）の土器がもつ諸属性を、在地の土器が一部に吸収したものであると考える。

(3) 弥生時代後期の中での時間的な位置づけ

土器の中で資料的に充実している器種は壺形土器と甕形土器である。先述したように、昨年度の報告書では環濠集落出土の土器の中に折り返し口縁と複合口縁をもつ壺形土器や刷毛甕が見られないことを指摘し、これらの土器を出す環濠集落外の竪穴住居址との時間差、或いは集団差を示すものと考えていた。ところが、今年度の調査により環濠集落が廃絶した後に、群をなす周溝墓が確認され、これに対応する集落が位置的にみて環濠集落外の竪穴住居址である可能性がでてきた。

そこで、壺形土器と甕形土器にみられる形態と文様などについて、Ⅰ期　環濠集落（竪穴住居址と環濠となる溝址）、Ⅱ期　環濠集落を切る周溝墓と環濠集落外の竪穴住居址（昨年度検出のものも含める）とに、便宜的に時期区分し概略をまとめてみる。

1．壺形土器

口縁部形態

・Ⅱ期で複合口縁の出現が考えられる。なお、昨年度に指摘した折り返し口縁は、Ⅰ期から存在することが明らかとなった。

施文具

・Ⅰ期では棒状工具と篦状工具が存在し、Ⅱ期では棒状工具へ移り変わることが考えられる。

頸部文様

・Ⅰ期では櫛描波状文或いは櫛描横線文を篦状工具で縦に1本切るもの（篦描T字文）が多く、Ⅱ期では棒状工具で縦に切るもの（櫛描T字文）が多い。また、Ⅰ期では篦状工具による横線区画内に篦状工具で斜行沈線などを充填するものや、付加文に鋸歯文を施文するものがあり、Ⅱ期では減少（消滅？）することが考えられる。

2．甕形土器

口縁部形態

・Ⅰ期では頸部がくの字に屈曲し口縁部が直に立ち上がるものが多く、Ⅱ期では頸部から口縁部が弓状に立ち上がるものへと統一される傾向がある。

胴部最大径の位置

・Ⅰ期では胴部最大径が上位から中位にあるものが多く、Ⅱ期では中位付近にあるものが多い。

頸部文様

・頸部文様の櫛描簾状文は、Ⅰ期では等間隔止めが多く、Ⅱ期では多連止めが多い。

胴部文様

・Ⅱ期で櫛描条痕文や櫛描短線文などの文様が減少（消滅？）することが考えられる。　器面調整

・Ⅱ期で強い刷毛調整痕を残す刷毛整の盛行が考えられる。

上記の結果を千曲川流域の各地域の編年観とすり合わせてみる。Ⅰ期は後期前半から中葉の古段階、Ⅱ期は後期中葉の新段階から後半の特徴を表していると考えられ、Ⅰ期は千野編年のⅤ－2期、Ⅱ期はⅤ－3～4期に概ね併行するのではないかと考えている。従って、昨年度の報告書で指摘した、環濠集落と環濠集落外の竪穴住居址から出土した土器は、後期の中での時間差を表しているものと捉えられる。

また、A・N区で弥生時代後期遺物包含層とした谷部出土の土器とⅠ・J区の流路とした土器は、Ⅰ期の中で捉え得る土器であると考える。

引用・参考文献

宮坂虎次・守矢昌文　1983　『横井・阿弥陀堂遺跡』茅野市教育委員会

青木和明　1984　「長野県における周溝墓の変遷」『第5回三県シンポジウム　古墳出現期の地域性』

鵜飼幸雄　1986　「弥生時代」『茅野市史　上巻』茅野市

山梨県教育委員会　1987　『金の尾遺跡・無名墳（きつね塚）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第25集

千野　浩　1987　「千曲川水系における後期弥生式土器の変遷」『信濃』41-1

高林重水　1987　「弥生土器」『橋原遺跡』岡谷市教育委員会

神村　透　1988　「弥生土器」『長野県史　考古資料編』全一巻(遺構・遺物　長野県史刊行会

原口正三　1990　「弥生時代と環濠集落」『季刊　考古学』第31号

青木一男　1991　「千曲川流域の周溝墓覚書」『長野県考古学会誌63　弥生文化特集号』長野県考古学会

青木一男　1993　「科野の区画墓・墳丘墓における円と方（メモ）」『長野県考古学会誌69・70　古墳時代特集号』長野県考古学会

小林深志　1993　『阿弥陀堂遺跡』茅野市教育委員会

長野県埋蔵文化財センター　1994　『赤い土器のクニ』長野県立歴史館開館記念企画展図録

功刀　司　1994　『阿弥陀堂遺跡　Ⅵ』茅野市教育委員会

小池岳史　1995　『家下遺跡』茅野市教育委員会

家下遺跡土坑一覧表(1)

土坑番号	位置	上面径(cm) 長軸	上面径(cm) 短軸	底面径(cm) 長軸	底面径(cm) 短軸	深さ(cm)	長軸方向	時期	備考
139	ハ−93	63	(50)	30	28	17		古墳以降	1l掘立P4　弥生後期上器2
140	ハ−93	70	69	38	37	29		古墳以降	1l掘V.P5　弥生土器4、底面下に深さ8cmの穴
141	ノ・ハ−93	68	64	35	32	20		古墳以降	1l掘立P6　弥生土器3
143	ハ−93	33	30	18	14	13			弥生土器7　2
144	ノ−92	67	60	51	42	11		古墳以降	1l掘立P1
145	ハ−92	67	57	46	40	17		古墳以降	1l掘V.P2　弥生土器2
146	ハ−93	(77)	65	(60)	43	17		古墳以降	1l掘立P3　弥生十器3
147	ノ−95					16			弥生中期後半土器3
148	ヘ−95					8			
149	ヘ・ホ−95	93	80	68	56	18			弥生土器9
150	ネ−94・95	40	33	32	15	10			
151	エ−99	80	75	50	39	22			
152	エ−98					22		弥生後期	土坑内に清あり、長さ126cm、幅23〜32cm、深さ25cm 弥生後期土器10、敲石1
153	ワ−51	55	52	44	43	8			
154	マ・ミ−54					10			弥生中期後半土器1、弥生土器2
155	ミ−53・54					8		弥生後期	弥生中期後半〜後期上器15
157	マ−55・56	24	23	19	19	30			
158	ミ−55	23	23	17	17	14			
159	ム−55	30	27	23	20	38			弥生土器3
160	ム−56	25	23	22	20	36			弥生後期上器2
161	ム−55	24	22	18	17	32			弥生土器1
162	メ−56	36	32	21	21	16			
164	ニ−80	35	32	18	16	15			
165	ネ−75	124	56	108	44	10	N−41°−W	弥生後期	上坑内に径30cm、深さ11cmの穴あり 弥生後期十器2
166	ラ−54					32			土坑内に深さ20cm以上の穴あり 弥生上器2
167	ラ−55					15			弥生後期土器2
168	メ−52	67	62	51	49	40			
169	テ−53・54	53	47	40	35	10		古墳以降	柱穴群
170	テ−53	62	57	46	44	15		古墳以降	柱穴群　弥生土器2
171	テ−52	64	60	49	46	13		古墳以降	柱穴群　弥生土器4
172	ツ−51・52	(75)	70	(60)	53	14		古墳以降	柱穴群　弥生土器1
173	ツ−51	(75)	70	(58)	48	11		古墳以降	柱穴群　弥生後期十器1
174	ト−53	46	43	34	28	7		古墳以降	柱穴群　弥生後期土器7
175	ト−52・53	58	54	44	40	9		古墳以降	柱穴群　弥生後期十器2
176	テ−52	65		46		10		古墳以降	柱穴群　弥生土器1
177	テ−51	43	42	35	34	10		古墳以降	柱穴群　古墳以降1
178	ナ−54	53	48	33	32	10		古墳以降	柱穴群　弥生土器1、不明2
179	ト−52	62	59	42	37	11		古墳以降	柱穴群　弥生十器1
180	ト−51・52	61	60	44	43	12		古墳以降	柱穴群　弥生土器1、不明1
181	チ−51	64	49	44	35	17		古墳以降	柱穴群
182	タ 51	82	49	63	35	9		古墳以降	柱穴群
183	ツ・タ−51・52	72	65	51	40	12		古墳以降	柱穴群　弥生土器2
184	ソ−52	54	50	34	30	11		古墳以降	柱穴群
185	ソ−53					7		古墳以降	柱穴群
186	ソ 51	47	45	28	28	12		古墳以降	柱穴群　弥生土器2
187	テ−50	38	35	23	20	20		古墳以降	柱穴群
188	ノ・ハ−55	26	(25)	16	(15)	20			不明1
189	ヨ−43	27	21	19	12	22			
190	ヨ−36・37	33	30	24	23	17			
191	モ・ヤ−49・50	248	200	57	37	73	N−40°−E	弥生後期	弥生後期上器多
192	ヨ・ラ−51	200	145	170	106	31	N−80°−E	弥生後期	弥生後期土器2　弥生十器12

家下遺跡土坑一覧表(2)

土坑番号	位置	上面径(cm) 長軸	上面径(cm) 短軸	底面径(cm) 長軸	底面径(cm) 短軸	深さ(cm)	長軸方向	時期	備考
193	チ－31					34		弥生後期以前	弥生土器1
194	ニ・ヌ－29	120	102	55	53	33		弥生後期以前	弥生土器5
195	ネ－28・29	115	(115)	70		25		弥生後期以前	弥生後期土器3、弥生土器12、台石1、磨製石鏃未製品1
197	ヨ－45		(100)		(88)	13			弥生土器7
198									弥生土器20
199	ふ－52・53			(87)	(60)	10	N－64°－E		弥生後期土器1、弥生土器2
203	オ 145	90	84	64	56	58		近世	12掘立 弥生土器1
204	エ－143					45		近世	12掘立 弥生土器2、近世焙烙1
205	エ－145	71	65	52	47	52		近世	12掘立 弥生土器1、古墳以降1、一分銅金1
206	ウ－145	69	46	67	43	54		近世	12掘立
207	イ－145	56	52	40	36	39		近世	12掘立
208	ウ－146	46	40	35	29	42		近世	12掘立
209	ウ－147	50	(45)	30		26		近世	12掘立
210	キ－144・145	69	66	53	50	52		近世	12掘立 弥生土器1
211	キ－146	74	70	57	53	51		近世	12掘立 近世焙烙2
212	カ－147	50	40	27	21	30		近世	12掘立 不明1 底面に深さ18cmの穴あり
213	オ－147	55	50	48	40	85		近世	12掘立 近世陶器1 5方竪a・bの断面より計測
214	ケ－144					47		近世	12掘立 古墳以降1
215	ケ－145					27		近世	12掘立
216	ケ・コ－146			57	45	45		近世	12掘立
217	ク－144	76	70	26	26	47		近世	12掘立
218	キ－147		44	25	23	31		近世	12掘立 弥生土器1 不明1
219	ウ－146	72	60	60	46	72		近世	12掘立
220	カ－145	35	31	21	20	16		近世	12掘立 不明2 69住床面より計測
221	カ－145	64	60	57	52	29		近世	12掘立 弥生土器1 近世焙烙1 69住床面より計測
222	カ－145	42	38	34	30	16		近世	12掘立
223	カ－145	57	57	45	44	37		近世	12掘立 奈良土器？1 69住床面より計測
224	カ－146	55	53	45	40	30		近世	12掘立 69住床面より計測
225	ト－138	45	33	18	12	7			
226	ニ－138	40	30	20	18	33			弥生土器1
227	ニ－139	24	23	10	8	26			
228	ニ－139	(50)	32	(19)	11	16			
229	ニ－139	28	24	12	10	17			古墳前期土器？1
230	ナ－139	26	22	13	10	18			弥生十器1
231	ニ・139	35	35	24	23	38			
232	ヌ－140	28	25	12	10	28			弥生十器2
233	ヌ 140	34	34	18	18	26			弥生土器1
234	ニ－138					7			
235	ヌ－142	40	34	26	22	23			47溝内 溝底面より計測
236	ヌ－142	52	(32)	32	16	45			47溝内 溝底面より計測

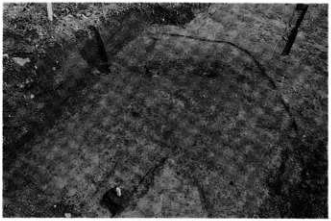
・上面径と底面径の空欄は、計測不可能である。

・上面径と底面径の( )は、推定値である。

図　　版

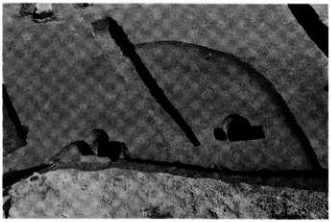
Ⅰ区全景

K区全景

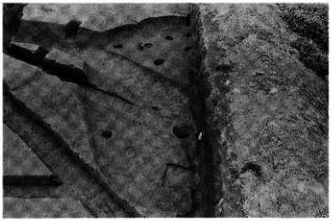


第28号住居址（B区）

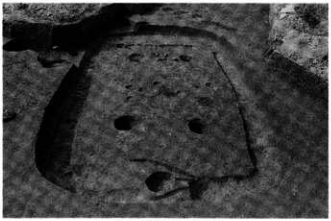
第43号住居址（C′区）



第44号住居址（Ⅰ区）



第45号住居址（K区）



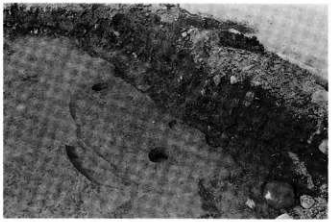
第47号住居址（K区）

第48号住居址（K区）

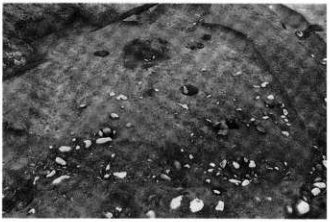
図版 2

第50号住居址（K区）

第51号住居址（K区）



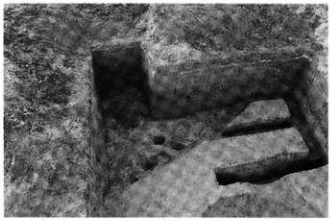
第52号住居址（B区）



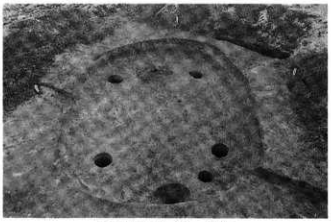
第54号住居址（K区）

第55号住居址（K区）

第58号住居址（L区）

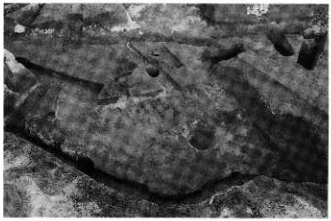


第59号住居址（L区）



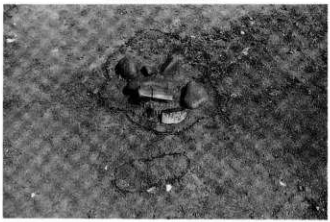
第60号住居址（B－C区）

第61号住居址（B－C区）



第62号住居址（L区）

第66号住居址（P区）

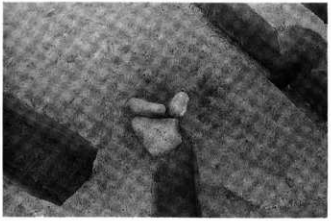


第28号住居址　炉址

第47号住居址　炉址

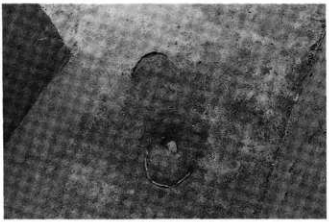
第48号住居址　炉址

第54号住居址　炉址

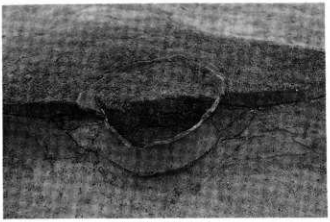


第58号住居址　炉址

図版4



第59号住居址　炉址



第60号住居址　炉址

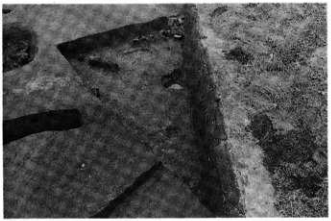
第62号住居址　炉址

第66号住居址　炉址

第46号住居址（K・L区）

第46号住居址　土器・炭化材出土状態

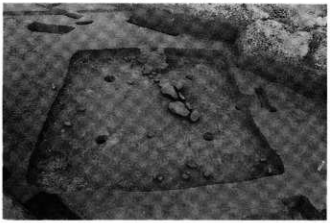
第46号住居址　P_3　土器・炭化材出土状態



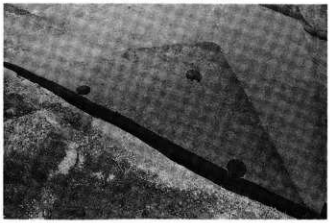
第49号住居址（K区）

第49号住居址　土器出土状態

第49号住居址　土器出土状態



第53号住居址（K区）



第56号住居址（L区）

第57号住居址（L区）

第63号住居址（Q区）

第63号住居址　P$_4$ 土器埋設状態

第63号住居址　土器出土状態

図版 6

第63号住居址　土器出土状態

第63号住居址　土器出土状態

第64号住居址（P・Q区）

第64号住居址　土器出土状態

第64号住居址　土器出土状態

第65号住居址（Q区）

第65号住居址　P_3　土器出土状態

第65号住居址　P_3　土器出土状態

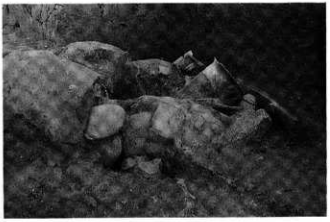
第65号住居址　P_{12}　粘土出土状態

第65号住居址　勾玉・ガラス小玉出土状態

第46号住居址　カマド

第46号住居址　カマド

第49号住居址　カマド



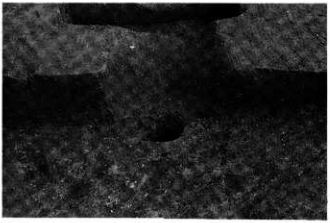
第49号住居址　カマド

第49号住居址　カマド

第53号住居址　新カマド

図版 8

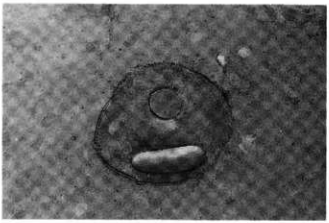
第53号住居址　新カマド



第53号住居址　旧カマド

第57号住居址　カマド

第63号住居址　炉址



第64号住居址　炉址

第64号住居址　炉址

第69号住居址（Q区）

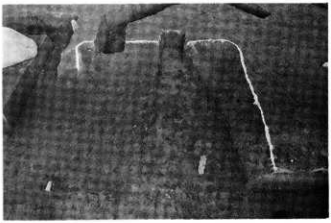
第69号住居址　カマド

第42号住居址（C′区）

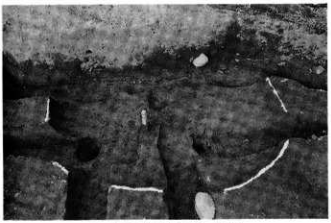
第67号住居址（Q区）

第42号住居址　カマド

第67号住居址　カマド

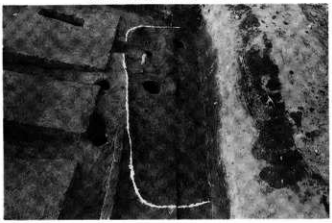


第６号竪穴状遺構（P・Q区）



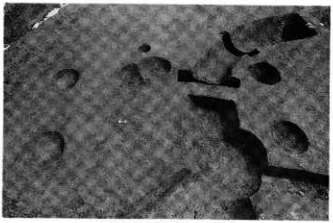
第７号竪穴状遺構（P・Q区）

第７号竪穴状遺構　礫出土状態



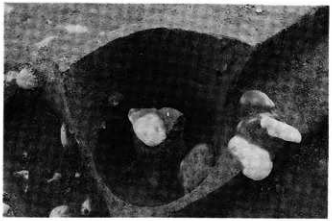
第８号竪穴状遺構（P区）

図版10



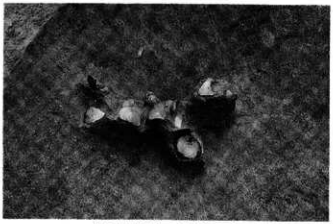
第11号掘立柱建物址（C′区）

第12号掘立柱建物址（Q区）

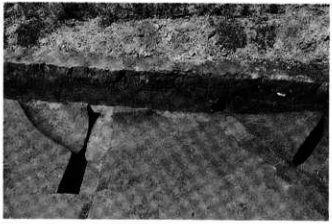


第12号掘立柱建物址　205土　一分判金出土状態

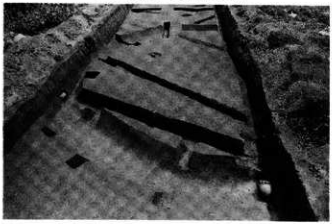
第5号周溝墓（C′区）



第5号周溝墓　土器出土状態



第6号周溝墓（K区）

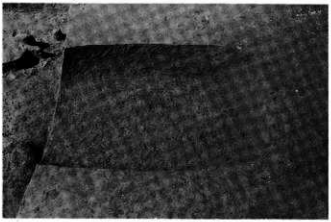


第7号周溝墓（K区）

第7号周溝墓　土器出土状態

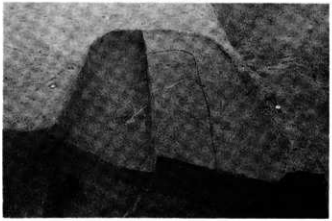
第8号周溝墓（K区）

第8号周溝墓　主体部No.1

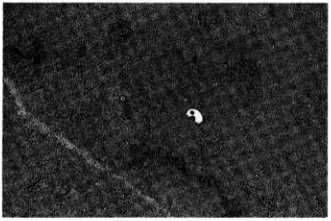


第8号周溝墓　主体部No.2

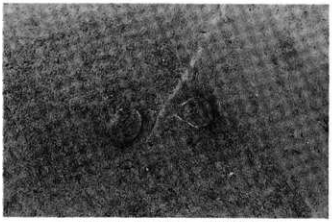
第8号周溝墓　主体部No.3



第8号周溝墓　主体部No.3



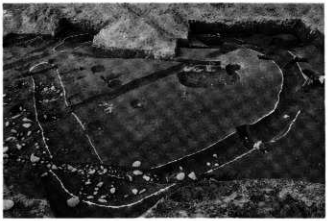
第8号周溝墓　主体部No.3　勾玉出土状



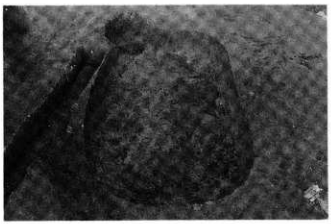
第8号周溝墓　主体部No.3　銅製品出土状態

第9号周溝墓（K区）

図版12



第10号周溝墓（K区）

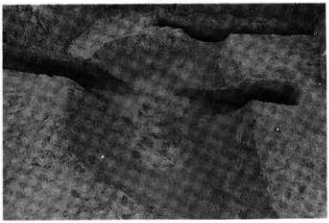


第10号周溝墓　主体部

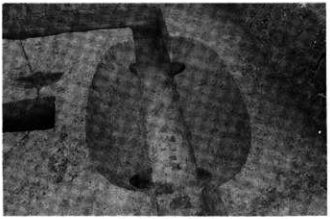
第11号周溝墓（K区）

第12号周溝墓（L区）

第12号周溝墓　土器出土状態



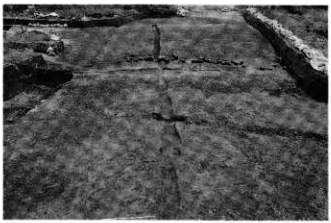
第191号土坑（L区）



第192号土坑（L区）

第195号土坑（J区）

第30号溝址（C'区）



第31号溝址（A区）

第16・34号溝址（I区）

第37号溝址（B区）

第40号溝址（A区）

第42号溝址（K区）

第46号溝址（L区）

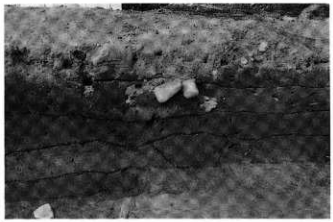
第47号溝址（Q区）

図版14

第4号列石（A区）

第5号列石（P区）

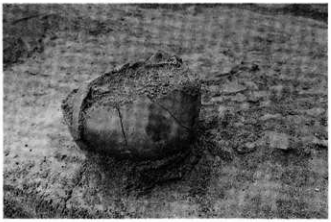
柱穴群（K区）



第7号焼土址（P区）

第1号埋設土器（A区）

谷部　弥生時代後期土器出土状態（N区）



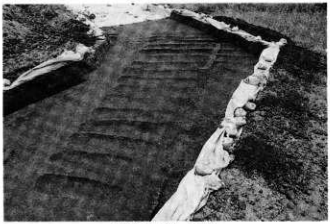
谷部　弥生時代後期土器出土状態

谷部　弥生時代後期土器出土状態

谷部（A区）

古墳時代中期面（P区）

古墳時代中期面　鉄鏃出土状態



畝状遺構（I・K区）

第5号方形竪穴a・b（Q区）

第5号方形竪穴a　礫出土状態

発掘作業風景（第47号住居址）

谷部水没状態（平成7年7月）

報告書抄録

ふりがな	いえしたいせきに
書名	家下遺跡II
副書名	平成7年度茅野市横内土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小池 岳史
編集機関	茅野市教育委員会
所在地	〒391 長野県茅野市塚原二丁目6番1号 TEL (0266) 72−2101
発行年月日	西暦1996年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
家下 (いえした)	長野県茅野市 (ながのけんちのし) ちの	20214	110	35度 59分 38秒	138度 9分 1秒	19950609 19960304	3,550	茅野市横内土地区画整理事業に伴う発掘調査

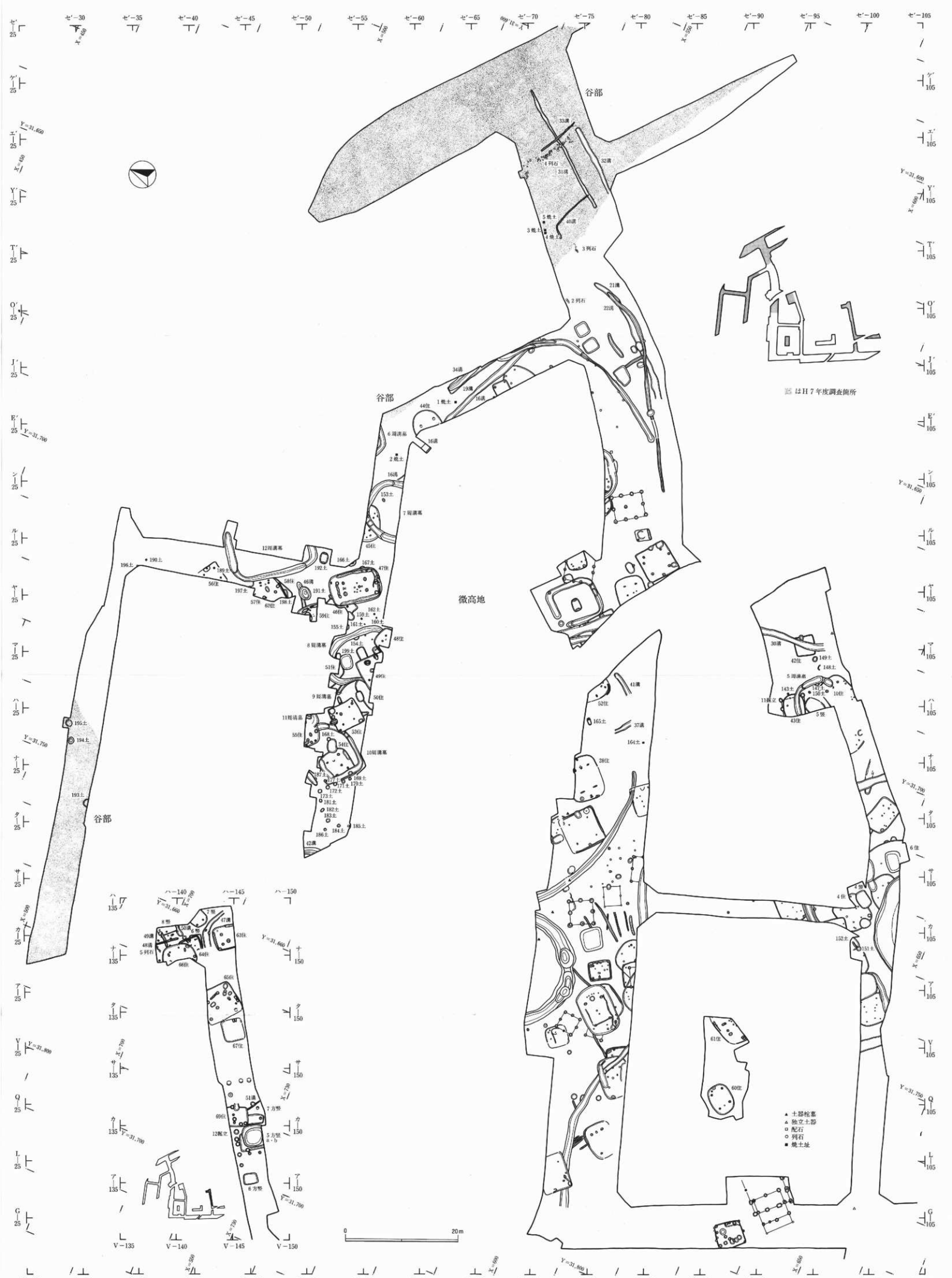
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
家下	集落址	弥生 古墳 奈良 平安 近世	竪穴住居址 27 掘立柱建物址 2 周溝墓 8 溝 14 方形竪穴 3	弥生中・後期土器 土師器、須恵器 内耳土器、陶磁器 ガラス小玉、銅銭	弥生時代から平安時代、近世の集落址

家下遺跡 II

—— 平成7年度茅野市横内土地区画整理事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

平成8年3月22日　印刷
平成8年3月25日　発行

編　集　茅野市教育委員会
発　行　長野県茅野市塚原2丁目6番地1号
☎ (0266) 72−2101㈹
印　刷　ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133 5
☎ (026) 244−0235㈹


谷部
谷部
谷部
微高地
33溝
32溝
31溝
4列石
5焼土
3焼土
4焼土
40溝
3列石
21溝
2列石
22溝
34溝
19溝
16溝
1焼土
44住
6周溝墓
16溝
2焼土
16溝
153土
7周溝墓
45住
12周溝墓
166土
192土
167土
47住
196土
190土
189土
56住
58住
46溝
197土
57住
62住
198土
191土
46住
59住
159土
162土
160土
155土
161土
48住
8周溝墓
154土
199土
51住
49住
9周溝墓
50住
11周溝墓
55住
168土
53住
54住
10周溝墓
187土
169土
170土
171土
172土
173土
181土
182土
183土
184土
185土
186土
42溝
195土
194土
193土
30溝
42住
149土
148土
5周溝墓
143土
147土
150土
10住
118柱立
43住
5竪
41溝
52住
165土
37溝
164土
28住
6住
4竪
4住
152土
151土
61住
60住
▲ 土器棺墓
△ 独立土器
□ 配石
○ 列石
■ 焼土址
ハ−140
ハ−145
ハ−150
7竪
8竪
47溝
49溝
48溝
6竪
5列石
63住
64住
66住
65住
67住
51溝
7方竪
69住
12柱立
5方竪 a・b
6方竪
0
20m
V−135
V−140
V−145
V−150
セ′−30
セ′−35
セ′−40
セ′−45
セ′−50
セ′−55
セ′−60
セ′−65
セ′−70
セ′−75
セ′−80
セ′−85
セ′−90
セ′−95
セ′−100
セ′−105
B−25
B−30
B−35
B−40
B−45
B−50
B−55
B−60
B−65
B−70
B−75
B−80
B−85
B−90
B−95
B−100
B−105
Y=31,650
Y=31,700
Y=31,750
Y=31,800
Y=31,850
X=600
X=650
X=700
X=750
X=800
X=850
X=900
X=950
X=1,000
X=1,050
X=1,100
X=1,150
X=1,200
X=1,250
X=1,300
X=1,350
X=1,400
X=1,450
X=1,500
X=1,550
X=1,600
X=1,650
X=1,700
X=1,750
X=1,800
X=1,850
X=1,900
X=1,950
X=2,000
X=2,050
X=2,100
X=2,150
X=2,200
X=2,250
X=2,300
X=2,350
X=2,400
X=2,450
X=2,500
X=2,550
X=2,600
X=2,650
X=2,700
X=2,750
X=2,800
X=2,850
X=2,900
X=2,950
X=3,000
X=3,050
X=3,100
X=3,150
X=3,200
X=3,250
X=3,300
X=3,350
X=3,400
X=3,450
X=3,500
X=3,550
X=3,600
X=3,650
X=3,700
X=3,750
X=3,800
X=3,850
X=3,900
X=3,950